日本ルワンダ学生会議　第三回本会議

活動報告書

2009年12月18日～2010年1月6日

はじめに

第三回　日本ルワンダ学生会議　報告書を手にとっていただき誠にありがとうございます。

この報告書を通じて、皆様にルワンダ人大学生の日本招致について、ご報告させていただけることを非常にうれしく思います。また同時に、この企画の実現にご協力いただきました皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

早いもので、この団体の前身であるルワンダ・プロジェクトから、より学生主体の交流に重きを置いた「日本ルワンダ学生会議」に移行して３年目を迎えることとなりました。その間、団体理念に「相互理解」「多様性の尊重」を掲げ、２回のルワンダ現地渡航と１回の日本招致を経験してまいりました。

そのたびに味わう感動や驚き、また戸惑いや不安などは、ほかの何にも代えがたい貴重な人生の経験として、深くメンバーの心に刻まれています。机上の議論のみではなく、実際に言葉を交わし、寝食を共にし、互いの文化に触れあうことで、遠く離れた国の人々とも理解しあうことができるのだと、私たちは確信するに至りました。

是非、この報告書に最後までお付き合いいただき、われわれの活動を少しでも深く知っていただけたらと思います。

2010 年 3 月 1 日
日本ルワンダ学生会議
メンバー一同

第3回　日本ルワンダ学生会議　日本招致報告書

＜目次＞

【序章】

【第１章】　第３回日本ルワンダ学生会議　事業全体概要

【第２章】　日本招致活動報告

【第３章】　第３回日本ルワンダ学生会議　本会議活動報告

【第４章】　参加者感想

【付録】

序章

日本側代表挨拶

日本ルワンダ学生会議代表、早稲田大学法学部3年の古屋亮輔と申します。今回、「日本ルワンダ学生会議 第3回本会議」において代表を務めさせていただきました。まず何より、この事業に代表として関われたことに大きな喜びを感じています。

私自身は2008年9月、前身の「ルワンダ・プロジェクト」が学生主体の団体に移行したときにこの団体に加入し、ルワンダ渡航に参加、第1回目の学生会議を経験しました。その際、この活動に対するルワンダ側メンバーの真摯な姿勢や日本について学びたいという強い意欲を感じ、また「相互理解」というこの団体の理念の実現により近付くために、いつか必ず日本へルワンダ人を招待したいという思いを持ちました。

日本にルワンダ人を招致するための最大の問題はやはり資金面です。日本からルワンダに行くための費用を捻出することは私たち学生でも可能ですが、ルワンダ人の学生が日本への航空費や滞在費を払うことはまず不可能です。日本国内の財団からの助成金を得ることが、事業の実現に向け必須となりました。最初に企画書を書き始めたのが2008年12月です。当時の駐日ルワンダ大使、エミール・ルワマシラボ氏のアドバイスを受け、日本の農業技術や宗教の多様性を紹介するという企画を立てました。しかし各地の協力者との交渉やスケジュール設定もすべて白紙状態であり、全く実感のない1年以上先の事業について企画書を書きながら「本当にこんな空想のような企画が実現するのか？」と何度も考えたことを覚えています。それだけに、2009年度に入ってから国際交流基金・三菱UFJ国際財団から助成決定の知らせをいただいたときの気分は言葉に表せないほどのものでした。

助成決定により予算に関しては一応目途が立ちましたが、それでもやはりルワンダから初めて日本へ学生を招致するに当たり、未知な点は山積みです。ビザは取得できるのか、食事は大丈夫か、防寒着は持っているのか、新型インフルエンザにかかったらどうするか‥等、言い出したらきりがありません。正直なところ、ビザ取得でかなり手間取ってしまったため、本当に来日が実現するか否かという全く根本的な部分で開催一週間前まで不安に駆られていました。しかしそれでも蓋を開けてみれば無事ルワンダメンバーは来日し、予定通り事業を成功させ帰国することができました。詳細は本編に譲りますが、本当に密な3週間を共に過ごし、何にも代えがたい経験をすることができました。

最後に、今回の事業は、たくさんの方に支えられ、助けられ、迷惑をかけた結果の上に立つ「第3回学生会議」であったと思います。多かれ少なかれ何らかの形で私たちの活動に携わってくださった方々が、おそらく1000人以上はいるのではないでしょうか。全ての方に感謝の気持ちを伝えるとともに、この日本・ルワンダの交流活動を今後長く継続していくことを誓います。ありがとうございました。

日本ルワンダ学生会議
第3回本会議代表　古屋亮輔

ルワンダ側代表挨拶

It is a great pleasure for me to welcome you on behalf of Rwandans students from NUR Cultural Ballet INDANGAMUCO, to this report. I hope you will enjoy the outcome of your readings through this Report of our trip in Japan during three weeks of 18th December 2009 until 7th January 2010.It is only 16 years after Rwanda known Genocide of Tutsi and it time now to expand and reestablishment of Diplomatic relations, social and educational relations with developed countries. Young people are the pillars in this process as well as the future power of the country. That is whyINDANGAMUCO, the cultural Ballet is participating in this activity which dates not more than 5 years but its fruit is being observed.

This cooperation between Indangamuco and Students of Waseda University, is so paramount for benefiting exchanges culturally, socially but educationally. During this trip, we focused on visiting some areas and especially based on Agriculture, Religion...

In the future, we want to strengthen this collaboration, and the aim is emphasize on academic, social and culture exchanges. We hope that we will succeed if all organizations who supported this trip continue to do it more.

I is my sincere hope that you will discover much in this report and that you will be interested to visit Rwanda to explore the most hospitality of a country of thousands hills.“|We want to be the best we can be - not trying to be others, but rather ourselves - the very best we can be”

God bless you

AKINTIJE SIMBA Calliope
In country Representative of JRYC
Rwanda

関係者挨拶

WAVOC 公認プロジェクト「日本ルワンダ学生会議」の皆さんの頑張りに、心から敬意を表します。タンザニアで実施した別の WAVOC プロジェクトから帰国したばかりの私は、アフリカでの実施については体力的にもお金の面からもたいへんであることを実感しています。とりわけ、今回はルワンダから学生を初めてお招きしたのですから、その苦労や喜びは筆舌に尽くしがたいものがあったでしょう。皆さんの行動力と情熱に感謝します。

WAVOC では 2002 年の設立以来、授業科目とボランティアプロジェクトの「体験的な学習」によって社会貢献を担う人材育成を目指しています。これまで 8 年間で延べ 10 万人が社会貢献活動を行ってきました。その中でも、本プロジェクトは 2005 年から地道に着々と歩みを続け、成果をあげていると実感しています。今後の発展に大いに期待をし、関係各位の更なるご支援をお願いいたします。

最後になりましたが、プロジェクト設立当初から学生を指導してくださっている WAVOC 客員講師の小峯先生に御礼申し上げます。

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）
事務長　外川　隆

僕はジェノサイドから3年後（1997年）に初めて、アフリカ平和再建委員会（ARC）の活動としてルワンダに足を踏み入れた。はじめてのアフリカではじめての紛争経験国だった。人生の転機だった。

それから13年。その間、自分とルワンダとの「関係」と「関わり方」について考えてきた。
ルワンダという国は・・・

開発協力に関わる人々にとっては援助対象国の一つ。
ビジネスに関わる人々にとっては治安が安定して商売できる国の一つ。
平和構築支援に関わる人々にとっては支援対象の紛争終結国の一つ。
平和学、政治学、社会学などの研究者にとっては稀有な研究対象の一つ。
外交官にとっては外交の相手国の一つ。

13年間ルワンダというものに、暴力と平和というものに関わり続けている僕には「それだけじゃないだろう」という何ともやり切れない気持ちがある。

ルワンダと、そこで起きた出来事はそれだけでない歴史的存在の一つのはずではないか。ナチス・ドイツのホロコーストや広島・長崎の原爆と並び証されるくらいの、暴力と和解を人類に問いかける歴史的な出来事なのではないのか？

これは青臭い感傷なのか？

JRYCは大学生の活動であり、職業人の持つプロフェッショナルな能力は持たない。
しかしその一方で、援助屋や商売人が見ようとしない、聞くことができない、伝えることができないモノに触れることができる存在である。

ルワンダのジェノサイドがなぜ起き、そこで何が行われたのかということを歴史という大きなスパンの中に位置づけ、それに多くの人々の目を向けさせる作業は、政治的、経済的利害もなく、組織という制約に縛られることもない大学生だからこそ立ち向かえることである。

そしてそれこそが、ルワンダでの100万の犠牲を弔い、将来の過ちを繰り返さないための方策の一つとなりえるのだと考える。

小峯茂嗣
アフリカ平和再建委員会（ARC）事務局長
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）客員准教授

日本ルワンダ学生会議　団体紹介

＜団体概要＞

略歴

2005年 １０月　早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターが主催するスタディーツアーの形でルワンダ・プロジェクトがスタート。

2008 年　９月　ルワンダにて第一回学生会議を開催

2009 年　３月　団体名をルワンダ・プロジェクトから日本ルワンダ学生会議に改名。

同年　７月　アフリカ平和再建委員会（ARC）との共催でルワンダ研究の専門家による講演会を開催

同年　９月　ルワンダにて第二回学生会議を開催

同年１２月　日本にて第三回学生会議を開催

2010 年　1 月　関西に日本ルワンダ学生会議支部を開設

構成人数

日本側メンバー　13 名（早稲田大学を中心に関東近辺、また名古屋・大阪からも参加）

＊2010 年 2 月現在

ルワンダ側メンバー　5 名（ルワンダ国立大学）

主な活動内容

- 週一回の定期ミーティング
- 勉強会
- 講演会の開催
- ルワンダへの渡航
- 日本への招致

連絡先

団体メールアドレス　japan.rwanda@gmail.com

団体ホームページ　http://jp-rw.jimdo.com/

＜活動理念＞
虐殺が行われた教会の壁にかけられている一枚の布には次のような言葉が書かれています。

「あなたが私を知っていたら、あなたがあなた自身を知っていたら、こんなことは起きなかっただろう」

ルワンダにおいて、情報の主体的入手と、偏見を捨てた相互理解は非常に大きな意味を持ちます。我々にとって、それは人類の悲劇から目をそむけたという自責の念に対し、相手を理解し自分を伝えるという地道な活動からアプローチしようとするものです。そしてそれは紛争・貧困などの社会問題にのみ目を向けていくことを意味するものではないでしょう。国際協力において、問題ありきで先進国として支援することばかりを考えていては、依存関係をつくり、かえって発展を阻害してしまうことすらあり得ます。途上国が真に自律し主体的に自らの豊かさを築いていくには、ともに社会問題を考え取り組む「仲間」が必要なのです。我々は実際に生活している人々と交流し、彼らの現状・価値観・人生を知り、相互理解・尊重に基づき信頼関係を築く中で、ルワンダの'Never again'に対し当事者意識を養うばかりでなく、「自由・平等・尊厳・持続可能性・寛容」の視座から真に豊かで平和な社会を考察し行動していく主体となるはずです。
　近年世界で頻発する紛争における共通課題として宗教・民族対立があります。ルワンダにおいても植民地分離政策と虐殺におけるプロパガンダは人々の間に「憎しみ」と「偏見」を作ってしまいました。ルワンダの惨劇に対峙しようとする私たちは、「『偏見』を取り除き寛容な『人間同士』の関係づくりがひいては平和な社会を構築する」という信念から、学生会議という形で**「相互理解」**を理念に交流しています。会議では日本・ルワンダ両国の歴史や社会問題を広く議論し双方をより深く理解することで、両国のみならず人類の共通課題に向き合っていきます。

＜公認＞
・駐日本ルワンダ共和国大使館
・アフリカ平和再建委員会　(ARC)　事務局長　小峯茂嗣
・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）

＜後援＞
・鶴田綾　一橋大学大学院法学研究科博士課程
・京野楽弥子　英国ブラッドフォード大学院平和学部紛争解決学科修了

インダンガムチョ紹介

インダンガムチョはルワンダの民族伝統ダンス、歌、楽器の演奏を通じて、16 年前のジェノサイドの悲しみから立ち上がろうとする人々に平和と希望の光を届けることを理念とし、活動しているルワンダ国立大学のダンスサークルです。メンバーは総勢 60 名。ルワンダ中の様々な場所へ出向き、その華麗なダンスで観客を魅了します。メンバーの中には海外でのダンスショーで活躍する者もいます。文化が作り上げる平和とは。そんな問いと日々向き合いながら、ルワンダのあたたかい気候と人のぬくもりの中で、伝統ダンスをこれからも後世へと伝えていきます。

ルワンダ共和国基礎情報

（外務省ホームページより引用）

＜基本情報＞

1,正式名称　ルワンダ共和国（Republic of Rwanda）

2.面積　　2,63 万平方キロメートル（日本の四国の 1.5 倍）

3.人口　　1,000 万人(2008 年/UNFPA)

4.首都　　キガリ（Kigali）

5.言語　　キニアルワンダ語、フランス語、英語

6.宗教　　カトリック 57%、プロテスタント 26%、
アドベンティスト 11%、イスラム教 4,6%

7.略史

年月	略史
17 世紀	ルワンダ王国建国
1889 年	ドイツ保護領 （第一次大戦後はベルギーの信託統治領）
1961 年	王政に関する国民投票（共和制樹立を承認） 議会がカイバンダを大統領に選出
1962 年	ベルギーより独立
1973 年	クーデター（ハビヤリマナ少将が大統領就任）
1990 年 10 月	ルワンダ愛国戦線（RPF）による北部侵攻
1993 年 8 月	アルーシャ和平合意
1994 年 4 月	ハビヤリマナ大統領暗殺事件発生をきっかけに 「ルワンダ大虐殺」発生（～1994 年 6 月）
1994 年 7 月	ルワンダ愛国戦線（RPF）が全土を完全制圧、 新政権樹立 （ビジムング大統領、カガメ副大統領就任）
2000 年 3 月	ビジムング大統領辞任

年月	略史
2000 年 4 月	カガメ副大統領が大統領に就任
2003 年 8 月	複数候補者による初の大統領選挙でカガメ大統領当選
2003 年 9-10 月	上院・下院議員選挙（与党 RPF の勝利）
2008 年 9 月	下院議員選挙（与党 RPF の勝利）

＜政治体制・内政＞

1.政体

共和制

2.元首

ポール・カガメ大統領

3.議会

上院（26 議席）、下院（80 議席）

4.政府

（1）首相　ベルナール・マクザ

（2）外相　ローズマリー・ムセミナリ

5.内政

1962 年の独立以前より、フツ族（全人口の 85%）とツチ族（同 14%）の抗争が繰り返されていたが、独立後多数派のフツ族が政権を掌握し、少数派のツチ族を迫害する事件が度々発生していた。1990 年に独立前後からウガンダに避難していたツチ族が主体のルワンダ愛国戦線がルワンダに武力侵攻し、フツ族政権との間で内戦が勃発した。1993 年 8 月にアルーシャ和平合意が成立し、右合意を受け、国連は停戦監視を任務とする「国連ルワンダ支援団（UNAMIR）」を派遣したが、1994 年 4 月のハビヤリマナ大統領暗殺を契機に、フツ族過激派によるツチ族及びフツ族穏健派の大虐殺が始まり、同年 6 月までの 3 ヶ月間に犠牲者は 80～100 万人に達した。

1994 年 7 月、ルワンダ愛国戦線がフツ族過激派を武力で打倒すると、ビジムング大統領（フツ族）、カガメ副大統領による新政権が成立。同政権は大虐殺の爪痕を乗り越えようと、出身部族を示す身分証明書の廃止（1994 年）、遺産相続制度改革（女性の遺産相続を許可）（1999 年）、国民和解委員会及び国民事件委員会の設置（1999 年）等、国民融和・和解のための努力を行っている。

1999 年 3 月には、1994 年の虐殺以降初めての選挙となる地区レベル選挙（市町村レベ

ルより下位）を実施、2001 年 3 月には市町村レベル選挙を実施、2003 年 8 月には大統領選挙が実施されカガメ大統領が当選。政治の民主化が進展している。同年 9、10 月の上院・下院議員選挙及び 2008 年 9 月の下院議員選挙では与党 RPF が勝利した。

＜外交・国防＞

1.外交基本方針

従来非同盟中立主義が基本路線。冷戦時代は東西両陣営と友好関係を維持、現在は、経済開発のため先進諸国との協力に重点を置く。

2.軍事力

（1）予算　6,200 万ドル（2007 年）

（2）兵力　3 万 3,000 人（2007 年）

＜経済＞

1.主要産業

農業（コーヒー、茶等）

2.GDP

29 億ドル（2007 年、EIU）

3.一人当たり GNI

296 ドル（2007 年、EIU）

4.経済成長率

6%（2007 年、EIU）

5.物価上昇率

8%（2007 年、EIU）

6.総貿易額

（1）輸出　200 百万ドル（2007 年、EIU）

（2）輸入　600 百万ドル（2007 年、EIU）

7.主要貿易品目

（1）輸出　コーヒー、茶、錫

（2）輸入　資本材、半加工品、エネルギー財、消費財

8.主要貿易相手国

（1）輸出　中国、独、米国、パキスタン

（2）輸入　ケニア、独、ウガンダ、ベルギー

9.通貨

ルワンダ・フラン

10.為替レート

1ドル＝571ルワンダ・フラン

11.経済概況

（1）農林漁業がGDPの40%以上、労働人口の90%を占め、多くの農民が小規模農地を所有。主要作物はコーヒー及び茶（輸出収入の60%）であり、高品質化により国際競争力を強化する政策をとっている。一方で、内陸国のために輸送費が高いという問題も抱える。

（2）1980年代は、構造調整計画を実施し経済の再建に努めたが、内戦勃発以降はマイナス成長、特に1994年の大虐殺で更に壊滅的打撃を受けた。その後、農業生産の堅実な回復（1998年には内戦前の水準を回復）、ドナー国からの援助、健全な経済政策により1999年までにGDPは内戦前の水準に回復した。

（3）ルワンダ政府は、1996年に「公共投資計画」を、2000年に20年後の経済達成目標を定める「VISION2020」を、2002年には「貧困削減戦略文書完全版（F-PRSP）」を、また、2007年には、第2次世代PRSPとなる経済開発貧困削減戦略（EDPRS）を策定し、これら戦略等を基軸とした経済政策を実施している。2000年12月には、拡大HIPCイニシアティブの決定時点に達し、2005年4月に完了時点に到達している。

（4）カガメ大統領は、汚職対策にも力を入れており、グッドガバナンスの模範国として世銀等からの評価も高い。

＜経済協力＞

1.日本の援助実績

（1）有償資金協力（2007年度まで、ENベース）　46.49億円

（2）無償資金協力（2007年度まで、ENベース）　306.02億円

（3）技術協力実績（2007年度まで、JICAベース）　41.76億円

2.主要援助国（2007年）

（1）英　（2）米　（3）オランダ　（4）ベルギー　（5）独　（日本は7番目）

【第１章】

第３回日本ルワンダ学生会議　事業全体概要

第３回日本ルワンダ学生会議　概要

【事業内容】

開催時期

2009 年 12 月 18 日（金）～2010 年 1 月 6 日（土）

開催場所

東京・京都・鳥取・広島

【事業のきっかけ】

2008 年 9 月、日本側の大学生が 8 名ルワンダに渡航し、ルワンダ国立大学において第 1 回学生会議を開催した。日本側より公害問題や少子高齢化など社会の発展に伴う負の側面をプレゼンし、ルワンダ側からは市民コミュニティの形成と平和構築を目的として活動するダンスグループから虐殺のイデオロギーや青少年のリーダーシップをプレゼンし、各テーマに沿ったディスカッションを行った。日本とルワンダの学生がこのような討論の場を持ったのは両国の外交上初の試みであり、現地で活動する日本人ＮＧＯ職員やＪＩＣＡ、世界食糧計画(WFP)職員の協力も得て、第 1 回学生会議と日本からルワンダへの渡航は成功に終わった。

第 1 回渡航を経てメンバーは国家間の外交関係や ODA 等日本からの一方向的な援助のみならず、日本人とルワンダ人の学生が個人レベルで、対等な立場の人間として接し国家の抱える問題や発展の方向性について相互に理解を深めることの意義深さを学んだ。そしてこの活動を継続する意志を両国学生間で確かめ合った。

この日本・ルワンダ間の学生による国際交流を継続・発展させ、平和構築や文化交流の面での相互理解を深めるために 2009 年 8 月には再びルワンダにおいて第 2 回学生会議を開催した。第一回の渡航より、ルワンダの現在の住民の生の声を聞くため、インタビューやアンケート調査などを実施。また訪問先も UNHCR の協力を頂き、難民キャンプへ、日本の福島でルワンダの教育支援をされているカンベンガ・マリールイズさんの協力を得て、ウムチョムイーザ学園へ訪問させていただいた。

そして今回、第三回会議を 2009 年 12 月に日本で開催する運びとなった。日本での会議開催によりルワンダ人大学生が具体的に日本の産業、文化、人々を理解できるよう促し、平和構築の点では、被爆地・広島の学生とのディスカッションを通じルワンダ社会における、特にジェノサイド関係者の和解の在り方を議論した。また、農業体験では日本の農業の仕組みや技術を体感してもらい、今後の農業技術発展の参考にしてもらうことを計画した。

【事業目的】
① ルワンダ人の、日本に対する多面的な理解を促進する。
②子供からお年寄りまで、日本人のルワンダ人に対する多面的な理解を促進する。
③両国の学生が、両国や世界で起こっている問題に対して共通認識を持ち、友情を育み、確かな信頼関係を築く。
④広島の大学生との連携を通して日本の平和構築の歴史をルワンダ人とともに学び、ルワンダにおけるジェノサイド関係者の和解の在り方を模索する。
⑤事業終了後に活動を紹介する映像を作成・報告会で上映し、日本人のルワンダに対する理解を市民レベルで深める。
⑥国際社会の一員であるという意識を、より多くの若者に抱かせる。

コラム　年末年始はメンバーの実家にホームステイ

ルワンダ人５人は、東京都青梅市にあるメンバーの実家に迎えられ、数日間ゆっくり過ごした。ここでは、日本の一般家庭が年末年始をどのように過ごすのかを体験してもらった。皆で紅白を見ながら歌って踊ったり、お父さんとお酒を飲み交わしたり、ピアノ練習や映画鑑賞などの初めての経験をしたり、近所の公園でのサッカーをしたり、元旦は親戚一同を会した食事会に参加したりなど、ホームステイならではの体験が盛りだくさんだった。

印象深かったことは、迎え入れてくださったご家族の皆さんの温かいもてなしである。特に、ご家族が作る家庭料理にルワンダ人は感動していた様子だった。というのも、ルワンダ人の口に合うように食材から味付けまで特別な工夫が為されていたのである。来日後日本食に苦労していたかれらの食欲が、ここで一気に回復したようだった。

（大久保）

ご家族の皆さんと

ピアノに挑戦

第３回日本ルワンダ学生会議　スケジュール

実施日	実施内容	実施地
12 月 18 日	ルワンダ側メンバー、日本に到着	関空
	移動（関西国際空港→京都）	京都
19 日	妙心寺訪問、二条城観光	
20 日	移動（京都→鳥取）、北村教授講義	鳥取
21 日	中学校訪問、ホームステイ	
22 日	JA 施設訪問	
23 日	休息日	
24 日	鳥取大学訪問、学生会議①	
25 日	鳥取観光（三朝温泉）、移動（鳥取→東京）	東京
26 日	休息日	
27 日	歓迎会、ダンス練習	
28 日	ダンスイベント	
29 日	学生会議②	
30 日	学生会議③	
31 日	休息日	
1 月 1 日	日本の正月文化体験	
2 日	学生会議④	
3 日	東京観光（秋葉原、上野）、移動（東京→広島）	広島
4 日	ピースビルダーズ基調講演、ディスカッション	
5 日	原爆ドーム等見学、被爆者の話	
6 日	関空へ移動、ルワンダメンバー帰国	

第２章

日本招致活動報告

京都

【スケジュール】

12 月 19 日	二条城見学 妙心寺訪問

【訪問箇所報告】

妙心寺訪問

担当者：海原 早紀

１、企画目的

「最先端 IT 技術、ビルが立ち並ぶ都会」というイメージを持たれがちな日本であるが、京都では古来より伝わる日本の伝統的な一面と、その文化と現代日本人の関わり方についてルワンダ学生に紹介する。

日本はその宗教、文学、建築、舞踊、音楽において世界に誇れる文化を持つ。京都の名所を訪れることによってルワンダの学生にその歴史と文化を実際に体験してもらう。

また、ルワンダ人の８０％が信仰心熱いキリスト教徒であるのに対して、日本人のほとんどが無宗教であるという点にも注目したい。これは同時に、私たち日本人が多数の宗教の存在を認め、生活に取り入れていることを意味する。例えそこに信仰心が存在しなくても、私たちは神社やお寺への参拝を欠かさないと同時に、年末にはクリスマスを祝う。異なる宗教の文化や教えが対立することなく共存する日本の社会を紹介したい。

また、妙心寺の副住職に仏教の教えについても伺う。

２、企画概要

内容：二条城見学、妙心寺・春光院訪問、川上全龍副住職と対談

参加者：日本ルワンダ学生会議（日本人メンバー6 人、ルワンダメンバー5 人）

場所：二条城、妙心寺、春光院

３、報告

◆当日スケジュール

12：00	二条城見学
13：00	昼食
14：00	妙心寺、春光院訪問 川上全龍副住職対談
16：00	妙心寺退蔵院訪問

◆二条城見学

宿から近い二条城の城内、庭園を見学した。二条城は、１６０３年、徳川将軍家康が、京都御所の守護と将軍上洛のときの宿泊所として造営し、３代将軍家光により、伏見城の遺構を移すなどして、寛永３年(１６２６年)に完成したものだ。ルワンダ人にその歴史の長さを伝えると、信じられないという表情であった。庭園も見学し、日本人ルワンダ人の交流を深めた。

◆妙心寺、春光時訪問

午後は妙心寺境内の塔頭寺院、春光院を尋

ねた。川上全龍副住職に寺院の案内をしていただいた。
まず、座禅体験に挑戦した。座禅とは心を集中させ、身・息・心を統一させ安定な状態に導くことであり、宗教に関係なく実践することもできる。心理学的にもトラウマを解放する効果があると聞き、ルワンダメンバーからジェノサイドＰＤＳＤにも応用できるだろうというコメントもあった。
次に寺内の文化財を拝見した。「南蛮寺の鐘」は元来イエズス会の教会にあったものを保存した重要文化財である。また、本堂の絵画には白ゆりや三位一体を表すキリスト教に関するシンボルが隠されていた。このように春光院はキリスト教徒の関係が深い。

一方で寺院の庭園は神道の形式をとっていて、神を祭った杜もある。伊勢神宮との関係もあると聞いた。
　最後は川上副住職と質疑応答の時間であった。以下ルワンダ人からの質問と川上副住職の質疑の要旨を記す。

質問：仏は神ですか？仏教の教えはどのようなものですか？

川上副住職:「仏は神ではなく、偉大なる師。仏教で重要な三つの教えとは『慈悲』『中庸』『無常』である。」

質問：天国は信じますか？

川上副住職:「仏教の宗派による。また、日本で先祖を祭る習慣があるのは儒教や道教の影響があるからである。」

質問：布教はしますか？

川上副住職:「無理に信者を増やそうとは思わない。信仰は個人の選択である。」

質問:住職の生活について教えてください。

川上副住職:「住職は寺での修行が終わると社会にでる。特に私はいかに現代社会・コミュニティとつながりを持つかを重要な課題として考えている。例えば私は結婚もしているし、野菜以外のものも平気で食べる。私は現実的に住職という仕事に向き合っている。」

◆退蔵院訪問
最後に塔等寺院である退蔵院も訪問した。狩野元信作庭の枯山水庭園や、国宝「瓢鮎図（ひょうねんず)」を拝見した。

４、担当者感想

最初に見学した二条城では、ルワンダメンバーがさほど興味を示さなかったので心配したが、妙心寺の企画には積極的に質問もしてくれた。やはり、日本文化について何も知識がないため、二条城でもしっかりと説明できる人間を用意しなければいけなかった。

春光院ではキリスト教とのつながりがあるという点でルワンダ人は大いに関心を持てたようだった。キリスト教の教義が、仏教の教えと食い違う点について質問が多かったことが印象的だった。また副住職様のお話は日本人にとっても大変興味深いものであった。私たちの生活には様々な宗教の影響が浸透していて、文化として根付いていることを学んだ。ルワンダ人にもこのように宗教に対して寛容な日本文化が伝わったと思う。

５、ルワンダ大学生感想

In this site I was so happy to see Boudhist, koz always we heard it in history at School. In addition, how they so intelligent in designing gardens and how they do meditations, were impressive to me.

Green Tea, I was so curious to see if it is fresh tea just from field or if it is dry tea, and I saw how they make it andit so good for me. The technique of Meditation is helping me also. So it was so good for me to be there.

（カリオペ）

By visiting NIJO CASTLE I knew the history and culture of Japan. As Rwanda, Japan has a precious culture. I really appreciated even on the road the behavior of old people we met.

At SHUNKOJI TEMPLE we met a Buddhist Priest who explained us about the religion in Japan and that was strange for me because it is deferent from my faith. He explained also what is meditation, how to do it and its importance. That was new for me, I learned a lot.

（ナディーン）

We visited **NIJO CASTLE**: It is an interested place and good for anybody who wants to know history, the generosity…. of Japan. This house has been built in 1600s (MOMOYAMA Period) but it looks new and modern, remember that NIJO castle is made in wood.

（モーリス）

鳥取

【スケジュール】

12月20日	鳥取大学北村教授の講義
21日	倉吉西中学校訪問 ホームステイ
22日	JA 鳥取中央訪問 元鳥取大学吉田教授訪問
24日	乾燥地研究センター訪問 鳥取大学でのディスカッション
25日	三朝温泉観光

【訪問箇所報告】

鳥取大学講義

担当者：大山　剛弘

1、企画目的

・水利用についての日本の研究者の見解・方法論を知り、ルワンダ、そしてアフリカ全土的な水状況の改善に向けた今後の双国間の協力関係について考える機会とすること。

・学生であることに対する２国間の意識の共通点・相違点を、教授にも参加いただく実際の講義を通じて発見すること。

2、企画概要

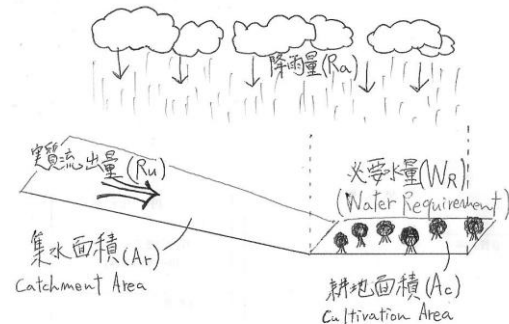
内容：北村義信教授による「アフリカ地域での水利用について」の講義聴講

参加者：日本ルワンダ学生会議のメンバー（ルワンダ人大学生５名、日本人大学生５名）

場所：鳥取大学湖山キャンパス

３、報告

この講義では、灌漑の基礎用語の解説から始まり、乾燥地域での手法についての紹介とそしてそのルワンダにおける応用について議論を行った。

◆灌漑の必要性の検討

Eo:降水量に対する有効流出率（run off percentage） Er:降水量に対する有効利用可能率(co-efficient of effectiveness of rainfall) Ea:流出量に対する取水可能率(application efficiency)

上のようにそれぞれ定義する。

まず耕地における降水により必要水量が確保できる場合とできない場合、つまり

$W_R - Ra \cdot Er \leqq 0$・・・①

$W_R - Ra \cdot Er > 0$・・・②

が考えられ、②のようになる場合に灌漑が必要となる。

耕地での水の確保に関してＥｒ が重要であることが分かるが、この係数はその土地の土壌・気候に大きく左右される。例えば乾燥した地域では蒸発量・吸収量ともに増大して流出量は減少→Er は低下し、逆もまた

真である。
単純な降水量だけでなく、それをどれだけ利用できるかも水状況には大きくかかわるのだ。
そして日本は全国平均で年降水量は1,749mm で、その流出率も 60%あまりである。砂漠地帯などは言わずもがなだが、地中海地域の降水量 600mm 程度、流出率 40%以下という状態を考えても恵まれていることが分かる。

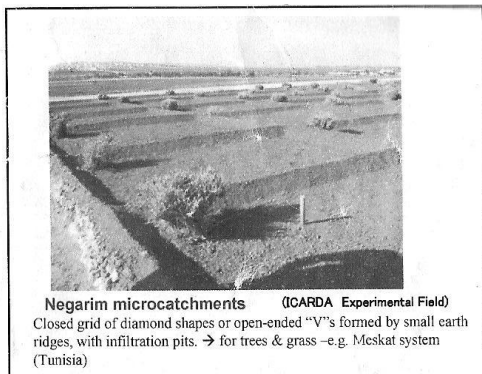
◆マイクロキャッチメント灌漑
そして灌漑をおこなう場合にも様々な手法があるが、ここで紹介されたのはマイクロキャッチメントという手法である。この手法は、必要とされる設備が比較的少なく、条件さえ合えば経済的な取水ができることが特徴だ。
そこでは図のように耕作地に対して集水域を設け、必要な水量を確保する。
この方式は何千年も前からイスラエルで用いられたものに、１９５０年代から科学者が改良を重ねたものである。
また耕作地への降水と取水域からの流出による確保水量と必要水量の関係については、
Ra・Er・Ac（降水）＋Ra・Eo・Ea・Ar（流出）≧Ac・W_R
を満たす必要がある。ここから取水地と耕作地の面積比 Ar/Ac(Catchment & Cultivate area Ratio:CCR)は
Ar/Ac＝W_R－Ra・Er/Ra・Eo・Ea
となる。イスラエルの伝統的な手法ではこの値は３０と定められていたが、取水地の地形改良や膜を地下に埋め込むなどより効率的に取水をすることが求められている。
また図の場合はinternal harvesting といって耕地と取水地が一体化しているが、external harvesting という耕地の外から取水する方法もあるという。

◆ルワンダへの応用について
「千の丘の国」の名の通り、ルワンダは全国土にわたって丘陵地帯が広がる。その傾斜を有効に使えばルワンダでも活用できるのでは、という指摘があった。そしてルワンダの学生たちによれば、すでに一部の地域でこの方式は導入されており、一定の効果は上がっているということだった。しかし、土壌が酸性化している地域があるため得られる水が耕作に適していない場合もあるということだ。また十分な取水面積を確保するのが難しいという指摘もあった。
だが最大の問題点はまだ十分な調査が行われていないことだろう。ルワンダは降水量も 1,000mm を超え、米・イモ類・バナナと多くの主食穀物も生産できる土壌もある。
日本も広い国土を持たず山がちであるという意味でルワンダと通じ、貢献できる技術を先進国の中でも多く持っていると思う。
今後の 2 国間の協力関係が、一層期待される。

４、感想（日本・ルワンダ）

講義内容への感想については３に書いたので、ここではこの企画でのルワンダ人学生たちの姿勢から感じたことについて書く。
終始印象的であったのは、ルワンダ・特に理系学生からの質問や意見が非常に活発にされていたことだった。
講義内容がやや文系学生には馴染みのないものであり、ルワンダ側の３／５が理系であったのに対して、日本側は１／５だという要素もあった。だがやはり、彼らが水不足という現実に常に面しているということが何より積極性に結びついていたのだと思う。アフリカ諸国中では水に恵まれるルワンダでも、常に水を安定して得られる状態には程遠く、それは中心地から離れるだけ顕著であった。急速な発展が注目される近年のルワンダだが、食料の自給率や絶対貧困率の点からみれば依然最貧国の一つである。水の確保からの農業の進歩がさしあたりの最優先課題であることに間違いはない。
それに比して、自分が普段いかに「水」という基本的な資源を意識していないのか、そしてそれほどの豊かさを享受していることを改めて実感した。
そしてそうした先天的なものだけでなく、後天的、つまり技術力による水の加工についても日本はトップレベルにある。蛇口をひねればいつでも飲める水が出てくることは、ルワンダ人たちも到着時から驚いていた。
水関係だけではない。日頃自分たちが扱う技術は実は世界レベルではとても希少なものだ。そしてその維持には、ハード・ソフト面共に不断の努力が必要である。
例えば橋梁などのインフラの老朽化は日本各地・各種で進行しているが、国民がその危険について意識が高いかというとそうではない。今の状態が当たり前だという意識があるようにも思える。
世界レベルで見て、どれほど希少なことなのかも改めて考えにいれて、対処していくことはこれからの日本に不可欠なことであると感じた。
また講義の終了後にモーリスが、鳥取大－ルワンダ国立大の農学部間のオフィシャルな関係づくりを直接教授に打診していたが、学生として最も強固な活動の基盤はやはり大学で、こうした関係を通じて学生として社会に影響していける立場に僕たちはある。
ここでもルワンダ側の「大学生」であることに対する意識の高さをひしひしと感じた。
先の水資源の話でもそうだが、日本ではもはや大学生であることについて特別な意識を感じる状態にはないだろう。心のどこかで当たり前だと感じているのだと思う。それはいかに私たちが恵まれているかを表してもいるわけだが、いつまでもこの状態が続く保証はどこにもない。
個人的には現在の所謂ゆとり教育の理念を否定するつもりはない。そこから得られる型にとらわれない自由な発想というものも確かにあるだろう。ますます広がりをみせる「オタク」文化にも寄与しているように思う。ある一つの事柄に対して彼らの持つ興味・知識というものはしばしば驚愕させられる。
だが同時に、本来どうあるべき立場にいるのか、社会に対して自分たちがどう寄与していけるのかを意識することも重要だろう。
こちらの面が「大学生であること」の件についても及んでいないとは、よく最近取り

上げられている。そこを今回の講義での彼らの姿勢を通して改めて実感した。
総じて「当たり前」と感じること、そのプラス面マイナス面を改めて考えさせられた企画であった。

Negarim microcatchments (ICARDA Experimental Field)
Closed grid of diamond shapes or open-ended "V"s formed by small earth ridges, with infiltration pits. → for trees & grass –e.g. Meskat system (Tunisia)

５、<u>ルワンダ大学生感想</u>

At TOTTORI UNIVERSITY we met Professor KATAYAMA who explained his research on water and soil conservation in EAST AFRICA and Arid land. I learned a lot about irrigation techniques, and I like his advice of solving our problems our selves as Rwandese, and not to wait for a help of foreigner.
（ナディーン）

-The lecturer by the professor of Tottori University about the water supply was very helpful to us because our country is needed of these techniques as country whereby so many citizens do not access easily to water
（マリーン）

中学校訪問

担当者：岩垣 穂大

１、<u>企画目的</u>

・平和構築や伝統文化といったテーマに対し生徒たちが主体的に学ぶきっかけを与えることで、将来を担う若者のピースビルダーとしての自覚や伝統文化の価値の再発見を促す。

・当団体が設定したテーマに対し、大学生による指導、大学生との交流を通じ、生徒たちが自ら疑問点や解決策自ら考え、行動する力を育てる。

・日本に来たルワンダ人大学生に対し地方の中学校を紹介することで、日本の教育システムや現場の環境を理解出来るよう促す。

２、<u>企画概要</u>

内容：総合的な学習の時間におけるルワンダ人学生との交流
参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー
（ルワンダ人大学生５名、日本人大学生５名）
倉吉市立西中学校２年生 １２３名
倉吉市立西中学校関係職員 ３５名
日時：2009 年 12 月 21 日（月）
場所：鳥取県倉吉市立西中学校

３、報告

◆当日スケジュール

10 :00	到着
	学校案内
	日本の学校システムの説明
11 :00	全体交流
	ルワンダについての説明
12 :00	学級交流
13 :00	給食体験
14 :00	授業に参加
15 :00	ダンス交流会

◆学校案内・日本の学校システムの紹介

校長室にて、日本の学校制度の紹介をしていただいた。ルワンダの教育制度と異なる点も多く見られ、「どのような科目に生徒は特に興味を持つのか」「高校・大学進学をどのくらい意識しているのか」などさまざまな質問が飛び交っていた。

◆全体交流・ルワンダについての説明

全体交流では、まず始めに、ルワンダ共和国の紹介プレゼンを行った後、渡航の際のドキュメンタリーを流し、残った時間を質疑応答にあてた。中学生のほとんどが、ルワンダについて学ぶのは初めてで、とても興味深そうに話を聞いてくれていた。

◆学級交流

学級交流ではイスを並べて円を作り、中学生がルワンダ大学生へ、ルワンダ大学生が中学生へ質疑をおこなった。質問内容は、お互いの国の文化や歴史、また日常生活や趣味など多岐にわたった。

◆給食体験

給食では、中学生と一緒に配膳の作業も経験した。メニューはご飯やチキンなど比較的食べやすいものであり、また、会話などを楽しみながら食事をすることができた。

◆授業体験

授業体験では、それぞれ理科、数学、社会、美術の４クラスにお邪魔した。美術のクラスでは、色ビニールを使ってステンドグラスを製作するという内容であり、終始和やかな雰囲気で中学生と一緒に作品を作り上げた。

◆ダンス交流会

ダンス交流会では、まずはじめにルワンダ側から伝統のダンスを披露した。この日のために、来日前から練習してきたというダンスは、アフリカ独特の衣装や音楽と相まって、実に迫力あるすばらしいものであった。次に、中学生のほうから女子は日本の伝統ダンスであるソーラン節を、男子は文化祭の合唱コンクールで歌ったという「遠い日の歌」の合唱を披露してくれた。歓迎の気持がこもった中学生からのプレゼントに、ルワンダ大学生たちは笑顔をうかべ、その場を楽しんでいた。このあと、ルワンダ大学生が中学生に彼らの伝統ダンスの指導を行った。円を作りお互いじゃれあう姿は、本当に両者の心が打ち解け、ダンスを通じて一つになれたのではないかと感じさせるものであった。最後に、お互いの代表が１日の感想を述べ、交流会は終了した。

３、担当者感想

日本の中学生がアフリカの文化と出会った。歌、ダンス、楽器演奏。アフリカ文化はその温かな気候とともに、人の心を楽しませてくれる。今回の出会いで、少しでもそんな魅力が伝わった幸いである。

はじめはぎこちなかったが、給食・授業参観と体を動かし、言葉を交わしていく中で、だんだん両者が打ち解けていった。そして最後には、一緒にルワンダ伝統ダンスを踊り、心を通わせた。

これからも、手紙のやり取りなどを通し、交流を継続させてゆきたい。そして、中学生の皆さんには、自分の興味をとことん追求し、知らない世界を知り、大きな大人になってほしい。

４、ルワンダ大学生感想

At this school, I was so excited, to see how they welcome us. So kindly, humbly and Headmaster invested so much in this trip to school.

In addition, how students were happy to see University and Rwandan people, black also, was so great until it makes me crying for wondering why people when they

are young they seem to be innocent but at late ages, they change and become so strange, that is why wars, conflicts,…I was wondering what can I do for making those students be in cooperation with Rwandans high schools?? And teach them Culture of Peace??
Sharing lunch-food with students was also exciting with studying Rwanda geography.

（カリオペ）

In JUNIOR HIGH SCHOOL, I learned how to make a Japanese bird that was interesting! I also learned Chemistry but I was surprised that they do the experiences in laboratory, which I did when I was in Senior high school. That means their education is more advanced. After that we danced and tried to exchange the culture that was wonderfull.I liked the song they sang for us, I was almost crying. But the best thing was how they are so kind, genereous and innocent.

（ナディーン）

-At Junior High School I appreciated, I appreciated all means used that day in order to make our visit comfortable, we had fun with students as well as teachers. The dance was a good time of exchanging our cultures and we liked a lot the Japanese students' performance

（マリーン）

ホームステイ

担当者：古屋 亮輔

１、企画目的

・ ルワンダ人が日本の一般家庭で一晩過ごすことにより、日本の家庭でのごく日常的な生活に対する理解を促す
・ 共に宿泊し、長い時間を共有する日本人メンバーとの親睦を深め、友人としての信頼関係を構築する
・ ホームステイ先の御家族がルワンダという国に関心を持ち、その国の人々のことを偏見なく理解するための機会を与える

２、企画概要

内容：ホームステイによるルワンダ人と一般家庭の交流
参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー（ルワンダ人５名、日本人４名）
倉吉市立西中学校教員の方々とその御家族（黒川家、太田家、ケーオファー家、長谷川家、中本家）
日時：2009 年 12 月 21 日中学校での交流終了後～翌朝
場所：各家庭

３、報告

私、古屋亮輔は Ephraim（エフレム）と一緒に黒川教頭のお宅にホームステイすることとなった。もともとはケーオファー家にお世話になる予定だったのだが、直前で Marine（マリーン）・ 大山組と入れ替わった。

太田家、長谷川家は中学校での交流が終了してすぐに先生の車で各家庭へ帰宅した

のだが、黒川先生、ケーオファー先生、中本先生のお宅へ泊まるメンバーは帰宅前にボウリングを楽しんだ。(コラム参照)

ボウリング終了後に Calliope (カリオペ) と別れ、エフレム、マリーン、大山、私の 4 人はケーオファー家で経営する中井旅館に立ち寄り、温泉を楽しんだ。ルワンダ人 2 人にとっては初めての温泉となったわけだが、予想に反してこれが大好評で、男性メンバーは 30 分ほど貸し切りの浴場ではしゃいでいた。存分に温泉を満喫したところでこの旅館に宿泊するマリーン・大山組を残し、私とエフレムは黒川先生の運転する車で帰宅した。

(ケーオファー家の様子)

黒川家に着いたのは 8 時頃、黒川家では黒川教頭、奥さん、高校生の娘さん、おばあちゃんが暮らしている。大学生の子供たちもいるが、彼らは現在鳥取を離れているということであった。日本の過疎化の現状が覗えた。当日までマリーンが行く予定であったため、最初にエフレムを見たときは予想以上の大きさにたいそう驚いており、また階段を登るときに頭をぶつけないか非常に心配していた。

家族へのあいさつを済ませて 2 階へ上がると、早速夕食が始まった。まず黒川先生、エフレム、私で食卓を囲みビールで乾杯。ほどなくしてお母さん、娘さんが次々に食事を持ってきて下さった。メニューは黒川先生特製のおでんや焼き鳥、カニなど。エフレムは基本的になんでも食べるのでこの日もおいしそうに日本食と日本のビールを楽しんでいたが、「カニ」だけはどうしても手をつけられなかった。怖いらしい。かくいう私も内陸県育ちなのでカニとはあまり縁がなく、カニの身を箸で食べようとしていたら、そこはかぶりついて食べるようにと黒川先生に指導された。

ところで、これは岩垣家でも感じたことなのだが、鳥取の女の子は食事の時非常によく働くと思った。彼女らは自分の食べる時間を犠牲にしてまで客人をもてなし、食事の準備を手伝っていた。帰国前、ルワンダ人メンバーは日本人のホスピタリティに驚いたと話していたが、日本人の私たちでさえ驚く素晴らしいもてなしであった。

さて、食事が進めばお酒も進む。晩酌もまた日本の食文化である。後から聞いた話だが、黒川先生はいわゆる酒豪で、今まで飲み負けたことはないらしい。だがそこは私もエフレムも負けてはいない。エフレムの大好きなアサヒビールから始まり、黒川先生自慢のウィスキーや焼酎を数時間に渡りご馳走になった。

酒が進み次第に饒舌になった私たちは、本当にたくさんのことを話した。

エフレムは自分が生まれる前、内戦が続いていたルワンダから家族がタンザニアに移住したこと、そして自分がタンザニアで生まれジェノサイド後にルワンダへ帰還したということをゆっくりと話してくれた。

そして今でも彼は家族が大好きで、休日には必ず家族の仕事や家事を手伝っているということだった。黒川家の人々はエフレムの話をとても真剣に聴いており、また事前に地図やインターネットでもルワンダについて調べていたということだった。上機嫌になったエフレムは娘さんの地図帳を片手に、ルワンダを出発してから日本へ来るまでのルートを説明していた。「日本の一般市民がルワンダのことを知る機会を作る」というこの本会議日本開催の目的が、ここでは間違いなく達成できたと実感した。

黒川先生と私は自衛隊の話で盛り上がり、エフレムへの通訳もそこそこに語り合った。私も自衛官の父を持つ手前、日本の防衛に対する関心は一般人より高いと自負する。黒川先生が持ってきた 2010 年自衛隊カレンダーを肴に、戦車戦艦戦闘機、総合火力演習、果ては沖縄基地問題まで、非常に密な議論ができた。

楽しい晩酌も 11 時過ぎには終わり、布団が敷かれた。ここでも黒川家はルワンダ人女性が来ることを想定してピンク色の布団を準備していたと謝られ、思わず笑ってしまう。そして就寝前、常春気候のルワンダ人エフレムが寒くないかと心配しておばあちゃんが訪ねてきたのだが、心配御無用。彼はいつもパンツ一枚で寝ているのである。この日も当然のように裸で寝ようとしていた彼を見ておばあちゃんはたいそう驚いていた。

（おばあちゃんと一緒に）

翌朝、朝食を済ませた後おばあちゃんがデザートのみかんと歯ブラシとタオルを持ってきてくれた。日本のみかんが大好きなエフレムは大変喜び、上の写真のようにとびきりの笑顔で写真を求めていた。また、今家を離れている子供たちはちょうど私と同年代であり、おばあちゃんは私に対して何度も「孫が帰ってきたみたいで嬉しい」と言ってくれた。家族のことをたくさん話してくれ、就職のことや大学のことなどたくさん質問を投げかけてきたり、アドバイスをくれたりした。私は近いうちに必ずまた来るとおばあちゃんに約束し、万感の思いで黒川家を後にした。別れ際もおばあちゃんは車のフロントガラスが凍るほど寒い中外まで見送りに来てくれ、姿が見えなくなるまで手を振ってくれていた。

＜各メンバーのホームステイ先＞

Calliope	中本先生
Marine,大山剛弘	ケーオファー先生
Nadine,海原早紀	長谷川先生
Maurice,千田大介	太田先生
Ephraim,古屋亮輔	黒川先生

４、感想

今回のホームステイは私自身にとっても素晴らしい体験になった。実は私にとってホームステイは人生初であり、またエフレムとはそれまでじっくり話す機会がなかったため、組み合わせを聞いたときは正直うまくできるか不安だった。しかしいざ来てみると黒川家のみなさんは非常に手厚いもてなしをしてくださり、ルワンダに対しても、また私たち日本ルワンダ学生会議の活動に対しても強い興味をもっていることがわかった。日本の一般市民、特に地方の人々にルワンダという国を知ってもらおう、という目的が達成できたと実感した。他の家庭でもホストファミリーのみなさんが日本食や日本文化を積極的に紹介して下さったということで、両国の学生会議メンバーにとって非常に刺激的、かつ心温まる体験になったようだ。大田先生の奥さんと息子さんは鳥取を発つ夜にわざわざ駅まで見送りに来てくれ、お土産にマスクとホッカイロを下さった。とても実用的なお土産をもらってメンバー一同感謝した。

とにかく、全くの他人の家で普段まったく話す機会がない立場の方と熱い議論ができ、こんなにも居心地の良さを感じられるとは思っていなかった。私は個人的に再び倉吉と黒川家を訪ねたいと、強く思う。ひょっとしたらこの企画を最も楽しんでいたのは、ルワンダ人ではなく私だったかもしれない。

５、ルワンダ大学生感想

At the homestay, the Hosegawa family is a cool family, we went there to experience Japanese style of life and I think I gained a lot of knowledge. They are a kind family, I ate there so many Japanese food like Sashimi,…my stay was lucky and I'll never forget them, and please help me to get their contacts to keep in touch.

（マリーン）

JA 鳥取中央訪問

担当者：岩垣 穂大

１、企画目的

ルワンダでは国民の 84％が自給農業に従事し、国の経済は圧倒的に農業に支えられている。
しかしルワンダの農産業は、耕地がほとんど灌漑されておらず、機械の使用もみられない。また、国民の 40％が栄養不良に陥っており、西アフリカ諸国のなかでもその食料事情は厳しい。そして農業従事者の生活は特に貧しく、国民平均に比べてその GDP ははるかに低い。
ジェノサイドという悲惨な過去から 15 年が経ち再び歩みだそうとしている彼らにとって、生活をより豊かにするため農業という分野において前進することは重要な課題である。
ルワンダでは今後、新しい技術や機械を導入し農家の生産効率性を高めていく必要がある。また換金食物を栽培・販売する際に、より多くの収益を得る経営法や販売方法も開拓せねばならない。そして国民の健康のため、栄養価の高い野菜やたんぱく源となる穀類の栽培などの導入も図るべきである。
そこで本企画は、現在ルワンダが国を挙げて進めている政策を実行する上で参考になるような農業技術や加工工場、及び日本の農業ならではの施設をルワンダの学生に見学してもらう。
日本で実際に見学、体験し、勉強した農業の知識を母国の食糧生産力を向上させるアイディアにつなげてもらうことが目的である。
また昼食には実際自分たちで収穫した食物を一緒に調理し食べることによって、農家や地域の人々と交流する。

２、企画概要

内容：JA 鳥取中央に訪問し、表敬訪問及び農業組合についてのお話を聞かせていただく。昼食の時間には農家の方々と採れたての野菜を調理しいただく。イチゴ栽培ハウス、ブロッコリー栽培畑、大山乳業などさまざまな農業施設を見学する。

参加者：日本ルワンダ学生会議のメンバー
（ルワンダ人大学生５名、日本人大学生５名）

日時：2009 年 12 月 21 日（月）

場所：JA 鳥取中央、三朝イチゴハウス、満菜館、大栄花ハウス、ブロッコリー選果場、牧畜農家、ライスセンター、大山乳業

３、報告

◆JA 鳥取中央

まず、会議室で訪問のあいさつと団体の紹介を行い、JA についての詳しい説明をしていただいた。様、坂根様、栗原様、上本様をはじめ多くの方がお集まりくださり、現場ならではの専門的な話も聞くことができた。

◆　三朝イチゴハウス

三朝町にあるイチゴハウスを訪問した。クリスマスシーズンで最も状態のいいイチゴを、食べ放題でいただいた。安定した温度、土、肥料で作物を栽培することのできるハウスに、農学部のモーリスはとても興味を示していた。ここでは、大豆を豆腐、おからに加工する施設も見学した。

◆　満採館

訪問する 10 日前にオープンしたばかりの、採れたての野菜やきのこ、新鮮な肉や魚など販売する施設で、地元の婦人会の方々が、地元の特産品の長いもを使ったお好み焼き、たくさんの野菜を使ったトン汁を作って準備してくださっていた。この味は、ルワンダ人たちにも好評で、おかわりをして食事を楽しんでいた。

◆大山乳業

中国・四国地方で最高峰の山、大山。その麓でのびのびと育った牛のミルクを集め、加工し県内外に出荷している工場を見学した。ルワンダでは１つの家庭に、１頭の牛を配り、家族の栄養管理、またミルクを加工し販売し収入源とすることを目的とした政策が行われている。この工場での見学は、将来的にルワンダで家畜産業が広まった際、応用できるヒントになったのではないか。

◆　ライスセンター

収穫した米を乾燥させ、品種ごとに専用のタンクで出荷まで保存を行うカントリーエレベーターという施設を訪問した。地上１５メートルをこす巨大な施設に一同驚きを隠せなかった。

５、感想

日本の農業について様々な面を紹介したが、すぐにその技術をルワンダで応用することは難しいことも承知している。将来的にルワンダでの農業生産の向上につながればと企画した農業体験は、実にさまざまな方の協力により、ひときわ充実した内容のものとなった。これからも継続的にこのようにアフリカの学生に日本の農業を紹介し、飢餓が深刻である地域にも食料が届くような世界にしていきたい。

６、ルワンダ大学生感想

Beyond these visits we realized also a

field trip that had a purpose of enhancing our skills in agriculture:

In Prefecture of Tottori,we visited **JA** (Japan Agriculture) which is an organization that gathered many farmers and enable them to increase the productivity.

I liked how this organization is cooperative to JRYC members because they took a whole day to explain us how they proceed their activities.

I appreciated their idea s when we was in a meeting room at JA office, saying that the Africans have to take an effort to be developed by themselves in agriculture and then they tried to motivate us through the tours we did with them in their different fields and they show us how they:

cultivate some crops in winter(flowers, fraises, …)

store technically the rice after harvesting,

grow the caw ,especially in winter season ,

Market the products.

The remarkable problem is that many Japanese are leaving agricultural sector because of missing big income from agriculture and therefore it's cause the increase of price for all agricultural products in Japan.

As this JA promote the graduated students from Tottori University, we would like to encourage other NGOs to do the same to promote the students who have the skills related to that NGOs works.

（モーリス）

During our visit at JA, we got the explanation about their actions including making cooperation between the members (farmers), in order to share techniques and hold stores together. This method is beneficent for farmers and the country in general if it is well controlled by the government in favor of farmers. I think we have to adopt the method to improve our agriculture. At the same day, we had a field trip and we saw:

How to produce vegetables, fruits and flowers in green houses. It opened my eyes if I can say because I knew what I will do in future at least even though it is expensive.

The strategies of cultivating and storing rice. I had a chance to see what I studied in theory. And we discussed on Japanese technology in agriculture.

We visited JA factory that treat milk with high technology. And the taste was amazing.

We also visited the farm of caws and got explanation on strategies they use.

The visit of JA actions gave me inspiration in my profession because I saw that I have a considerable responsibility of developing my country given that most of Rwandese do

agriculture.
（ナディーン）

-At JA visit, we learned so many interesting things related to how develop our country agriculture as our as our country is depending at 80% of agriculture
（マリーン）

鳥取大学乾燥地研究センター見学

担当者：海原 早紀

１、企画目的

ルワンダでは見られないような最先端の研究施設をルワンダ学生に見学する機会を与える。本乾燥地センターは日本で唯一乾燥地問題に組織的に取り組んでいる教育研究機関である。

現在日本には乾燥地は存在せず、ルワンダも高地であるのため雨量は十分である。しかし鳥取の乾燥地研究センターは世界平和と持続的発展を願う立場から海外の砂漠化の研究に取り組んでいる。近い将来地球の人口増加による世界的な食糧不足が懸念されるなか、砂漠化の問題は世界規模で取り組むべき課題である。私たちも一地球市民としてこの問題について考えなければならない。世界の乾燥地、砂漠についての原因と緑化方法について学習する。

２、企画概要

内容：鳥取大学乾燥地研究センター見学
参加者：日本ルワンダ学生会議のメンバー
（日本人４人、ルワンダ人５人）
日時：2009 年 12 月 24 日（木）
場所：鳥取大学乾燥地研究センター

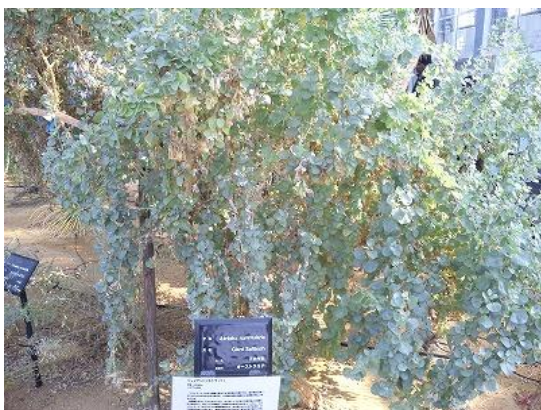
３、報告

乾燥地研究センターは文部科学省の全国共通利用施設であり、大学教員の利用、国内外の研究ネットワークの形成、国内外の共同研究の推進、また学生や外国人受諾研修員の指導を行うことを任務としている。

その施設の中でも「アリドドーム」という施設を見学した。

まず、「アリドドーム実験施設」では乾燥地条件かを再現する諸施設や乾燥地に育成する植物についての説明を受けた。

◆ジャイアントソルトブッシュ

地中の塩分を吸い上げ、葉の表面から排出することができる植物。農業に不適切な過剰な塩分を取り除くことができる。

◆グロースチャンバー

ガラスで囲われた空間のなかでは土壌中の水分、熱、土壌塩類等の分布を設定することができ、その環境で植物の水収支、物質生産、耐塩性を測定することができる。

◆ジャトロファ

乾燥地緑化と住民生活向上を期待できると研究開発されている植物である。害虫に強く、乾燥地の緑化・温暖化防止に貢献するだけでなく、その油脂を周辺住民が生活に用いたり、さらには換金作物として売ることもできる。

次にドームの反対側の「ミニ砂漠博物館（乾燥地学術情報展示室)」を見学した。ここでは世界の乾燥地についての資料、実際の砂礫や農地で使われる道具など様々な展示が行われていた。

◆世界の乾燥地と砂漠

国連による最近の報告（UNEP, 2006）によると、世界の砂漠の面積は、およそ19～34億haとされている。
世界の乾燥地は、陸地の41%を占め、そこに世界人口の3分の1にあたる20億人が暮らしている。

砂漠化の原因は気候の他、人為的要因としては、過放牧、薪炭材の過剰採集、過開墾、不適切な水管理による塩類集積などがあげられる。砂漠化の背景には住民の貧困と急激な人口増といった社会・経済的な要因が存在する。

感想

砂漠が存在しない日本でこのような研究が行われていることに最初は疑問を持った。しかし、多くの砂漠地帯では高額な研究施設を建てる資金がない場合も考えると、日本でこのような研究を発展させ、現地へ派遣し、乾燥地からの留学生を招き現地指導者を育成していることは、大変意義深いと

思った。学生会議に参加した鳥取大学の学生も、同分野に進み海外へ留学するという者が多かった。
ルワンダメンバーも同様に、乾燥地のない日本でなぜ研究が行われているか違和感を抱いたようだったが、海外への協力につながることを理解すると、「ルワンダにも指導者の派遣など、協力をしてほしい」と言っていた。
　たしかに、ルワンダには乾燥地がほとんどないので、鳥取大学との協力関係はない。しかし、斜面を利用した農耕方法など、日本が指導できることは大いにあるのではないかと感じた。

５、<u>ルワンダ大学生感想</u>

Central Dome ：This dome have some relationship with the dune I spoke above because we got explanation from the Dr in charge of this dome saying that the huge surface near by the Sea (uni) was looking like Dune (arid land) but using technologies and research they established plants on that area. They are able to control and manage：

Photosynthesis system of the plants in hot area
Drip irrigation (expensive)

Chosen plants that are resistant to high temperature like, Giant saltbush, Jatropha
Tottori University is making the research in East Africa (Tanzania) using the department of this Dome.
（モーリス）

Central Dome in Tottori (Arid land research center)

We got explanation from the Professor and he showed us all parts of that dome and we found that it carries out the scientific research on:
Photosynthesis system of the plants in hot area Drip irrigation to be used in dry fields(expensive)
Chosen plants that are resistant to high temperature like;
Giant saltbush (Salt tolerant, Leaves absorb salt and evaporate it, humidification or cleaning soil, from Australia)
Gelb horn
Jatrophacurca:
Biodiesel Plant, oil extraction can be used directly and it used as energy of generator to extract ground water, from Latin America, Resistant to high temperature and salinity, expanded as cash crop in Japan, used for forestation and it generally stop desertification.

Controlling Wind activity, Temperature, Humidity, salt, and water movement in the soil.
Salinity of Ground water.
Those are not applicable in Rwanda because we do not have desert but as agriculture is my profession, I learned a lot
（ナディーン）
At Tottori University dryness ground

research center, we experienced how to cultivate on dry areas, and it's a high tech to adopt for some regions at a high risk of dryness.
（マリーン）

鳥取学生会議

担当者：海原 早紀

１、企画目的

同じく農学を勉強する日本の学生と交流することによって、相互理解を深める。また、ルワンダメンバーは日本の大学が提供するカリキュラムや日本の大学生の興味について知ることができる。
プレゼンで母国の農業について紹介し、意見交換をすることによって農業技術の発展について考える。

２、企画概要

内容：学生会議
参加者：日本ルワンダ学生会議のメンバー（日本人４人、ルワンダ人５人）、
鳥取大学学生団体 The FanKey―開発途上国へのアプローチ―
日時：2009 年 12 月 24 日（木）
場所：鳥取大学湖山キャンパス

＊会議の詳細については第３章　「第３回日本ルワンダ学生会議本会議活動報告」をご参照ください。

東京

【スケジュール】

12月28日	ダンスイベント
29日	学生会議①
30日	学生会議②
1月　2日	学生会議③
3日	東京観光・買い物

【各箇所報告】

ダンスイベント

担当者：井上 真希

1、企画目的

・市民レベルにおいて日本とルワンダ間の文化交流を促進する。

・日本の人々にルワンダの伝統文化を間近で体験してもらう貴重な場を与え、遠いアフリカの一国ルワンダに対する関心を喚起する。

・ルワンダの歴史や社会問題、特に虐殺とその影響の経緯を知り、考えてもらう機会を与える。

・日本の人々に INDANGAMUCO の活動やルワンダの教育を考える会の活動、更に日本ルワンダ学生会議の活動を知ってもらうことで、平和構築への多様なアプローチ方法を知ってもらう。

・ルワンダ国立大学の学生に日本の伝統文化を知ってもらうことで、より日本に対する関心を高めてもらう。

2、企画概要

企画名：JAPAN☆AFRICA MUSIC & DANCE SHOW 〜文化でつながる日本とアフリカ〜

テーマ：日本とルワンダの文化交流

内容：ダンス、楽器演奏、講演、ビデオ上映、ブース出展

参加者：

- ルワンダ国立大学よりルワンダ伝統舞踊グループ「INDANGAMUCO」
- 「ルワンダの教育を考える会」よりカンベンガ・マリールイズさん
- 神田亜紀さん（MC）
- 多摩美術大学よりアフリカ舞踊サークル「ジャンベ部」の皆さん
- 「SUGEE」こと杉崎仁克さん
- 早稲田大学よさこいチーム「東京花火」の皆さん
- 日本ルワンダ学生会議より小嶋里奈と大山剛弘

ブース出展団体：

- ルワンダの教育を考える会
- ルワンダ・ファミリー
- アフリカ平和再建委員会

来賓：アントワンヌ・ムニャカジ・ジュル
駐日ルワンダ共和国大使館　大使

日時：2009年12月28日(月)
18:00〜21:30　開場 17:30

場所：アムウェイプラザ東京

３、報告

◆INDANGAMUCO の団体紹介

第二回学生会議時に記録し、制作したドキュメンタリーを上映し、ルワンダ国立大学のダンスグループ、「INDANGAMUCO」の団体紹介と活動理念について観客の理解を深めた。ドキュメンタリーではジェノサイドが五人のメンバーそれぞれの人生にどのような影響をもたらしたのかにも言及された。

◆ マリールイズさんによるご講演

現在福島県に在住しながら、母国ルワンダでの悲劇と教訓をテーマに日本全国で年間100 本もの講演を行う、ルワンダの教育を考える会副理事カンベンガ・マリールイズさんに虐殺を生き抜いたご自身の経験に基づいて命の尊さ、教育の大切さ、文化の持つ力についてお話頂いた。

◆ 多摩美術大学「ジャンベ部」によるダンス・ジャンベ演奏

多摩美術大学で活動している「ジャンベ部」により、想像力豊かな彼ら独自のアレンジが施されたエネルギッシュなダンスとアフリカの民族楽器であるジャンベの演奏を披露して頂いた。

◆ INDANGAMUCO によるルワンダ伝統舞踊披露 ＆ SUGEE さんによるジャンベ演奏

SUGEE さんのジャンベ演奏をバックにINDANGAMUCO にルワンダ伝統舞踊を披露した。全体を通してルワンダの踊りは生きる喜びを体いっぱいで表しているかのような印象を与えた。

SUGEE さんは世界各地の祭礼音楽との交流の中から、独自のスタイルを確立し、現在、TheARTH のリーダーとして、またソロプレイヤーとして、地球の生命全てに通ずるグループと歌を人々に届けるべく精力的に活動している。また、リハーサルより、ルワンダ人学生と日本人学生の意思疎通を図る役割を果たして頂いた。

（INDANGAMUCO についての詳しい説明は序章を参照。）

◆ 神田亜紀さんの MC

祭礼・民俗音楽など世界音楽遺産の伝承をライフワークとし、ラジオ DJ でも神田さんにはイベント全体の司会を務めて頂いた。神田さんのユーモア溢れるトークにより、和やかな雰囲気でイベントは進められ、最後まで盛り上げて頂いた。

◆琴・ジャンベ・ギターのコラボ演奏

今まで聞いたことないような楽器のコラボレーションが実現した。琴もジャンベもギターも存在感が大きい楽器なのにもかかわらず、逆にお互いを引き立てあうような、絶妙な音の重なりを聴くことができた。

◆早稲田大学「東京花火」によるよさこい舞踊

振付や衣装、楽曲まですべてこだわり抜いて創作された、よさこい舞踊を披露して頂いた。曲に合わせて自由に舞う乱舞ではルワンダ学生も参加した。ルワンダ学生にとって日本の伝統舞踊の一つを見て体験できるということは、非常に深いことだったであろう。

◆コラボレーション・パフォーマンス

イベントのクライマックスとして、ジャンベ部の演奏をバックに、観客も含めた全ての参加者がアフリカンダンスを楽しみ、会場は熱気に包まれた。

◆ ブース出展

会場出口付近にて、三つの団体（ルワンダの教育を考える会､ルワンダ･ファミリー、アフリカ平和再建委員会）がそれぞれ団体PR、物販ができるスペースを設けた。日本ルワンダ学生会議としてのブースも出展した。来場者がルワンダやルワンダ社会のために働く日本の NPO について知る良い機会になったと思う。また、出展団体間での親交も深められた。

◆アントワンヌ・ムニャカジ・ジュル駐日ルワンダ共和国大使からの挨拶

イベントには駐日ルワンダ共和国大使館世りアントワンヌ・ムニャカジ・ジュル大使にもお越し頂き、イベントの最後にはルワンダと日本の関係の更なる発展への希望についてお言葉を頂いた。

◆交流会

参加者、来場者の間で自由に歓談してもらう交流の場を設けた。日本ルワンダ学生会議メンバーが手作りワッフルとドリンクを無料で配布した。会場を貸して下さったアムウェイプラザの責任者の方からは豆乳の差し入れもあり、それも来場者に配布した。

4、担当者感想

「日本とアフリカを文化でつなげる」というコンセプトの下、多くの方々のご協力に基づいてこのイベントを成功させることができた。まず、ルワンダ学生にとって、念願だった日本公演を実現させ、多くの人々に彼らの誇る伝統舞踊を披露することができたのは素晴らしいことである。また、様々なフィールドで活躍する日本のアーティストの方々とルワンダ人学生の間の交流も促進させることができた。

今回のこのイベントによって改めて文化の持つパワーについて認識させられた。日本とアフリカ、まったく異なる文化が融合するのを、芸術として感じることができた。また、打楽器のリズムや踊りの振り付けなど、双方の伝統芸能をよくみて見てみると意外と共通する部分があったりすることは、非常に驚きだった。

マリールイズさんによる講演やドキュメンタリー、更にはNPO団体によるブース展示では、ルワンダの歴史や社会問題について日本の人々の認識を高めるきっかけになった。

最後に、このイベントに関わってくださったすべての皆様へ感謝の意を表したい。アフリカと日本の絆を深める力、更には平和構築の促進剤となってくださって、本当にありがとうございました。

５、ルワンダ大学生感想

The dancing event has been very successful for us and Japanese performers as well. We are very thankful for the collaboration initiative as the Youth, expected to change things.

（マリーン）

Finally the dance event we had with the Japanese was so amazing. I could not imagine that the Japanese can play African drams very well. And the Japanese culture dance was so great as well as your culture in general.

So this is my impression on our visit in Japan,

（ナディーン）

東京学生会議

担当者：古屋 亮輔

１、企画目的

- それぞれの国が抱える問題・課題を紹介し、議論することにより学生の視点から解決策を模索する
- ルワンダからは国家発展に関する目標や方法を紹介、逆に日本側からは先進国として抱える問題を紹介することで互いの国にとってあるべき社会の姿を検討する
- 東京で学生会議を開催することによりプレゼンだけではわからない社会の様子に対してルワンダ人の理解を促す

２、企画概要

内容：プレゼンテーション
ディスカッション

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー
（ルワンダ人５名、日本人11名）
長岡科学技術大学大学院のルワンダ人留学生、Aline Hakizabera

日時：2009年12月29,30日
2010年１月２日

場所：NPO法人スープの会「風待ちサロン」
（29日）
東京国際ホステル 集会室
（30，２日）

＊会議の詳細については第３章 「第３回日本ルワンダ学生会議本会議活動報告」をご参照ください。

広島

【スケジュール】

1月4日	ピースビルダーズ基調講演 学生会議
1月5日	広島平和記念資料館見学 原爆被害者の方のお話を聴講

【各箇所報告】

ピースビルダーズ基調講演

担当者：古屋 亮輔

1、企画目的

・ 広島での企画に先立ち、日本における平和構築分野の先駆けである団体、ピースビルダーズの方から基調講演をいただく。

・ ルワンダにおいては若者が国を動かす主体として重要な役割・責任を負う。そして今回来日するルワンダ国立大学の学生はまさに近い将来そのような役割を担わなければならない。彼らに対し紛争後国家における平和構築の理論や平和国家としての発展に関するヒントを伝え、同時に私たち日本の大学生も平和構築に関しての知識を深める。

2、企画概要

内容：講演「被爆後の広島の再生・復興とピースビルダーズの事業」(日本ルワンダ学生会議メンバーが通訳）及び質疑応答

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー
（ルワンダ人5名、日本人9名）
ピースビルダーズスタッフ

日時：2010年1月4日　10:30~11:45

場所：ピースビルダーズ事務局 Café Paco

3、報告

講演

現在でこそ広島は平和都市として世界に知られているが、戦前の広島は日本国内で有数の軍都であった。港湾は海軍の要所となり、日本軍の大本丸が置かれたり臨時議会が開催されるなど軍の中心となっていた。

1945年8月6日に原爆が投下された。その年の暮れまでに14万人が亡くなり、人的被害や環境被害だけでなくインフラ・地域社会もすべて破壊され、社会的機能は停止した。それは「今後70年は草木も生えない」と言われるほどであった。

しかしほどなくして平和都市としての再建が始まる。市長が中心となって軍都から平和都市へと広島市のアイデンティティの移行を図り、その理念は徐々に中央政府にも受け入れられてゆく。1949年に広島平和記念都市建設法が成立したことがきっかけとなり、平和記念公園、記念碑、道路、公営住宅など都市基盤再生のための予算が政府により投入された。これらの整備が進み、目に見える復興が進むにつれ平和都市建設に向けた住民の意識も向上し、1958年には人口も戦前の水準まで回復した。広島復興の特色は人々が敵国への復讐を求めたのではなく「世界平和」に目を向けた点にあり、これは現在にも通じる理念である。歴代の広島市長は世界各地で核実験が行われる度、その国の元首へ抗議文を送っている。

ピースビルダーズはルワンダやシエラレオネなど、紛争後地域に対する支援を行っており、広島もその意味では紛争後社会と言える。また外務省の委託を受けて国連や国際 NGO で働く人材を育成する事業や、適正価格で商品を購入し、生産地の継続的な発展に貢献するフェアトレード事業なども行っている。

ルワンダでの事業はピースビルダーズの事務局長が 1994 年のジェノサイド直後、現地の難民キャンプ等で支援を行っていたことがきっかけである。大きな成果としては、当初日本での公開予定がなかった映画『ホテル・ルワンダ』を招聘するための活動、字幕・パンフレットの監修、モデルとなった人物を招聘してのシンポジウム開催などがある。現在はルワンダの職業訓練所で作られたバッグを輸入・販売し支援金に充てている。2010 年 1 月には現地とのより深い協力関係を築き、活動の幅を広げる目的でピースビルダーズのスタッフがルワンダを訪問した。

日本ルワンダ学生会議のように学生同士が交流し、平和構築や外交関係の地盤を築いていることに感動したということである。

講演の様子
（左　ピースビルダーズスタッフの渡邊氏）

質疑応答

Q. 原爆投下候補地が予め複数設定されていたことから明らかなように原爆はアメリカにより計画的、実験的に投下された。これに対して日本人としてどんな感情を持っているか。(Marine)
A. 計画性があった点にももちろん憤りを感じており、市民が居住しているのが明らかな場所に投下した点が特に許しがたいと感じている。

Q. 現在でも被爆者に後遺症があるのか。(Nadine)
A. 被爆者自身のみならず 2 世 3 世の中でも大人になってから病気になる人がおり、時限爆弾を抱えながら生きているような気分であるという。政府が経済的な支援を行っているが、被爆後海外に移住した者への支援が難しく、課題となっている。

Q. アメリカは依然として日本国内に軍事基地を保有している。いつまで続くかわからないこの状況をどう思うか。(Marine)
A. 独立後も日本国内に基地があるのは異常な状態だと思うし、沖縄など戦争被害を受けた場所に基地があるのは折り合いをつけるのが非常に難しい。

Q. ピースビルダーズでは基地や核軍縮等の問題について、アメリカに何らかの働きかけを行っているのか。(Calliope)
A. アメリカに対して直接そのような活動は行っていないが、市民がこれらの問題に関する意見交換会の開催や専門家による講演を希望すれば機会を提供する。

Q.「No more Hiroshima」という理念に反して世界ではまだ核兵器を開発する国があるが、それに対する活動は行っているか。(Maurice)
A.実際核に関する具体的な活動は行っていない。広島の復興のプロセスを紛争後地域に伝えて参考にさせる活動が主であるため。他にも核に反対する団体は多々あるため、ピースビルダーズは自分たちの専門性を生かせる活動を行っている。

Q.アメリカは広島の再建に貢献したのか。(Marine)
A.広島平和都市建設法が成立した時点でまだ日本は占領下にあり、GHQ の意向に沿った立法であったいえる。原爆で壊滅的な被害を受けたためでなく、平和都市として再建するという目的の法律であることが重要だった。

Q.ピースビルダーズの活動は広島市民に対して具体的にどのような影響を与えているか。(Calliope)
A.広島で唯一のフェアトレードカフェを提供していること、専従のスタッフを自己資金で雇う NGO は広島にないため、NGO の働き方を体現していると同時に雇用を創出していること、理事が大学関係者であるためその繋がりを利用して専門家を呼びやすく、講演会等の機会を提供できることなど。

Q. 職業訓練所はどのように運営・活動しているのか。(Maurice)
A. 現地のカウンターパートが運営しており、今後はより日本で売れるような製品作り・品質管理のためのワークショップを開催する。現地の活動を日本で紹介するなど、資金援助のための活動も行う。

Q.原爆後の国際社会の対応はどのようなものだったのか。(Marine)
A.オバマ米大統領のプラハ演説のように核廃絶に向けて取り組むのは広島では当然のことのように考えられるが、国際社会では必ずしも受け入れられるものではない。原爆により戦争が終わったことは日本による植民地支配を受けていた人々を助けたことにもなり、日本人が絶対的に被害者だという考えはあまり受け入れられていない。

終了後の記念撮影

４、感想

世界で初めて核爆弾による攻撃を受け、被害者としての日本の象徴である都市、広島。その名はルワンダでもよく知られている。今回来日したルワンダ人にとって、原爆で壊滅的な被害を受けた広島が半世紀以上を経てどれほど復興しているのか、また被爆した人々はどんな暮らしを送ってきたのか、という点は最も興味深いテーマの一つであったに違いない。ルワンダ人は 16 年前のジェノサイドを乗り越え、現在まさに

広島の人々と同じ、再建・復興の道のりを歩もうとしているのである。今回お世話になったピースビルダーズは「人間の安全保障の観点から、理論と経験を踏まえた平和構築事業の実践、研究、提言、情報提供、人材育成 などの諸事業を行い、広く平和に寄与すること」を目的とするＮＧＯで、日本の平和構築分野においては第一人者であるといえる。そのような人々と対話の場をもてたことは、国のリーダーとしてルワンダの復興や発展を担うルワンダ人メンバーにとって良い刺激になっただろう。帰国後もメールで連絡をとっているようだし、彼らも貪欲に情報を入手しようとしていることが窺える。今回得た知識・情報を彼らが本国でどれほど実践的に利用できるかは定かでないが、この広島訪問は今後もきっとルワンダ人にとって重要な来日目的であり続けるだろう。アメリカと日本がどうして和解できたのか、広島の人々はどうして彼らへの報復を考えなかったのか、ルワンダ人メンバーが抱いたこれらの疑問への確固たる答えを、数時間の対話で見出せたとは思えない。しかしこれを継続することで徐々に日本人の心情を理解すること、つまり「相互理解」に近づけるのだと思う。これは日本ルワンダ学生会議の理念そのものに関わる活動でもある。

　ところで、個人的にこの議論で印象に残った発言がある。日米関係に関する議論で出た発言だが、
「アメリカと同盟を組んでいるのに、日本がテロの標的となるとは思わないのか？」
というものだ。ハッとさせられた。
　現在、ルワンダのみならず、世界のどの国から見ても、日本とアメリカは強固な同盟関係にあるといえるだろう。その同盟関係は政治・経済・軍事などあらゆる分野での協力関係を意味する。そんな中、目下テロリストがアメリカを標的としているにも関わらず、我々日本人は「まさか日本が攻撃されるはずがない」、「アメリカは攻撃されたが日本は大丈夫」などと高を括っているのではないだろうか。ルワンダ人メンバーが、アメリカが攻撃されるなら当然日本もテロの標的となってもおかしくないと考えるのは、冷静に考えれば当然のことなのだろう。普段日本で平和に暮らしていては気付けないことを、意外な形で思い知らされた気分だった。ルワンダ人に平和構築を紹介しておきながら我々日本人が自国の平和について考えさせられる。これがいわゆる平和ボケなのか、平和の価値は日本人にとってもルワンダ人にとっても何ら変わることはないという、当然のことを改めて実感する。そんな広島での議論だった。

広島学生会議

担当者：古屋 亮輔

１、企画目的

- 日本政府による平和構築及び国際貢献を紹介し、その支援先たるルワンダ人に意見を求める
- ジェノサイドから 16 年がたったルワンダの現在について知識を深める
- 現場で働く青年海外協力隊員に平和構築に関する見識を問うことで、学生だけの議論では発見できない知識や活動実態を共有する

２、企画概要

内容：プレゼンテーション
ディスカッション
参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー
（ルワンダ人 5 名、日本人 9 名）
青年海外協力隊ルワンダ隊員
（田中富美代、松山匡延、大橋功二）
日時：2010 年 1 月 4 日　12:00~14:30
場所：ピースビルダーズ事務局 Café Paco

＊会議の詳細については第３章　「第３回日本ルワンダ学生会議本会議活動報告」をご参照ください。

広島平和記念資料館見学・原爆被害者の方のお話

担当者：千田 大介

１、企画目的

広島平和記念資料館の訪問目的は、僅か 16 年前に当事者として虐殺を経験したルワンダ人学生に、日本人の戦争体験と平和に対する活動を示し、共に学ぶということであった。周知の通り、ルワンダでは 1994 年 100 万人が殺害されたとされる大虐殺が起きた。第二次世界大戦では加害者・被害者として惨劇をくぐり抜けてきた日本に生きる者として、我々は「相互理解」と「対等な関係」を理念にルワンダ人と関係を築こうとしている。そして、団体活動テーマの中でも特に重要な位置を占めている「平和構築」という視点から、今後両国における協力関係の可能性を模索するという試みとなった。

２、企画概要

内容：
②□広島平和記念公園散策・資料館見学
② 被爆体験者・小倉桂子さん（72 歳：Hiroshima Interpréter for Peace 代表）の講話
日時：
①1 月 5 日 9 時～12 時・②13 時～16 時
場所：①広島平和記念公園・①②資料館
参加者：ルワンダ人学生 5 名（Ephraim/ Calliope/ Maurice/ Marine/ Nadine）・日本人学生 11 名（井上/ 岩垣/ 大久保/ 大山/ 海原/橘/ 千田/ チェ/ 袴田/ 朴/ 古屋）

３、報告

◆平和記念公園見学

・原爆ドーム前

・戦没者慰霊碑にて

・平和の鐘を鳴らす Nadine

・資料館で歴史背景を学ぶ Marine

・資料館見学後 Maurice が残したメッセージ：

"We young people should put an end on A-bomb creation. Let us make an effort on world peace building."
Habimfura Maurice 5 Jan. 2010

◆小倉桂子さんのお話（一部紹介）：

被爆当時 8 歳。小学校 2 年生。 投下点から北に 2.4Km ほどのところに住んでいました。当時の体験は本当に悲惨なものでした。私は親切心から被爆者に水をあげてしまい、

何人もの人が自分の前に倒れ死にました。幼い記憶はトラウマとしてずっと残っています。40 歳になるまで、体験を語ることはなかったです。広島の人はみな被爆生存者や体験者だったので、取りたてて話すことはしませんでした。平和活動に参加するのは４２歳の時夫が亡くなったことがきっかけでした。夫は生まれも育ちもアメリカで、日本では公務員の職にありました。終戦後は平和記念資料館の所長として市長を長年助けていました。広島市長は核実験がある度に、世界のリーダーたちに電報を送り訴えていましたが、夫はその翻訳を担当し、実際に手紙を書くこともありました。また、アメリカに 1 カ月滞在し、ワシントンの国家アーカイブにて原爆に関する重要な映像資料や文献を研究し資料館に持ち帰りました。核廃絶のオピニオンリーダーとして、生涯を広島平和文化センター代表の役職に捧げました。私は子育てをしながら、夫が招く世界中の客人をもてなしました。広島女学院大学で英文学科を卒業しましたが、それ以降英語には触れていませんでした。毎年英語で平和宣言を書いていた夫が 30 年前脳卒中で亡くなると、多くの友人が来て大きな損失を悲しみました。オピニオンリーダーと通訳がいなくなってしまったからです。ピューリッツァー賞をとったロバート・ユング（夫の友達）は、ずっと泣いていた私を激励し、「あなたには、今後海外から来た人を助ける仕事をするという任務があるのだから頑張りなさい」と言いました。そして、英語を忘れてしまった私に、記者会見で半ば強制的に通訳の仕事をさせました。最初は嫌でしたが、分厚い辞書を片手に記者会見をこなしました。それから私の通訳としての仕事が始まりました。子育ての傍ら毎晩夜中の 3 時まで勉強し英語を習得しました。海外からの取材のコーディネーターも務めました。

◆ルワンダ人・日本人の感想

「小倉（被爆経験者）さんの話を聞いて」

Maurice：ルワンダでも 1994 年に虐殺という悲劇がありました。でも、私の国では隣人同士が殺し合いました。それはとても特異な状況です。当時は「奇妙な力」「外的な何か」が人々を突き動かすような状況がありました。日本の被爆経験とは大きく違う点です。どうやって和解していけば良いのか、それを問われています。現在は着実に和解のプロセスが進んでいます。若者としてフツ・ツチの差別もなくなってきました。1994 年以降、我々の国でも外国に対し平和のメッセージを送ってきました。広島では“No more Hiroshima”があり、ルワンダでは“Never again, Genocide”を掲げてきましたが、残念ながらいまだにスーダンなどで虐殺があるのは見逃せません。

小倉さん：私たち広島の人はルワンダにどう貢献できると考えますか？

Maurice：あなたは自らの経験を海外の人に翻訳を通じて説明しています。ルワンダ虐殺に関しては、まだまだ詳細に説明する資料が足りないと思います。あなたに習って当時のことを説明するための本を書くことができます。

小倉さん：そうですか。また、知るということが最初のステップになるのではないでしょうか。今回ここに来て広島について知ること、ルワンダについて伝えることも一つですね。そして、若者のネットワークが平和構築に大いに役立つのではないでしょうか。

Calliope：私はルワンダでヒロシマ・ナガサキの歴史を少しだけ学びました。今日ここに来て、その悲しみや恐怖を改めて本当に実感することができました。ルワンダでは国民同士が殺し合いました。虐殺に関する資料、映像、文献がその困難と悲しみを語っています。原爆と比べると、虐殺はもっと長い歴史的背景を持ち、1920 年代から始まる植民地の民族主義を発端としています。しかし、「人間の殲滅」と「生命の尊さ」という問題を考えさせられる点で共通しています。「なぜ彼らは死ななければならなかったのか」という問いを持たなければならないと感じています。

小倉さん：広島は灰から立ち上がってきました。憎しみを乗り越えることも、広島とルワンダが共有できる教訓ですね。

Calliope：はい、同感です。それは「紛争予防」にも関係していますね。平和構築や復興に関して、広島では多くの活動があるように思います。記憶にとどめるという意味で、特に記念館もとても重要です。ルワンダでは政府も様々な活動を主導していますが、民間人も自ら団体を設立し防止に努めようとしています。囚人、学生や一般市民による紛争解決を学ぶグループが数多くあります。市民教育はとても重要です。

Marine：ルワンダ人として広島から学ぶことは「再建」です。広島の都市は破壊されましたが、このように復興しました。我々も国の再建の最中です。和解という努力もまた共通点として見出せると思います。

Ephraim：私も同感です。何年も前のことですが、日本人は荒廃した広島のインフラを整え都市を再建しました。ルワンダもまたそのように社会システムを再構築しなければなりません。虐殺では国がめちゃくちゃになってしまいました。和解もとても重要だと感じています。

Nadine：私は許すことの善を感じました。広島の人々も憎しみや悲しみを乗り越えてここまで来たと思います。広島とルワンダで協力関係が持てたらと思います。ルワンダもまた憎しみ悲しみを乗り越えなければいけませんので。

小倉さん：我々は同じ辛い経験をしました。都市の破壊もそうですが、あまりに多くの人が目の前で死んだのです。広島では、被爆した後に最初にしたことは、人々が集ま

り経験を語り合うことでした。それまでは、自分が唯一の悲劇の主人公だと思っていましたたし、最初の10年は皆絶望し何も出来ませんでした。復興という意味で、アメリカからの直接補償はありませんでした。しかし、少なくとも市民は団結して日本政府に援助の要求をしてきました。日本の中で広島市民と長崎市民は団結し戦ってきました。その頃までは、被害者として助けばかりを求めていました。1955年に広島で最初の世界会議が行われ、市民は被害者として哀れな私達を助けてくれと訴えました。それからしばらくすると、「我々にできることは何か」、「誰か同じ経験をしている人を助けなければ」、という姿勢に変わっていきました。我々は団結し、一つの不運な国として、未だ核実験や悲劇を経験している他の国のために声を上げていかなければいけない、と考えるようになったのです。広島市民として、世界の他の悲惨な人々と共感し団結を感じることで、我々も過去の経験を乗り越えられると思うのです。今ここにルワンダのあなた方を迎え、友になれたこと、これが始まりなのです。日本人に虐殺を伝えてください。ルワンダの虐殺に関し、我々を教育して欲しいと思います。私はあなた方に会えてとても嬉しく感じます。あなたが方の悲しみ、困難を共有できる気がしています。どうか、このような活動を続けてください。あなた方には希望が見えます。教育は最も重要なことです。遠くからわざわざ広島に来てくださってありがとう。

「虐殺後の社会について」

小倉さん：何が民族間の和解での困難はなんですか？

Calliope：歴史書にも書いてありますが、植民地以前、ルワンダは元々周辺を支配する王国でした。植民地統治から民族差別、対立が始まりました。虐殺の原因は政府の誤った統治でした。前の政府は植民地主義に従い民族対立を利用してきたのです。また、恐怖も利用されました。敵が自分を殺す前に殺しなさいという扇動が利用されたのです。この民族意識は教育を通して植えつけられてきました。つまり、民族対立の感情が人の意識に植え付けられてしまったということが和解において困難な部分です。

Maurice：和解は難しいように感じますが、ルワンダは実際に安定を築いてきました。学生として、また若者として、他の国にも示したいのは、国内の若者は団結し紛争を予防しているということです。

小倉：人々の考えを変えていくには、メッセージを送らなければなりませんが、情報を配信する手段は何が主でしょう？まず、インターネット利用はどうですか？

Calliope：識字率という意味では、現在の初等教育のレベルは問題ないと考えています。

Maruice：大学生はインターネットにアク

セスできます。高校ではごく限られていますが、現在は全土的にインフラを整備しています。

Ephraim : はい、政府も IT の政策に力をいれています。

Calliope : 政府はアジアや西洋諸国とネットワークを構築し、情報共有の迅速化、アクセスの向上を進めています。マスメディアはまだまだアクセスしづらいです。

小倉さん : 新聞以外の出版物はどうでしょう？

Calliope : まだまだ少ないですが、政府は虐殺の認識を高めるために推奨しています。

小倉さん : 集会はありますか？

Calliope : 政府によるものなら大きなものがたくさんあります。でも、まだ個人的な集会は少ないです。

小倉さん : 学生によるワークショップなどはどうですか？

Maurice : 学生は学校で主にキリスト教を通して多くの教訓を得ています。

Calliope : でも、「キリスト教徒が大半を占めるルワンダでなぜ虐殺が可能となったのか」、それは大きな問いです。そもそも、キリスト教は西洋からの植民地によってもたらされたものです。ルワンダで一部の人はキリスト教を信じることに懐疑的です。

小倉さん : 学生による講義などはありますか？広島では、元兵士や被害者が小学校に出向き戦争での被害と加害について教えることがあります。

Calliope : 学生による活動はありますが、すこし違います。トラウマに対するケアをすることが主で、そのように講義などをすることはまだありません。新しいアイデアですね。

Maurice : 4 月には大きな虐殺記念行事がありますので、そこで過去のことについて学べるように小学生にも教えています。

小倉さん : 虐殺という体験には、悲しみと怒りが混ざり合っているはずですよね。和解するためには、まず、悲しみと怒りを見せなければなりません。和解とはそんなに簡単なプロセスではないでしょう。歴史を伝える上で両方の要素を混ぜて伝えることが大事だと考えます。誰か大切な人の命を失うということは、根本的な悲しみと怒りにつながっています。歴史教育という意味では、誰もが子ども時代からこの悲しみと怒りについて学ぶ必要があります。あなた方は大変悲しい経験をしたと思いますが、それこそがあなた方の土台なのです。そこに、種をまき大きな木が成長するようにできるでしょう。私は自らの経験を通して、他人の悲しみを少しでも理解することができるようになりました。他人の困難と、悲しみ、怒りを受け入れるのは大切なことです。私は、あなた方の悲しみ、怒り、困難、歴史背景を知ることができたと信じています。

「日本について」

Calliope　：私が一つ疑問なのは、日本人がアメリカとこのように良好な関係を保とうとしていることです。それは、ルワンダの隣人が殺しあった後で、それでも「供に暮らしているのは何故か」という問いと似ています。しかし、それは国家内のことです。日米は国家間です。なぜ、協力関係が築けるのか、それは私にとってはとても理解できないことです。

大山：市民レベルでアメリカや西洋諸国と和解し協力関係を築けたのは、文化の力もあるかもしれません。戦争以前から日本人は西洋に対し憧れがありました。先進技術を取り入れ、ファッションや音楽、芸術も真似してきました。もはや世界で日本は自国の文化の殻に閉じこもって生きることはできません。西洋文化を受け入れなければならないと感じていたのです。世界とのつながりを保つ必要があります。状況は異なりますが、「共生」という意味ではルワンダも同じかもしれません。ツチ・フツも文化を共有してきたし、憎しみを植えつけられたとはいえ民族同士隔絶して生きることはできないでしょう。

井上：現在は都市化する社会の中で帰属意識が薄れていると思います。日本人として何か大事なものを失っていると思います。この点についてどうおもいますか？

小倉さん：そうですね、日本人の精神はますます弱くなってきているように感じますね。親殺し、自殺、学級崩壊。日本は経済のみならず文化も一緒に衰退しているのではないでしょうか。

広島では学級崩壊しているクラスの若者を受け入れ、戦争体験者が学生と対話しました。体験者は失った子どもの話をしました。「私の子どもは生き延びることが出来なかったのに、なぜ幸せなはずのあなた達はそんな生活を送っているのか？」などと問いかけ、自分の置かれた状況について考えさせました。すると崩壊していた学校と生徒が変わり始め、彼らは自分のことだけでなく他人のことまでしっかり考えられるようになりました。

また、日本とルワンダの状況では大きなギャップがあります。日本社会は綺麗な街並み、ファッションと一見美しく見えますが、人々の心の中には寂しさや問題があるかもしれません。ルワンダ人は日本人の若者や学生を変える力を持っていると思います。

Maurice：今回の旅を通して、「日本は発展しているのに、なぜそのような問題があるのか」と私たちは語り合ってきました。

Calliope：私は日本に来て世代間にある問題を見つけました。高齢の人はとても謙虚で人との関係を重んじています。一方若者は互いに挨拶もしません。例えば、ルワンダではバスで人とあったら挨拶して気軽に話したりします。日本ではどこでも寝ることに忙しくして、よくても携帯をいじっているぐらいです。今、若者は前の世代の人

たちよりも情熱を失い、働く動機が欠けている様にも感じます。日本は発展しましたが、下り坂にいるのかもしれません。ルワンダはまだまだ発展途上ですが、上昇しています。この逆説は興味深いです。

小倉さん：私は若者が起こす問題がとても理解しがたいです。我々世代は今の若者ほど豊かさを享受しませんでしたが、ある意味で心は健康だといえます。

井上：祖父母の時代の人は、伝統の大切さを教えてきませんでした。子どものことを忘れ仕事に没頭してきたのです。私たちは甘やかされてきたのも事実です。また、日本人の美徳を考えると、公共の場で他人と話すということもほとんどないと思います。日本社会にはコミュニケーションがかけているのです。今ある問題は若者だけに原因があるわけではないと思います。

古屋： 戦後、日本人は国を再建し、貧乏な暮らしから抜け出して豊かな社会を築こうと必死で努力し、その結果として高度経済成長を達成しました。しかし現代の若者にもはやそのような情熱はなく、私たちは生まれたときから豊かな生活を享受して何不自由なく暮らすことができます。現状に満足してしまっている日本の若者は社会を動かすエネルギーをどこに見出せばいいのでしょうか。

岩垣：世界中の、平和に対して意識が高い人々と交わり、広島などの恐ろしい体験を世界に伝えていけるようにしたいです。

小倉さん：聞くことも重要ですね。伝えることともに、広島に来た人の話を聞くように努めています。私の道具は英語とインターネットですが、これを動かすのは情熱です。

4、感想

自分自身長崎の平和記念公園は見学したことがあったが、広島は今回が初めての訪問となった。この日は寒い晴れ空の下、朝9 時に宿舎を出発し路面電車のある大通りを歩いた。記念公園は歩いて 15 分程のところにあった。公園に近づくと、最初に原爆ドームが見えてきた。整然とした長閑な都市の中に突然現れる剥き出しの鉄筋は強烈な違和感を放って我々を捉えた。さらに近づくと、迫り来るドームはむしろ遥か彼方にあるように感じられた。私は、65 年という距離を急いで核心に迫ろうとしていた。飛行機で 30 時間かけて来日したルワンダ人にはその距離はさらに遠かったのかもしれない。彼らは笑顔で原爆ドームをバックに写真を撮り続けていた。いや、老人がベンチで笑いながら鳥の囀りを聞き子供づれを眺めている、この平和な公園ではそれが全くの自然のようであった。

公園を進んでいくと、「自己を知れ」と刻

まれた平和の鐘があった。ルワンダの虐殺跡地に掲げられた「あなたがあなた自身を知っていたら、このようなことは起きなかっただろう」というメッセージが頭に思い起こされた。戦没者慰霊碑の前に立つと、哀悼と決意の炎が原爆ドームを背景に燃えていた。計算された構図に納められたドームは近くで見るよりも象徴的に浮かび上がった。記念館を見学する中で原爆投下後の広島が焼け野原になった模型や被爆者の写真が多くあった。ルワンダ人は学校の歴史で学んだヒロシマの悲惨さについて、資料館を見学して、より実感することが出来たと言っていた。原爆投下にいたる歴史背景についても興味深く聞いていた。甚大な被害を伝える写真その他の資料に関しては冷静な眼差しで一つ一つを確認するように見ていた。小倉さんが原爆の被害がどのようなものだったのかという場面を説明している時、彼らは皆、目を見開き、身を乗り出すように聞いていた。また、「原爆体験と虐殺は直接比較することはできないが、命の尊さを訴えるという点では共通するメッセージがある」、と Calliope は語っていた。小倉さんのように自らの体験を次世代に語り継ぎ、世界に平和を訴えていく活動の大切さも改めて実感したと、Maurice は言っていた。また、Marine は、「私も命を狙われ身内を失うという悲惨な体験をしてきたので、小倉さんの気持ちを共有できる」と話していた。

小倉さんとの対談は、ルワンダから広島、そして現在から 65 年、という距離を縮めようとそれぞれの位置から歩み寄る過程であったように感じた。我々が共有したもの、それは大量殺戮に対する怒りと悲しみ、そして平和への訴えであった。「死というものを通じて、私は世界の誰とでも繋がり合えると信じている」という小倉さんの言葉がとても印象的だった。

今回の対話は被爆、虐殺の背景、復興、和解の努力から日本の若者が抱える問題、ルワンダ人が日本に伝えるべきメッセージにまで広がり、お互いの国が抱える問題と意識を共有できた。企画全体の日程が前倒しになったこともあり、話し合いには十分な準備を設けることができなかったのは少々残念であった。この試みをきっかけに、日本とルワンダの学生として、平和への訴えという意味で何かの形で継続的なネットワークを形成し、アクションを起こしていきたいと考える。

５、<u>ルワンダ大学生感想</u>

The extreme horrible things I saw in Japan, and it was so sorrow to see and hear the history of Hiroshima. Always I heard this War in history and see that house which remained in Hiroshima, but I saw it with my eyes, unfortunately, powerful countries are not doing some thing to stop nuclear weapons as well as Korea recently tested one, a shame for me. Why??In addition, I was excited by the Peace watch Tower, wonder why and what is the role of this while countries are still making nuclear weapons??

For sure, Peace is my hope and I thing every one should look in the same direction as me, and am sorry for the victims of these scandals. I tried to understand it because in Rwanda we have had Genocide and people killed others by machetes …I hope the BELL OF PEACE will ring and each one of this world will understand it and cease the fire, conflicts, Wars, segregations,….as we young people we are willing to rebuild new world. （カリオペ）

Atomic bomb victim's story (Mrs. Ogura)

Very sad to hear her, but I hope everyone is now updated about these kinds of horrible periods as survivors are giving testimonies about what happened to them.

I wish Ms Ogura will come in Rwanda and observe how survivors are straggling to survive and it was my wish for Hiroshima peace builders Centre to take action in Rwanda for advocating for people who survived Genocide in Rwanda in 1994 Tutsi Genocide. （カリオペ）

Hiroshima peace memorial site: When you visit this place, you see at first time a Dome of Atomic bomb which is nearby a T bridge which is well known in HIROSHIMA history. what I perceive is that this memorial site is well equipped and contain a sufficient space in the town and it is really an international site because we met the European, American, and Asian and also we, Africans who was there and this site is specially visited by the students, researchers and many persons who want to know history of Hiroshima and Damage of Atomic Bomb dropped in HIROSHIMA in 1945.
（モーリス）

VISIT OF HIROSHIMA PEACE MEMORIAL MUSEUM

We realized this visit to know better the historical reality of the atomic bomb dropped on HIROSHIMA. After making a tour inside the memorial site and gaining information from a guide, books, pictures and movies, we noticed that Atomic Bomb is an inhuman weapon because it caused inestimable suffering at the time and continue to cause the suffering to this day. So we decided to do as much as we can to convince the world never again to permit

the use of nuclear weapon. Me personally I have been impressioned by the courage of citizens of Hiroshima in reconstruction of their city. That inspired me to do hard in my life because I realized that if you really want something you can achieve to it.

Conferences and presentation we had helped me to have an idea on deferent policies like:
Politics as well in Rwanda as in Japan
Rwandan activity in peace building like GACACA and Japan activities in peace building.
Different problems in Japanese society and Rwandan society and we tried to give our opinions to resolve those problems.
Economy of both countries and strategies to improve it.

（ナディーン）

At Hiroshima peace memorial museum that was my occasion to explore the historical tragedy that Japanese people have been victims. My impression was that all over the world, people should stand for the abolition of nuclear weapons.
（マリーン）

コラム　ショッピング　in　秋葉原

1月3日は、夜に広島へ移動する日。

日中は、ルワンダ学生の希望もあり、ショッピングへ行くことに！デジカメやパソコンを買いたいということで、日本を代表する電気街「秋葉原」へ向かった。年始ということもあり、安い家電を求めてやってくる人々の多さに驚いていた。

まず始めにデジカメを買いに行くため「家電量販店 A」へ。さすが秋葉原！安い！　店員に機能などの説明を聞き、「手ぶれ補正」をどう訳すのか戸惑いながらも Calliope がこれにすると決めた！

しかし、彼らはアメリカドルは持っているものの、日本円をあまり持って無かったため、外貨両替所に行くことに。駅前の外貨両替所に着くと、シャッターが閉まっていてやっていない…。

その日は、1月3日であったため外貨両替所は営業休止日であった。

どうするか考えていると、「家電量販店 B」ではアメリカドルでも支払いが可能とのことで「家電量販店 B」で先ほど選んだデジカメを探した。

そこでも、同じ機種のデジカメはあったが、値段が「家電量販店 A」より高かった…！

「家電量販店 A」での値段を言い、証拠として撮った写真を見せ交渉すると、その値段に値下げしてくれることになった。

さらに、サービスで SD カードも付けてくれた。

Calliope が二つ、Nadine も二つ買った。それぞれ、友人や家族のためだと言っていた。

そして、Calliope はお店を出るなり、箱からデジカメを取り出し早速、嬉しそうに写真を撮っていた。

ただ、取扱説明書が日本語のものしかついていなかったためその場で、Calliope と Nadine に英語モードに設定すれば大丈夫だと説明した。その後、みんなでランチを食べていると、パソコンを買いに行いっていた Maurice が大きな紙袋を持って戻ってきた。

海外の人に日本のイメージを聞くと

電化製品の性能がいいと言われることが多々ある。

もはや、電化製品は日本の文化とも言えるのではないだろうか。

（宮本）

第３章

第３回日本ルワンダ学生会議　本会議活動報告

第３回　本会議報告

<table>
<tr><th>プレゼン内容</th><th>発表者</th></tr>
<tr><td>【鳥取会議】
１、ルワンダの農業（導入）
２、ルワンダの農業（事例）
３、日本の農業に関する諸問題</td><td>
Nadine
Maurice
The FanKey―開発途上国へのアプローチ―の皆様</td></tr>
<tr><td>【東京会議】
４、明治維新と日本の近代化
５、日本の人口問題と福祉</td><td>
中山康平
海原早紀</td></tr>
<tr><td>６、ルワンダ・ビジョン 2020
７、ジェノサイド加害者による社会奉仕活動の公益としての効果</td><td>Calliope
Marine</td></tr>
<tr><td>８、オルタナティブな視点からみた持続的発展</td><td>井上真希</td></tr>
<tr><td>９、沖縄県におけるアメリカ軍基地建設問題</td><td>岩垣穂大</td></tr>
<tr><td>【広島会議】
１０、日本の平和構築、国際社会における日本の責任</td><td>
古屋亮輔</td></tr>
</table>

活動内容・目的

ルワンダ・日本両国の発表者が各々の大学での専攻分野・興味にあわせトピックを選び、プレゼンテーションを行う。話題は、歴史・文化・政治・経済・農業・平和など多岐にわたる。その後、そのトピックに関し、ディスカッションのテーマを設定し、自由に議論を行う。お互いの国の現状・問題点を深く認識し、それらに対して現在、未来の視点で提言を行うことを目標とする。

今回のテーマ

訪問する地域の特色を活かし鳥取では「農業」、広島では「平和」を扱う。その分野の最先端を研究する専門家の講義も聞き、より高いレベルで質の高いディスカッションを目指す。

ルワンダ・日本が抱える今現在の問題、またこれからの両国のあるべき姿に焦点を当てる。

日本について多角的な視点から紹介することにより、日本に対するバイアスを取り除き、経済発展の裏にある負の側面を含めた現状を伝える。

成果

バックグラウンドを異にする学生が、同じ土俵に肩を並べ、意見をぶつけ合うことで生まれる「人と人」の強い関係を構築した。

日本とルワンダにおける様々な問題の意識を共有し、現在おかれている自分の立場から何らかの解決策、提言を導き出した。

1、ルワンダの農業（導入）

発表者：Nadine

【プレゼン】

DAN AGRICULTURE TODAY

Soil fertility

- A high proportion of the soil has a significant acidity .
- 75%of the land is highly degraded and it has the highest negative nutrient balances in sub-Saharan Africa.
- Soils are being lost at a rapid rate , about 1.4 million tons per year.
- This is equivalent to a decline of the country's capacity to feed 40000 people per year.

Land availability

- The Rwanda is a small country with 26338km2.
- The available land for cultivation is 52% because of the high population density.
- The land holding is small and is divided in many plots.
- In addition to the small size of the farmers and plots, crops are grown on the steep slops.

The climate effect

- The climate is characterised by strong precipitation on mountainous area , causing the erosion and soil degradation.
- Low altitude experience erratic and low rainfall.
- Other general problems in terms of water and soil are poor use of farmyard manure and the agro forestry which is not developed.

Other general problems in terms of soil and water

- Poor use of farmyard manure .
- The agro forestry is not developed , which explain the lack of fire wood and the use of farm residues in the home.
- The erosion control actions are being applied but not sufficiently.
- Tradition techniques for regeneration of soil fertility such as fallowing are no longer possible.

CONCLUSION

As conclusion, I can say that our agriculture is still on low level, but we are trying to improve it with a big help of our government policies.

The reason why I chose the subject:
As agriculture is my measure and I am Rwandese, I am interested in Rwandan agriculture. So my objective was to share with you the knowledge I have about our agriculture in order to inform you and then get some opinions and advice from you, according to your advanced step in Japan agriculture.
In my presentation I showed you at which level we are and at which level we want to be. So I am grade we exchanged the ideas that will help me to contribute in improvement of our agriculture, as it is my responsibility.

２、ルワンダの農業（事例）

発表者：Maurice

【プレゼン】

In this 3rd JRYC , I had a presentation on Rwandan Agriculture in term of using **FERTILISER**, so my purpose was to explain the soil fertility of Rwandan land which is unfertile due to the soil acidity and to show the Japanese students how we are affronting this problem and then to enable them to expand their field of creativity.
I do think we shared many things through discussions that were talking about Japan and Rwandan agriculture in general and the results of this debate will be seen in future.
I appreciated how these Tottori university students were keen on our Topics.

３、日本の農業に関する諸問題

The FanKey－開発途上国へのアプローチ

発表者代表者：金剛穂波

【プレゼン要旨】

私たちのルワンダ学生に対する「日本農業の概要」に関するプレゼンは、以下の４つの項目に沿って行った。その項目とは、①日本農業の特徴、②日本農業の弱点、③日本農業の課題、④大学における農学部の役割、また鳥取大学農学部の構成、である。

まず、はじめに①日本農業の特徴として、時系列に見た日本の田畑の農耕地面積、また主な日本の農耕地の種類の面積別分布割合、日本の生産作物（野菜、果樹各々について）の種類の例、農業者数の減少をグラフを用いて説明した。次に、日本の主要農作物である「コメ」について、水田面積の現状、また水稲における機械の種類（トラクター、コンバイン、田植え機）、その利点を説明した。その利点については、歴史からみて、重労働の克服、労働時間の短縮などの例を挙げた。

二番目に、②日本農業の弱点として、農業という第一次産業は、他の第二次、第三次産業と比べて、収入が難しく、特に若い世代の日本人の農業における基礎的知識、技術が衰退している現状を述べ、それに伴う、耕作放棄地の増加、輸入依存傾向を説明した。ここで、輸入依存傾向の理由として、日本の輸入品に対する関税の低下、第一次産業の衰退を挙げた。また、輸入依存における将来的な不安要素として、他国での輸出規制、食糧争奪について述べた。

三番目に、③日本農業の課題として、耕作放棄地の利用による農耕地面積の増加、日本国民の農業意識、技術の見直しを挙げた。

最後に、④大学における日本農業の役割、また鳥取大学農学部の構成を説明した。はじめに、一般的に日本における「農学部」とは、環境保護、食糧生産における外交での役割を担っていて、日本では公立大学 26 校、私立大学 6 校が 2009 年現在存在している。その中の一つである鳥取大学農学部は、一学年約 200 人、6 コースから構成され、その六コースの特徴を説明した。それから、農学部の役割ついて、私たち自身は大学生として、実際に農家とのコミュニケーションを行い、「農業」に触れて、それぞれの興味のある、また日本に貢献されうる研究を行うべきだ、と考えている。

４、明治維新と日本の近代化

発表者：中山康平

【プレゼン要旨】

1. 日本の歴史

３世紀までに、狩猟・漁業・採集を中心に生活する縄文時代、稲作を行う弥生時代を経験。４世紀から１２世紀にかけては大陸から文化物などを導入し、発展。国は天皇が統治する。７世紀には中国の唐にならい、律令政治のもと、法治国家体制を確立。しかし、８世紀になるとこれもくずれ、貴族が力を蓄えていく。これにより貴族文化が形成されていった。１２世紀に入ると、武士が力を付け、幕府の征夷大将軍をトップに、国を支配するようになる。１７世紀には鎖国を始めた。１８世紀になると商人が力をつけ始め、幕府の支配体制が揺らぐ。また、この時期になると文化、教育が発展し、近代国家発展期の基礎が作られる。１９世紀後半になると、アメリカのペリーが来日し、鎖国が終了した。このことにより、諸外国との貿易が始まり、日本の経済は大打撃を受ける。こうして、反幕府勢力の勢いが強まる。最終的に、幕府は政権を天皇に返還、大政奉還を行い、明治天皇を頂点に置く、明治政府が設立された。

2. 明治維新

日本史における政治的革命。徳川将軍が没落し、国の支配権は明治帝のもと天皇親政に戻り、明治時代として知られる政治的、経済的、社会的大変革の時代が始まった。この革命は日本に近代化と西洋化をもたらした。江戸幕府に歴史的敵意をもつ諸藩の若い武士を主体とする維新の主導者は、深刻化する国内問題と外国による侵略の脅威をばねにして活動した。「富国強兵」というスローガンを採用することで、彼らは西洋列強と肩を並べられる国民国家を作ろうとした。慶応４（1868）年の五カ条の御誓文に述べられているように、東京に移転した新政府の第一目標は幕府体制の解体であった。これは明治４（1871）年、各藩が公式に廃止され、県制度に置き換わったことでおおむね達成された。すべての領主的特権も廃止された。同じ年に国軍が創設され、1873 年の徴兵令によって一層の強化がはかられた。新政府はまた、金融と税制の一本化をはかる諸政策を実施し、1873 年の徴兵令によって一層の強化がはかられた。新政府はまた、金融と税制の一本化をはかる諸政策を実施し、1873 年の地租改正により、主要収入源が確保された。

維新指導者が天皇の名のもとに進めた革命的な変化は、1870 年代半ばに反対論の高まりに直面した。新政府を相手にした各地の反乱には不平士族が参加しており、その最大のものがかつての維新の英雄、西郷隆盛が率いた反乱（西南戦争）であった。これらの武装蜂起は大きな困難を伴いつつも、新たに創設された軍隊の手で鎮圧された。新政権に不審をいだき、その農業政策に不満をもつ貧民たちも反乱に参加、こうして運動は 1880 年代に頂点を迎える。同じ時期、自由な西洋思想の導入によって勢いづいた自由民権運動は、立憲政府の創設と国旗を通じたより広範な政治参加を要求した。こうした圧力に対応して、1881 年、政府は 1890 年までに憲法を起草することを公約した。1885 年に内閣制度が整い、1886 年には憲法起草作業が開始された。最終的に 1889 年、天皇から国民に下しおかれる形

で憲法が公式に発布された。これをもとに、二院制に議会が設けられ、参政権に制限はあったものの、選挙によって議員が選ばれた。翌 1890 年、第一回帝国議会が開かれた。
明治時代には政治的変化と並行して、経済的、社会的変化も進行した。経済は依然として農業に依存していたが、工業化が政府の第一目標であり、政府は戦略的産業や交通、通信分野の発展を指導した。日本初の鉄道は明治 5 (1872) 年に創設され、1890 年までに線路の総延長は 2250 ㎞に達した。すべての主要都市が 1880 年までに電信で結ばれた。民間企業も政府の財政支援によって奨励を受けるとともに、これを支援するため 1882 年にはヨーロッパの銀行制度を模した金融機関も創設された。こうした近代化への努力には西洋の科学技術が必要であり、文明開化の旗印のもと、西洋文化は知的流行から衣服や建築にいたるまで、盛んにもてはやされた。しかし、無分別な西洋化は 1880 年代にいくぶん抑制され、伝統的な日本的価値を新たに称揚する動きが現れた。たとえば、近代教育制度を発展させる場合、西洋の理論と実践の影響を受けながらも、武士の忠誠心や社会的調和といった伝統的価値観が強調された。同じ傾向は芸術や文化にもみられ、当初は西洋スタイルが模倣されたが、その後西洋的趣味と日本的趣味のより選択的な混交が実現された。
20 世紀の初めまでに、明治維新のさまざまな目標はおおむね達成され、日本は近代工業国になる道を着実に歩んでいた。(ブリタニカ国際大百科より引用)

【プレゼン詳細】

テーマを扱った動機　明治時代の日本の発展は世界的にも有名であり、フランスの世界史の授業でも重きを置かれていたから。また、その発展の過程をルワンダ人に学んでもらうことで、ルワンダの発展に何らかの貢献が出来ればよいと思ったため。

テーマの背景　開国したことにより、幕府の力が弱まる。その結果、天皇への政権返還が行われる。

プレゼンの展開　①日本の歴史の概要の説明　②明治維新について　③質疑応答　④討論

プレゼンに込めたメッセージ　日本がどのように近代国家として発展したかを知ってほしい。

【ディスカッションテーマ】

明治維新における発展は、ルワンダに、どう生かすことが出来るか。

【ディスカッション過程】

・ルワンダ人はこの明治維新についてどう思うか。
・ルワンダが発展することにこの明治維新の知識は役に立つか
・もし、役に立つのなら、どのように役立てるか。

【結論・提言】

明治維新における日本の発展は、欧米諸国を模倣したことにより成し遂げられた。
しかしながら、ルワンダにおいてそれを

することは容易ではない。確かに、欧米諸国はルワンダの発展に貢献することを行ってきた。しかしながら、それ以上に彼らに大きなダメージを与えてきた。「欧米を模倣することが良いと言うが、日本は彼らに侵略され、ダメージをうけたことが無いから、そういう事がいえる」カリオペが述べた言葉である。確かに国の発展に欧米化は必要でるはずだ。しかしながら、国の発展＝欧米化なのであろうか。

【感想】

ルワンダ人の意見には、心を打たれた。サルコジ大統領のおかげで、ルワンダや周辺諸国は更なる発展が期待されている。果たしてそうであろうか。国民と政治レベルの人々の間には意識的に大きなギャップがあるように感じた。

５、日本の人口問題と福祉

発表者：海原早紀

【プレゼン要旨】

日本では少子高齢化が急速に進んでいる。現在の福祉制度のままでは、高齢者を支える若い世代の経済負担がふくらむばかりだ。
子供を生みやすい環境づくりや、福祉制度・税負担の見直しなどいくつかの提言を示した。最後に実際政権を握った民主党がどのような政策を実行しようとしているか、マニフェストの内容を紹介した。

【プレゼン詳細】

テーマを扱った動機

日本の経済と国民生活に影響を与えることが一目瞭然である社会問題をとりあげようと考えた。また、日本社会が女性にとって子供を生みづらい環境である中、自分が将来どのように家庭を持つのか、という個人的な問題提起ともリンクしていたため、会議でとりあげたいと考えた。
前日の会議で日本の政府が今取り組んでいる政策について知りたいという声があり、福祉問題に絡めて政策も紹介する流れを作った。

テーマの背景

日本では何年も前から少子高齢化が大きな問題として叫ばれているが、出生率はそれほど上がらず高齢者を支える財政負担は膨らむばかりだ。若い世代が高齢者を支える構造の社会福祉は、今後の日本社会では機能しないとも考えられる。

プレゼンの展開 まず日本における高齢化の実態と、戦後から減少していく合計特殊出生率を説明した。結果として日本の人口が「ピラミッド型」から「坪型」に変化するグラフを提示した。

次に社会福祉について定義し、少子高齢化社会が福祉制度にもたらす問題を説明、例として介護保険制度予算の負担割合を取り上げた。

少子高齢化対策として、子供を生みやすい環境づくり、社会福祉への税収予算拡大、高齢者への補助削減、外国人労働者の誘致などを提言した。

最後に民主党が少子高齢化に対してどのような政策を打ち出しているか紹介した。「3つの約束と7つの提言」のうち、4 項目がこの分野に関わることを指摘し、日本は早急にこの課題にとりくまねばならないと結論付けた。

プレゼンに込めたメッセージ

・一見経済大国として幸せな国家に見える日本も実際は大きな問題を抱えていて、それを解決するのに苦労していることを伝えたい

・ルワンダは、このような問題が生じないように注意し、より良い社会を築いていってほしい。

【ディスカッションテーマ】

① 日本の少子化対策､民主党の掲げる政策について。
② ルワンダにおける人口問題と政策。
③ ルワンダにおける女性の仕事と子育ての両立。

【ディスカッション過程】

少子高齢化社会、福祉問題について理解したルワンダの学生は、日本が抱える問題は重大な課題であるとコメントした。また、民主党が看板政策としていた「こども手当て」について、補助金を出すだけではこの問題は根本的な解決にはならないと指摘した。

一方、ルワンダでの人口問題は、逆に多産を抑制するファミリープランニングが行われている。性教育の普及も図っており、学生は望まない妊娠を避けることを学んでいる。

これに対して日本の性教育がどのようなものか説明すると、ルワンダ学生から「時期が遅い」「学習内容が足りない」「日本では未だにセックスがタブーなのか」と批判の声が飛び交った。

議論は転じて、中絶の合法化についての話になった。敬虔なキリスト教徒であるルワンダのメンバーは命を犠牲にする中絶は違法にするべきと強く講義していた。しかしレープ事件や援助交際等の場合も考えると、中絶は合法にするべきだという意見が多数であった。

ルワンダ女性の仕事と子育ての両立は容易である。産休は数ヶ月であるが、仕事復帰後は勤務時間がフレキシブルである。ハウスワーカーが家事をすることも一般的で、「日本ではなぜハウスワーカーがいないのか、母親が料理を全部するのは不思議である」という質問が挙がるほどだった。日本では家庭に外部者が関わることを嫌う文化があると答えた。また、ルワンダでは近所の家庭で子供の面倒を見る。コミュニティの絆が強いため子育てがしやすい、日本も

地域のコミュニティ意識を強めるべきという提言もあった。
老人の介護についてもルワンダではコミュニティが機能するようだ。老人の介護が負担であるという意識はなく、日本では老人が孤独死を遂げることもある事実に驚いていた。
しかしルワンダでは日本と違って、若いうちに結婚しなくてはならないという意識が強く、女性は常に結婚というプレッシャーが付きまとう。

【結論・提言】
・日本が抱える少子高齢化の問題は重大なものであり、政府は早急により効果的な対応をするべきだ。
・中絶は場合によっては許されるが、命を殺すことを軽視してはならない。
・家族・コミュニティ内で子育てや介護といったケアを分担することが重要。

【感想】
私は本会議でルワンダが少子高齢化社会となる可能性について議論したいと考えていたが、ルワンダの学生はそのような危機感は全く覚えていないようだった。国家の政策として多産抑制をしているなら、当たり前のことだろう。しかし私はルワンダにも日本同様の問題に直面する可能性を少し見た。例えば、「若くないと結婚できない」という社会の偏見があるのなら、高学歴名女性は結婚・出産を逃すケースが出てくるのではないかと思った。またルワンダがキガリの都市化、企業の誘致などを今後進めていくようだが、都市の経済活動が活発になれば、自ずと地方に老人が残され、過疎化につながるという事態もあり得るのではないかと思った。
今回の会議では、家族・コミュニティで福祉を実現できている例をルワンダに見た。日本の現状は十分に理解してくれたようだが、なぜ日本では子供を産めない・老人の面倒もみれない、という印象を強く残したかもしれないそして日本人はもっと家族を大切にすることから、改革を始めればいいというアドバイスがあったが、改めて言われるとあまりに根本的な部分が日本人には欠けていると思い知らされた。

６、ルワンダビジョン 2020

発表者：Calliope

【プレゼン要旨】

The Theme about Rwanda and Vision 2020 and Fifteen years after 1994 Tutsi genocide in Rwanda are turning around the following questions to be answered: How do Rwandans envisage their future? What kind of society do they want to become? How can they construct a united and inclusive country? Rwandan identity? What are the transformations needed to emerge from a deeply unsatisfactory social and economic situation? The Rwandan population is expected to double to around 16 million by 2020. Given that the major aspiration of Vision 2020 is to transform Rwanda's economy into a middle income country (per capital income of about 900 USD per year, from 290 USD today), this will require an annual growth rate of at least 7%. Remember the three pillars of 2020:

Comprehensive human resources development, encompassing education, health, and ICT skills. aimed at public sector, private sector and civil society. To be integrated with demographic, health and gender issues;

Infrastructural development, entailing improved transport links, energy and water supplies and ICT networks;

Promotion of regional economic integration and cooperation.

【プレゼン詳細】

テーマを扱った動機・背景

The reason to choose this subject is that I personally want to discuss with Japanese students and get more positive critical ideas which can help us in improving through recommendation this vision. But also to exchange with them what Japan did use to be developed like that it is today. In addition, the second subject was chosen because Rwanda must be known in its development not only through the Genocide done for Tutsi in 1994. Always, when you say Rwanda abroad, they quickly understand Genocide and I want to show Japanese students that Rwanda is having a step forward and progress in development just after Genocide and also making every one aware about the consequences of Tutsi Genocide.

プレゼンに込めたメッセージ

Rwanda is getting more aware of it strength and weaknesses and seeing how to overcome those weaknesses toward sustainable development.

【ディスカッションテーマ】

・Is the vision 2020 relevant to push toward the development of Rwanda?

・Did Japan in its history of development establish such kind of strategy?

・What should be the role of Young people in this process of Vision 2020?

【結論・提言】

The vision itself is good and fruitful, but leaders should evaluate and show how far are we and what was done and not.

【感想】

The subject was so interesting, very discussed and some times Japanese students want to go deep but Rwanda side say no we are not politicians to know everything.
So, everyone was so attentive.

７、ジェノサイド加害者による社会奉仕活動の公益としての効果

発表者：Marine

【プレゼン】

My theme of presentation was about TIG(Travaux d'interet general),Works of general interest in English language.This is the alternative punishment to imprisonment that is given to genocide accused who have confessed and asked forgiveness whereby they spend half of their sentences in prison and an other half outdoors performing works of general interest for the society.They must be classified in the 2^{nd} category of the Gacaca Law .My interest in the topic was based on the fact that as a future lawyer of Rwanda, as country which suffered from the tragedy of 1994,the eradication of all problems related is my concern.

８．オルタナティブな視点からみた持続的発展

発表者：井上　真希

【プレゼン要旨】

近年、世界的なNPO・NGOの数の増加に伴って第三セクターとしての市民社会の存在が注目されてきている。そこには政府や市場による経済重視でない、その地域に基づいた人々の意見が直接反映される場がある。
冷戦終結後、新自由主義として推し進められた経済のグローバル化により世界の富裕層と貧困層の格差は大幅に増長された。このプレゼンテーションでは特に貧困削減の分野で取り組むNGOであるグラミン銀行のマイクロクレジットの事例を紹介した。グラミン銀行はバングラデシュの最底辺層の女性達に低金利の融資を提供することによって、スモール・ビジネスを誘発し、社会復帰させるという取り組みをしている。そこには最貧困層の人々を貧困の連鎖から断ち切るというメリットもあれば、地域内での格差の拡大などデメリットもあることを説明した。
次に、ユニークな政府の取り組みとして、ブータンの国民総幸福の理念と実践を紹介した。先進諸国が辿ってきた経済発展による伝統文化の衰退と自然環境の崩壊に危惧したブータン国王は人々の「真の幸福」とは何か、について考えた末、GNHの理念を提唱した。GNHは、途上国にとって経済発展だけがすべてではないという、オルタナティブで持続的な発展の形を提示し、先進国にとっても今までの発展により生じた問題を見直すきっかけとなるだろう。

【プレゼン詳細】

テーマを扱った動機

大学で東アジア共同体を構築するためのエンパワーメントになっているNGOやNPOの取り組みについて学び、市民社会の視点の重要性に注目するようになった。そしてルワンダの学生に、経済重視の国家主導な発展でなく、市民社会の視点をベースになされる「発展」の形についてどう考えるのか知りたいと思った。貧困削減の分野を取り上げたのは、それが現在のルワンダが抱える大きな問題のひとつだからである。

テーマの背景

近年、市民社会の越境的な活動は環境問題、貧困削減、紛争予防、人権問題など様々な分野で注目されており、国家や市場とは異なる視点を与えており、それには市民の意見がより正確に反映されることが期待されている。

プレゼンの展開

①イントロダクション：今日の市民社会の役割
②市民社会の視点からみた持続的発展
- 近年、世界で増加するNPO・NGO
- 第三セクターとしての市民社会の役割

③貧困削減のための取り組み
- 経済のクローバル化と世界で拡大する経済格差
- マイクロクレジットの事例
- マイクロクレジットのメリットとデメリット

④画期的な政府の視点から見た持続的発展
- ブータンの国民総幸福（Gross National Happiness)の理念

・ GNHに対する評価
④ 質問・グループディスカッション

プレゼンにこめたメッセージ

・ 経済発展だけが「発展」ではなく、その地域に暮らす市民の意見に根ざした発展こそが「持続的発展」であること。結果的に市民社会の視点からの持続的発展が国としての発展につながること。
・ 開発の過程において、自然環境や伝統文化の保護を行うことが重要であること。
・ 幸福とは物質的充足だけではなく精神的充足も伴うものだということ。

【ディスカッションテーマ】

① マイクロクレジットはルワンダで機能するか？
② 市民社会の視点に基づいて、マイクロクレジット以外の貧困削減に対する取り組み
③ ルワンダで GNH の理念を実践することは可能か？

【ディスカッション過程】

まず、①のディスカッションテーマに関してだが、既にルワンダでもマイクロクレジットは実践されていることを知らされた。時折、トラブルもあるが、基本的に機能しているそうだ。
②のテーマについては逆に「戦後の日本はどのようにして復興し、貧困削減に取り組んだのか。」と質問で返された。結果的に日本側は適切に答えることができなかった。
そして、③のテーマではブータンは資源が豊富だから、外国に対して閉鎖的な政策ができるが、ルワンダは資源を近隣国に頼らざるを得ないので困難かもしれない、という意見が印象的だった。

【感想】

マイクロクレジットの事例も GNH の理念もルワンダ人学生にとって、新しい観点を与えるのでは、と期待してこのプレゼンテーションを行った。しかし、彼らの反応からして、市民社会の役割や自然環境や伝統文化の保護に重点をおく政策の重要性よりも、資源の供給手段や経済発展を基礎とした発展および貧困削減の政策の方に関心があるような印象を受けた。
彼らが日本から学びたいことと、私たちが伝えたいことにギャップがあると感じた。

９、沖縄県におけるアメリカ軍基地建設問題について

発表者：岩垣　穂大

【プレゼン要旨】

真っ青な空、エメラルドに輝く海。温暖な気候、サトウキビ畑、ハイビスカス。自然を活かした観光産業が有名な沖縄には毎年多くの観光客が、日本中、世界中から訪れる。しかし、そんな沖縄は、沖縄戦後、アメリカによる支配を 30 年以上も受け続け、現在もなお多くのアメリカ軍基地が存在する基地の島としての顔を持つ。

第二次世界大戦後、日本は憲法九条によって二度と同じ過ちを繰り返さないことを世界に誓った。それは、すべての戦力としての軍隊・武器を保有しないという誓いであった。そのため、日本は有事の際、日米安全保障条約によって国内に駐屯するアメリカ軍によって守ってもらわなければならなくなった。しかし、現在その日本に存在するアメリカ軍基地の 75%が、日本の国土の 0.6%しかない沖縄に存在するのである。沖縄では、日本政府やアメリカ政府に対し、様々な基地建設反対運動が行われてきた。その動機は、沖縄から飛び立った飛行機によってイラク、アフガニスタンの市民の命が奪われている、ジュゴンも生息するきれいな海を埋め立て、地域の環境を破壊する、飛行機の離発着における爆音・・・など枚挙に暇がない。

深まる政府と住民の対立。果たして日本はこのまま憲法九条という人類の宝を維持し、平和な世界を築くリーダーとしての役割を果たしていけるのであろうか。

【プレゼン詳細】

テーマを扱った動機

・現在、日本で行われている最も白熱した議論なので、いまの日本の現状をそのまま伝えられると思った。

・憲法九条について、軍隊が絶対的力を持つルワンダに住む彼らの意見を聞いてみたかった。

テーマの背景

・沖縄には多くのアメリカ軍基地が存在し、住民はそれによって苦しんでいる。

・日本は軍隊を有しないためアメリカ軍に守ってもらわなければならない。

プレゼンの展開

一般的な沖縄のイメージ紹介→基地の島としての沖縄紹介→基地建設賛成派の意見を憲法九条、日米安全保障条約を交えながら説明→基地建設反対派の意見を環境破壊、生活公害などを中心に説明→双方の意見を考慮しつつ解決策を導き出すためのディスカッション

プレゼンに込めたメッセージ

・憲法九条は世界の恒久平和を願った大切なものであるということを伝えたい。

・アメリカ軍基地がもたらす沖縄県民の苦しみを現地の人の言葉とともに伝えたい。

【ディスカッションテーマ】

・　日本は憲法九条を改正することなく維持し続けることができるであろうか。

・　辺野古住民が行う非暴力･非服従運動は暴力に勝つことができるか。

【ディスカッション過程】
まず、憲法九条について詳しい説明を行った。彼らの感覚では、軍隊が存在しないということは考えられず、なかなか理解に苦しんでいた。そして、アメリカを中心とする世界のあり方から、イラク戦争にいたるまで、議論は広がりを見せた。

【結論・提言】
憲法九条の保持に対してはっきりとした結論は出ていないが、私は基地建設に対して沖縄にこれ以上アメリカ軍基地を建設するべきではないという提言を行った。その理由は１、沖縄県民の我慢は限界にきている２、アメリカ軍基地が日本にあること以外に、日本が他国から攻撃される理由がほとんどみつからない３、日本が負担する移転費以外に、アメリカ軍は沖縄に基地を作るメリットがあまりない。

【感想】
連日ニュースで流され、多くの人が注目している話題を扱った。確かに、隣国との関係において軍隊を持つことを余儀なくされているルワンダの人々にとって、憲法九条の話などは机上の空論のように聞こえるかもしれない。しかし、恒久平和という理想は忘れてはならない。日本が体験した原爆の悲劇を、ルワンダが体験したジェノサイドの悲劇を二度と繰り返さないために、人類はこの理想を掲げ、武器を捨てることを選択しなければならない。

１０、日本政府の平和構築

発表者：古屋亮輔

【プレゼン要旨】

日本政府の目指す平和構築とは何か、外務省の公式見解に基づく理念、目標、ODA 予算の変化や人材育成の計画を紹介した。
ODA に関しては、近年予算が減少傾向にある点や日本国民の関心の低さを強調し、被援助国ルワンダの学生の感想を求めた。

【プレゼン詳細】

テーマを扱った動機

日本は世界の政治や経済をリードする国家であり、大国の当然の責任として安全保障や経済の面で途上国を支援しなければならないという認識があった。歴史上初めて核による攻撃を受けたヒロシマで学生会議を開催する今回は「平和構築」というテーマを設定し、日本政府がどのような理念をもって国際貢献を行っているのか、またそれに対する国民の認識は現在どのようなものなのかを紹介した。被支援国であるルワンダの学生が ODA の意義を理解しているのかという点にも興味があった。

テーマの背景

日本は今なお国際社会においては経済大国であるにも関わらず、近年 ODA 予算は減少傾向にあり、安全保障に関しても自衛隊の海外派遣などの活動に消極的である。
ジェノサイドを経験し国家再建・永続的な平和構築を進めるルワンダ人が、先進国からの経済支援をどのように位置付けているのか。より多くの援助を必要としているのか、あるいはすでに援助からの独立に向かっているのか。

プレゼンの展開

まず日本政府として、平和構築分野において国際平和協力の推進と ODA 拡充という 2 つの柱があることを紹介。前者では国連 PKO に自衛隊が派遣された事例と現場での具体的な活動内容を示した。後者では政府の意図する ODA の目的が「平和の定着」であることを明らかにした上で、それに逆行する国民の ODA に対する意欲の低下と 90 年代以降の実際の ODA 予算の減少を、上位 5 カ国との比較の上、グラフで示した。

プレゼンを聴く学生会議メンバー

続いて、日本の平和構築のもう一つの柱である「知的貢献」を紹介した。平和の定義と国づくり、国際会議でのリーダーシップ発揮、平和構築分野における人材育成などである。特に人材育成に関しては、今回協力していただいた NPO 法人ピースビルダーズが外務省からの委託を受け「平和構築分野の人材育成のためのパイロット事業」を主導していることなど、ルワンダ人メンバーが具体的な活動をイメージできるよう説明した。

最後に私の個人的意見として、今後日本は再び積極的に ODA に取り組むべきであること、PKO にも参加すべきであること、そしてそれらが大国としての日本の責任である、という旨を述べた。

【ディスカッションテーマ】

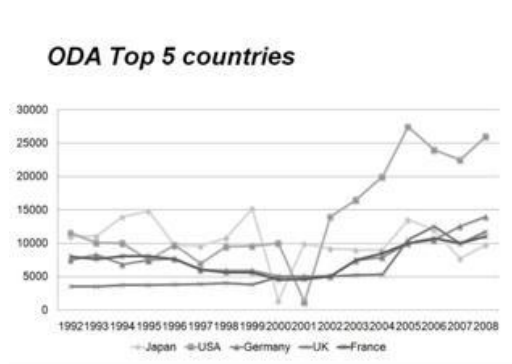
・援助国、被援助国双方が ODA をどう位置付けているのか

・日本は ODA 予算の水準を維持するべきか、減らすべきか

【ディスカッション過程】

プレゼンの時点ではルワンダ人メンバーは ODA や PKO といった、日本人にとっては常識のような国際貢献のキーワードに対する知識が少なかった。まずこれらの用語を説明し、具体的に ODA がどのような事業に用いられるか等理解した上で最初に出た質問は「なぜこんなに意味のある ODA を減らしているのか？」というものだった。更に「アメリカは昨今の経済危機の源泉であるにも関わらず ODA 実績を伸ばしており、ドイツ、イギリスなど他の ODA 上位の諸国も近年は一貫して増額している。対してかつて世界第 1 位であった日本の ODA が減少しているのはなぜなのか？」という質問が続いた。これに対し日本人メンバーが対外的な支援に金をかけるよりも国内の問題、社会保障や雇用の問題により重きを置くべきだとする国民感情を紹介し、減少した。また日本人メンバー内でも借金大国の日本が途上国支援に力を入れてよいのかという立場と、国連総会など、国際社会における発言力の向上、援助相手国からの支持拡大を重視し、ODA 予算を確保すべきとする立場とに分かれた。だが結局ルワンダ人メンバーからは、経済危機の源泉となっ

たアメリカが高い ODA 予算を維持するのになぜ日本はできないのか、という指摘があり、国内事情だけで国際貢献を疎かにする日本人の発想は理解できていないようだった。

これに関連して先進国にとっての ODA の意義についての議論になった。日本にとって ODA は援助対象となる途上国において日本のプレゼンスを高め、国連などで支持を得たり日本企業が進出しやすい環境を作ることができるようにするためである、つまり政治的な意味合いが強いと説明したところ、日本にとっての利益を重視した援助では、期待した効果が得られなかった場合は援助を打ち切ることになるのではないかという指摘があった。確かに、国益のみを重視するのであればそのような事態も起こりうる。利害など考えず援助は行われるべきだとする理想派もいたが、現実的には難しいということで落ち着いた。

日本・米・独・英・仏の ODA 実績の変化を示したグラフ

最後に特別に参加していただいた青年海外協力隊員の 3 名から ODA に関する意見を求め、ODA はすべて日本の国益のためになされるものであること、ODA 等に頼らなくても途上国が独自に発展し、文化的な国家を築くことができるということを身を持って感じたことなどを述べていただいた。

【結論・提言】

途上国の平和構築やインフラ整備などにとって有益になる ODA は今後も推進するべきである。途上国から見れば日本は非常に豊かな国であり、国際的な問題に対してより強い関心を持ち、他の国をリードすべきである。経済危機で国内に問題を抱えていることは理解できるが、それは他の国にとっても同じことであり、日本だけが ODA を減らすのは問題である。

【感想】

ルワンダ人の目から見てやはり経済大国である日本が ODA 予算を減らしていることに対しては違和感があるようだった。
ODA 実績のグラフを見てカリオペが、「日本が起きている時はアメリカが眠っていた。今はアメリカが起きていて日本が眠っている。」と言っていたのが印象的だった。私個人としては日本国民は国際社会における日本の責任をもっと自覚するべきであると思うが、メンバー内でも国内の経済問題により重点を置くべきとする考えを持つ者がいるように、今後の日本の外交戦略の難しさを実感した。
ディスカッションでは ODA に関する議論に終始したが、自衛隊の海外派兵など PKO に関する議論もできればよかった。東京のディスカッションで沖縄基地問題について話し合った際にも自衛隊の議論は出ていたが、よりグローバルな視点で自衛隊の役割をどう評価できるのか、ルワンダ人から見

て自衛隊にどんなイメージを持っているのか、などの議論をしたかった。だがやはり日本の平和主義、外交方針など前提となる情報が欠けている感は否めず、ルワンダ人メンバーとの議論を深めるにはまだ時間がかかると感じた。日常的にメールなどで日本の情報を提供し、ルワンダ人メンバーの間で知識を深めてくれれば良いと思う。

コラム　岩垣家にて

プレゼン準備

Maurice と Nadine は鳥取大でのプレゼンがあったので、数日間夕食後はパソコンに向って準備をしていた。ルワンダの農業に関する分厚い資料を持参しその中から自分のプレゼンに使う箇所をまとめていた。

食事

岩垣家について最初の食事では、おでん、串焼き、エビチリ、野菜炒めなどアジア的な料理がずらり。倹約生活でしばらく温かい手料理から遠ざかっていた我々は大喜びで美味しい夕食を頂いた。ところが、ルワンダ人の箸がなかなか進まない。日本料理に一番積極的なカリオペも一口食べては「んー」と言っている。カニを食べていると、「怪物は食べられない」と完全にひいている。結局焼き鳥とご飯くらいしか食べていなかった。どうやらルワンダ人は色んな新しい料理を食べることが苦手らしい。特に醤油が口に合わず、日本食全般が厳しい。この先どうなるのだろう…。

花火

真冬の夜、夏から残っていた花火をがんちゃんお母さんがくれて、ルワンダ人と楽しんだ。この頃までに耳にする単語は何でも真似するようになっていたルワンダ人達。「煙もろ吸った～」と僕が言うと、エフレムがとても陽気に「モロスタ、モロスタ～！」と花火をぶんぶん回している（笑）意味全然分っていないけど、ま、いいか。

クリスマス

これまで良かれと日本食をたくさんもてなしてきたが、ルワンダ人にはどうも合わない様子。聞けば生まれて初めて食べるものばかりで、味だけでなく、消化もしづらい、と医学部の Calliope が教えてくれた。Maurice は日本に来てから 5kg も痩せてしまったという。日本の文化を紹介するといっても、さすがに焦った僕らは、クリスマスぐらいはルワンダ人が絶対食べられる美味しい料理を作ることにした。渡航した経験からトマトベースのカレーはうけるに違いないと確信した僕はこの日の料理長になった。下ごしらえにも時間をかけたカレーはルワンダ人に受け入れられたよう！足りないぐらいだった。その後は、岩垣家が用意してくれたケーキを皆で食べ、色んな歌を熱唱。

ご家族

岩垣家のアイドル高校生のりかちゃんは、学校で習った英語を一生懸命使ってルワンダ人と交流していました。温和な性格は、お父さん、お母さん、おばあちゃんと一家に共通しているみたい。岩垣家の皆さんが、本当に温かく迎えてくれたことに、ルワンダ人は「ここまでの歓迎は想像できなかった」と大感激していた。

日本人の我々に対してもとても良くしてくださいました。この場を借りて御礼したいと思います。ありがとうございました！！

（千田）

第４章

参加者感想

【ルワンダ側参加者一覧】

【日本側参加者一覧】＊50 音順

＊コラム＊　　　　　ボウリング

中学校訪問後、古屋・大山・エフレム・マリーン・カリオペはそれぞれのホームステイ先の先生たちと共にボウリングに向かった。日本の娯楽文化を紹介しようという先生方の粋な計らいで、後から聞いた話ではパチンコかボウリングで悩んだ末ボウリングになったそうだ。これを聞いた私がパチンコはないだろ、と思ったのは秘密である。ルワンダ人メンバーにとってボウリングはもちろん初体験で、3 人とも大いに興奮していた。エフレムは期待通りのパワーボウルでピンをふっ飛ばし、カリオペもまた期待通りの愉快なフォームでガーターを連発し、マリーンは実に女の子らしい投げ方を披露した。3 人に共通して言えるのはボールが右に流れてしまう傾向があったことだろうか。カリオペはどうしてボールがまっすぐ行かないのか、医学的な観点から分析しようとしていた。スコア表を持って帰るのを忘れてしまったのだが、結果は古屋 130、大山 80、エフレム 110、カリオペ 60、マリーン 40 くらいだったと思う。初めてということでスコアは伸びなかったが、それぞれ非常に楽しんでいたのでよかった。真面目な活動が多い中でよい気晴らしになったことだろう。（古屋）

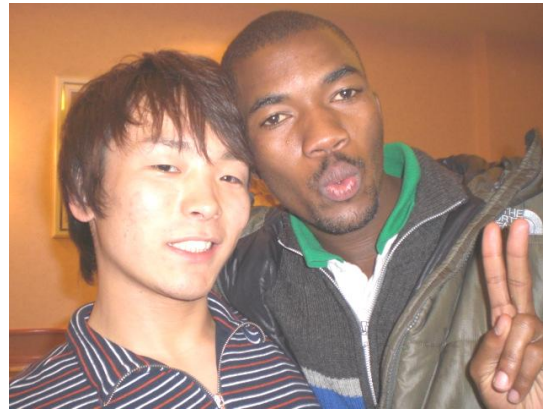
参加者感想

Calliope　Simba AKINTEJE

NUR　Faculty of medicine

This trip in Japan during three weeks has impressed me in different aspects. Such as Education system, Agriculture and its technology to valorize it, Social issues; how old people are welcome to foreign persons. In other hands, Japan is a developed country even if it has known the period of World War II but Japanese people have straggled to rebuild new Japan which is developed now. In addition, people of Japan are so kind and humbly toward USA which thrown A-Bombs, but still Japan is in good diplomatic relation with USA even if it said that this powerful country-USA didn't support Japan any more. Japan is also a country of thousand Hills and mountains like Rwanda, but roads are well constructed. Etc.

HABIMFURA Maurice

NUR　Faculty of agriculture

You know that in 3rd JRYC we did many activities like holding conferences, visiting some places, making field trips and living Japanese society.

So I have many to let you know about this trip but it may summarized in the following few words:

Firstly, I really appreciate how this conference has been organized by Japanese JRYC members and good collaboration which was remarkable between us and with the Families of Japanese students of JRYC.

We lived this society and I noticed that it's strong and sustained by the CULTURE which is also compact through the way Japanese:

Believe

Protect their antique customs, history….

Conduct their daily life…

And after that I'm now enthused to continue to restore Rwandan culture which was abused by the colonialists.

UMUGWANEZA Ange Nadine
NUR Faculty of agriculture

By visiting NIJO CASTLE I knew the history and culture of Japan. As Rwanda, Japan has a precious culture. I really appreciated even on the road the behavior of old people we met.

At SHUNKOJI TEMPLE we met a Buddhist Priest who explained us about the religion in Japan and that was strange for me because it is deferent from my faith. He explained also what is meditation, how to do it and its importance. That was new for me, I learned a lot.

At TOTTORI UNIVERSITY we met Professor Kitamura who explained his research on water and soil conservation in EAST AFRICA and Arid land. I learned a lot about irrigation techniques, and I like his advice of solving our problems our selves as Rwandese, and not to wait for a help of foreigner.

In JUNIOR HIGH SCHOOL, I learned how to make a Japanese bird that was interesting! I also learned Chemistry but I was surprised that they do the experiences in laboratory, which I did when I was in Senior high school. That means their education is more advanced. After that we danced and tried to exchange the culture that was wonderfull. I liked the song they sang for us, I was almost crying. But the best thing was how they are so kind, genereous and innocent.

During our visit at JA, we got the explanation about their actions including making cooperation between the members (farmers), in order to share techniques and hold stores together. This method is beneficent for farmers and the country in general if it is well controlled by the government in favor of farmers. I think we have to adopt the method to improve our agriculture. At the same day, we had a field trip and we saw:

How to produce vegetables, fruits and flowers in green houses. It opened my eyes if I can say because I knew what I will do in future at least even though it is expensive.

The strategies of cultivating and storing rice. I had a chance to see what I studied in theory. And we discussed on Japanese technology in agriculture.

We visited JA factory that treat milk with high technology. And the taste was amazing.

We also visited the farm of caws and got explanation on strategies they use.

UMUKUNZI Marine
NUR　Faculty of law

I thank Japanese people for their warm welcome once we get in JAPAN
It has been my pleasure to visit a such beautiful and developed country with the guide of RJYC Japanese members .I'll never forget the kindness of you guys and the families in which we stayed as well .Our stay was full of acknowledging things, very helpful to our understanding in order to change things for a better future .We did a lot of things, discovered new things that are going to motivate us in making our country stand on a sustainable development.

井上　真希
早稲田大学　社会科学部　社会科学科１年

夢だった二年間のイギリスでのインターナショナルスクールでの留学の後、日本へ帰国した私は何故か焦燥感に駆られていた。異文化のおもしろさを常に肌で感じられていた生活から一変、再び戻った母国で平凡な毎日に埋まることが不安だった。そんな刺激を求める私に、貴重な活動の場を与えてくれたのが、日本ルワンダ学生会議(JRYC)である。

私がこの第三回学生会議で最も頑張ったのは、東京でのダンスイベントの企画・運営である。思い返せば昨年の春ごろ、JRYCに入って間もなかった私は、真っ白なところからこの企画を任された。その時点で確かなことはただ一つ、「ルワンダ学生のダンスを披露すること」だけであった。もともと何かを創造することが大好きな自称アート人間な私にとって、この指令は大変名誉なことではあったが、何せそういった企画について全くの経験ゼロだったので、会場探しや出演者探しなど何から何までが試練の山であった。

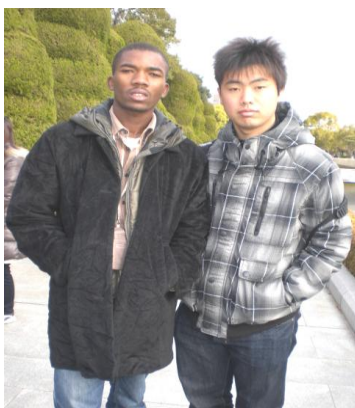
まず、何よりも大切なのはその企画にこめたメッセージだと思った。だからそれを通して人々に何を伝えられるのか一生懸命

考え抜いた。やがて頭の中で火花が散って、「日本とアフリカを文化でつなげよう！」というコンセプトが思いついた。また、イベントを通して、INDANGAMUCO の伝統文化でもって平和構築を促進する、というメッセージを少しでも多くの人々に伝えたいと思った。

実際にイベントを実現させるまで、何度も壁にぶち当たり、挫けそうになったときもあった。けれども情熱を持ってイベントへ協力してくれる方々に出会う度、根本のコンセプトを思い出した。そのおかげで「AFRICA☆JAPAN CULTURE SHOW」を無事に実現させることができた。イベント最後のコラボレーションでルワンダ学生を交えた全員が楽しそうに踊っているのを脇から見ていて、「あ、みんなつながってる！！」と実感し、泣きそうになった。その瞬間、JRYC が掲げる理念の意味が少し分かった気がした。国籍、人種、異文化の壁を越えて人の心と心がつながること。これこそが「相互理解」の根本なのだと。

この第三回学生会議で、最も良かったのは、何よりも一生の友達ができたことだ。ルワンダ人学生は当初、予想より大人しい印象を受けたのだが、一対一で関わるとそれぞれの人格性が分かってきた。私はその中でも特にエフレムと仲良くなり、彼とはもうずっと古くから知っている友達同士かのように、即刻打ち解け、お互い将来の夢や住む環境の相違など様々なことについて深く語り合うことができた。もちろん学生会議ではルワンダ人学生の将来的なルワンダの国としての展望や平和構築への取り組みなど学んだことはたくさんある。そこでは知識的な相互理解が培われた。しかし、今回、ルワンダ人学生と寝食を共にして普段からたくさん語り合うことによって、ありのままの彼らを見ることができた。そして、その姿というのはルワンダの発展と個々人の将来に対して向上心と希望に満ち溢れた逞しいものであった。

数々の貴重な体験を通して、かけがえのないルワンダの友は確実にわたしの人生に新たな風を吹き込んでくれた。そして、信じればなんだってやり遂げることができることを教えてくれた。だから、私はまたルワンダのみんなに会いたいと思う。今度は彼らが母国でどんな生活を送っているのか実際に知りたい。

岩垣穂大
早稲田大学人間科学部２年

高校を卒業し初めて上京したころ、私には東京で地元と同じ「言葉」が通じることがすごく新鮮であった。東京とは、自分が住んでいる町とは全く違う世界で、自分とはまったく違う人たちが住んでいて、高層ビルが立ち並び、政治・経済の中心で、きらびやかで夜も眠らない・・・そんなイメージを描いていたため、自分の田舎で使っていた言葉がそんなイメージの東京で通じることが、なぜか不思議に思えたのだ。

そのような感覚を、今回のルワンダ学生招致でも感じた。アフリカというと、サバンナ・赤道・紛争・貧困・エイズ・・・と個々人がいろいろなイメージを持つと思う。それは、多くの人にとってアフリカは地理的にも心理的にも、今の自分の日本での生活と、かけ離れた想像の世界であるため、やむをえないことである。しかし、実際彼らと話してみると、英語という共通言語を介して恋愛、学校、仕事などの話題を笑いながら話し、一緒に平和について考え、また、同じものを食べ、同じ電車に乗り、同じ家で生活する・・・。アフリカは頭の中の遠い先のイメージではない。いや世界中に住む人々全員が、日本とは違う、頭の中の遠いイメージの世界の人々では決してなく、多少の習慣の違いはあれ、根本的には何も変わらない「一人の人間」であるということを改めて強く感じた。

決まった価値観なんてどこにも存在しない、人はみな同じと気づかせてくれたルワンダから来た五名の大学生。彼らと過ごした２０日間はおそらく私の人生の中で忘れることのできない大切な思い出の一つとして、今後も私の人生を支えてくれるであろう。そんな彼らとの生活を通して心に残った瞬間を紹介する。

モーリスは鳥取大学や JA 訪問で、話が農業になると人が変わった。普段はおちゃらけて、冗談やいたずらが大好きなモーリスが、涙目になりながら我々にアフリカの貧困について語ってくれた。日本の若者はなぜ農家を継がないんだという議論になった時、日本では農業以外にも負担が少なくて、収入の多い仕事がたくさんあるんだという話をすると、ルワンダではほとんどの人が農業をすることでしか仕事を得られず、農業をしていても生産者に入ってくる収入は、ほんのわずかなお金で、ルワンダでは明日を生きれない人たちが大勢いいる。日本はなぜ、このように高い農業技術を持ちながら、アフリカの国々にそれを教えてくれないんだ、と言っていたのが非常に印象的であった。この言葉を聞いた時、私はこの団体の活動理念である対等な立場での「相互理解」を疑った。我々が日々を当たり前のように過ごすのに対し、彼らは命がけなのだ。ある意味、追い込まれているのだ。そんな人と、同じ立場で対等に話をしているとは到底言えず、そこまでの状況を

認識せず、軽い発言をした自分の言動を恥じた。しかし、この対等な立場での「相互理解」とは、理想である。理想とは我々が求める究極の目標であり、私はこの時、これからも少しづつではあるが、同じ立場での「相互理解」を目指していこうと改めて決意したのであった。

エフレムは大変人懐っこい性格だった。周囲の雰囲気を感じることができ、みんなを盛り上げてくれたり、落ち着かせてくれたり。家では家族との時間を大切にしてくれ、酒を片手に夜遅くまでいろんなことを話した。中学校を訪問した際、彼の人柄は中学生に大人気で周囲には常に人だかりができていた。彼は今回の日本訪問を大変楽しんでくれたと思う。周りの人を喜ばせる、笑顔にさせる不思議な力を彼は持っていた。

今回の招致では、日本のことを彼らに教えることを目的にしていたが、逆に彼らにいろいろなものを教わったように思う。「本当の幸せってなんだろう」、ということもそのひとつである。日本は確かに経済的に発展し、仕事が多くあり、娯楽がある。しかし彼らは日本に住みたいとは思わなかったと思う、なぜなら、そこには物質的な豊かさはあっても、人間と人間の心の豊かさがないからだ。たとえ、生活が十分でなくても、ルワンダに帰れば家族がいて友人がいて、先生がいて、そんな心の豊かさがある。彼らが東京の富の象徴である高層ビル群を見ても、日本で何もお土産を買えなくても、それらにあまり憧れを見せなかったことが、本当に大切なもの、本当の幸せってなんだろうということを忘れていないからだと感じた。

最後になってしまったがこのルワンダ大学生の日本招致企画は、非常に多くの方のご協力によりこのような成果を得ることができた。その温かいご協力に大変感謝しています。ありがとうございました。

大久保美希
早稲田大学文学部４年

自らがルワンダに渡航したわずか３カ月後に、今度は日本でかれらと再会したというのはとても不思議な感覚だった。東京でのダンスイベントでかれらが衣装を身にまとい、あのルワンダダンスを踊る姿を見て、「あぁ日本で踊っているなんて…」と感慨深い思いだった。今回の様々な企画を通じて、「ルワンダと日本をつなぐ」という言葉が自分たちの活動の中に具体的に見えてきた気がした。

日本人がルワンダと関わる機会はなかなかないが、ルワンダ人が日本を知る機会などもっと得られるものではない。今回ルワンダからやってきた５人が、ルワンダに帰国した今、日本をどのように振り返り解釈したのか、このことをじっくり聞いてみたい。私たちは、とにかく彼らに日本のありのまま、また、一見すると見えてこないような問題も伝えたいと時に必死だった。
様々な場面で感じられる日本とルワンダの歴然とした違いに驚くかれらの姿はその表情や話の節々から伝わってきたけれど、全ての工程を終えて様々に感じたことをどのように咀嚼し、母国の人たちに伝えたのかがとても気になるところだ。

夏はルワンダ、冬は日本でのかれらとの交流を通じて私が最も痛感したことは、自分が伝えたいことを伝えることの難しさである。それはひとえに言語の壁であるというのではなく、「共感」を生み出せていない気がすることへのもどかしさがあったように思う。例えば、日本側は日本人の精神的幸福度の低さを問題視していて、仕事中毒や自殺の問題を提起しながら、これから人間がどう生きるべきかという本質的な議論したいと願う。一方、ルワンダ側は、そうした問題提起を受けつつも、ルワンダの経済開発を軸として、日本が現在の日本をつくり上げるまで過程や産業構造を具体的に知りたいと願う。こうして、なかなか両者のプレゼンテーションの内容に互いに深く踏み入ることが出来ないことが何度かあった。

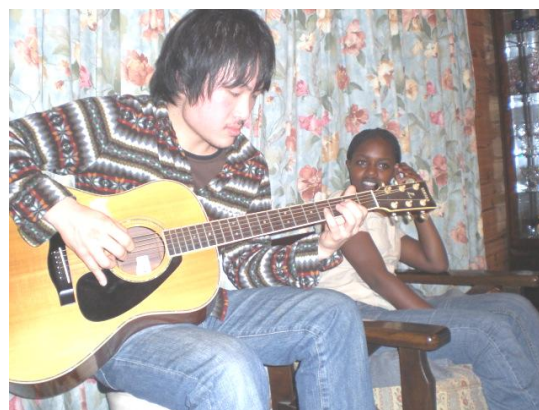
このように、かれらとの交流では、時に両者の今立たされている現実や目の前の問題があまりに違うことで、互いをうまく伝え合えないこともあったと思う。でも、それでも踏ん張って時間の許す限り話し合おうとする皆の姿勢は、この団体の理念である「相互理解」の真意を体現していたと私は思う。違いを実感しながら、また共通項を見出しながら、ここまで真剣にそして自由に「平和構築」や「社会のあり方」を話し合える場は、あまりにリッチで貴重な空間だった。こんな機会、この先自分でつくることはそう簡単ではないと思う。

今回とても嬉しく思ったことは、帰国前日にマリーンが改まって口にしてくれた「あなたたちには心から感謝している。次にみんながルワンダに来る時には、もっとこの活動をよくしたい」という趣旨の言葉だった。かれらが日本に来られて、段々と

日本とルワンダ双方のメンバーのモチベーションがかみ合うようになってきたかもしれない。「とてもおもしろい活動になってきた」と卒業を前にして感じ始めている。

　最後に、私自身は昨年夏の渡航をメインに活動してきたが、この日本招致企画に関しては、一昨年から所属するメンバーが白紙の状態から企画を始め、今回の実現まで導いていったのだ。そのみんなには特に感謝したい。これからも長期的に日本とルワンダをつなぎ、一人ひとりにとって価値のある学びを生み出す団体であり続けてほしいと思う。

大山剛弘

早稲田大学創造理工学部２年

一年前に、ルワンダと聞いて何を思い浮かべただろうか。「ジェノサイド」かもしれないが、おそらく僕の場合は「アフリカ」だっただろう。その響き・日常との距離感に魅力を感じたのはこの活動に関わり始めた大きな理由でもある。夏の渡航後にも「ルワンダ」よりも「アフリカ」についての感想を求められることの方が圧倒的に多かった。今回最も認識が変わったのはその点についてだ。

「文化の多様性」、「異文化理解」といった言葉はもうずいぶんありふれたものとなった。ここ日本でも情報網の整備は進み、世界中のあらゆる情報が瞬時に手に入れられる。だがその情報をどれだけ自分たちの生きる現実として認識できているのだろうか。ことにアフリカの場合、現実との距離感は実際以上にあると思う。例えば物理的には南米がより遠いが、文化的にも経済的にも「近く」感じるのではないか。ブラジル・チリ・アルゼンチン・ペルー…それぞれよくメディアでも取り上げられ、ある程度のイメージは形成されているように思う。同様に北南米、ヨーロッパやアジアなどに対しても抱かれる多様なイメージに対して、

アフリカ諸国はどうも「アフリカ」というカテゴリーでくくられ、踏み込んだ解釈はされないきらいがないだろうか。紛争や事件があっても「アフリカだから」と片付けてしまい、その根本的な背景に関心はあまり及ばない。少なくとも僕の場合は、アフリカ大陸に歴史も宗教も文化も異なる５０カ国以上の国々が存在し、営まれているという事実を、実際にルワンダを訪れて初めて実感できた。そして今回ルワンダの学生たちと生活を共にする中で、いかに互いのコンテクストが異なるのか、そして「相互理解」の難しさを改めて感じた。

それについて印象が強かったのが、鳥取でのホームステイだ。僕はマリーンと倉吉西中学校教員のケーオファー温子さんのお宅の旅館に伺った。そこではご亭主の料理長やお母様をはじめ手厚いおもてなしの中、温泉やお食事を頂いた。夕食では、マリーンにとっておよそ馴染みのない刺身、天ぷら、カニ鍋などがもてなされ（ある意味では学生の自分にも馴染みがないが）かなりチャレンジングだったこともあり、食材の説明も交えながらゆっくりと話をした。初めての日本生活での緊張や旅の疲れもあり、なかなか本音で話せる機会が少なかったのでとてもよい機会であったと思う。

聞けば日本に来る前には友人や両親に「蛇を食べるのか」、「病気になるぞ」などと言われていたそうだ。それもかなり真剣に。

そしてそれは日本というよりは「アジア」に対するイメージであるという。

思えばルワンダでは皿に山盛り食べていた彼らが、鳴りをひそめたのもそんな背景が根にあったのかもしれない。ぼくは少なからずショックを受けたが、それは多くの日本人のアフリカに対してのものと本質的に同じだと感じた。僕からもマリーンにも僕がルワンダを訪れる前に受けた「警告」(「アフリカは危ない、殺されるぞ」「遺書を書いていけ」など）を伝えると、やはり彼女も驚き、否定した。「ルワンダは違う。他の国とは区別するべきだ」「アフリカという言葉に、自分たちはアイデンティティを持っていない」と。

その通りだと思った。自分も普段「アジア人」としての自分など意識しないし、彼女にとっての「アフリカ人」も同様だろう。

自分から遠く感じるものについて、いかに人が偏った情報に操られやすいのかお互いに実感できた。宗教・民族間の不和も結局そこに帰すのだろう。「彼らとは関係ない」「彼らとは別の世界に生きているんだ」

こんな感情を持ってしまえば人間らしい関係など持てるはずはない。

たとえ同じ日本人であっても、ある人と理解しあうには、より小さな括りにまで行くべき、つまりその人が帰属意識をもつコミュニティにまで踏み込んでいかねばならないと思う。当然ながらそれは国外の人についても同じなのだな、と強く感じた。

その点で、今回は 5 人をルワンダ人学生としてだけでなく、ダンスグループ INDANGAMUCO として取り上げてイベントを開催、カトリック教徒として寺院の訪問・異宗教体験、農業国民としての日本農業研究の議論、もちろんルワンダ国民としての衣食住での習慣など、ほんとうに多様な側面を垣間見ることが出来たと思っている。これは本当に貴重で、こと日本ルワンダ間に関して言えばこれまでにこのようなプロジェクトは存在しなかった。そこに

学生会議のメンバーと共に立ち会えたことを、本当にたくさんの支援者の方々に感謝すると共に、僕は誇りに感じている。
５人の学生がこの国について多くを学び帰っていったことで、今後の２国間・そしてより広い国際理解に小さな一歩を踏み出された。まさに草の根、国際的に即効の効果はないかも知れない。だがお互いが、それぞれの国を将来担っていくんだという志を持っていれば、いつか大きな、美しい花が開くと信じている。
ギターとビール片手に、歌って踊って、そして新しいアイデアを議論できる日が、待ち遠しくてたまらない。
また会いましょう。
P.S. Marine, I'm absolutely sorry for my SHYNESS. Next time I'll try to be more ROMANTIC! See you again for sure.
Yours,
TAK

海原早紀
早稲田大学文化構想学部２年

私はこの第三回会議で初めてルワンダのメンバーと会った。空港で対面したときから、彼らとは自然にうちとけることができた。
そんな中私が気になっていたのは、彼らの目に日本がどのように映っているか？であった。
ルワンダ人は、日本の様々なものにそれほど感動していないように見えた。例えば渋谷のスクランブル交差点に外国人を連れていけば「すごい」と驚くのが普通だが、ルワンダ人は圧倒されていたのか、特に感想を言わない。実は、5 人は日本についてあまり情報がないまま来日してしまった。いったい何を日本に期待し、何をしたかったのだろうか、不安になったりもした。しかし実は、彼らは日本を批判的・客観的に見る目も持っていた。それは一対一で話しているときや、学生会議での発言として出てきた。例えば、普段は喜んでお菓子を食べていても「このような小さい袋とかラッピングのゴミどうなるの？」。日本人の男女があまり表立って愛情表現をしないことについて「2 人だけになったら何をするんだ？大丈夫か？」「日本の女の子のミニスカートは性犯罪を誘発しないか？」「日本人は軍隊

で訓練を受けているのか？みんな整列して道を歩く」実はいろんなものに疑問をもっていて、その目の付け所もするどかった。
このような疑問を持ちながらも、さほど感嘆をしなかったのは、５人は日本にやってきても独自の世界を保持し、あまり日本に流されていなかったからだと思った。普段から軽いジョークでいつも笑ったり歌を歌ったりしている。ルワンダ人は、いつも人生が楽しそうで、余裕があるなと感じた。
学生会議ではこの話題について「ジャパンタイム」と「アフリカンタイム」として比較の話がたびたび登場した。つまり、日本にはどこでも時計があって人は分刻みで行動し、商売にも抜かりがなく、仕事に無駄がいっさいない生産性のある生活である。ところがルワンダ人は時間に縛られず、そのとき楽しいことを自由に堪能する生活である。私は無駄のないようキチキチ動くタイプなのだが、ルワンダ人の人生に対するスタンスが素敵に思えた。

また印象的であったのが、彼らの母国に対する思いである。
まず、母国の国家政策を細かく語ることができ、今後の経済発展にとにかく自信がある。ジェノサイド後の社会には大いに誇りを持っているようだった。例えばガチャチャをとりあげた学生会議では、第二回の渡航メンバーが虐殺加害者に対する不平等な裁判を見たということに対して、少し疑惑を示した。ガチャチャは公平で、ルワンダの法制度はうまくいっているのだ、という表情であった。
しかしルワンダの現状に疑問点もあるようだ。このような思いは個人的に聞くこととなったのだが、現大統領ポール・カガメは良い業績を残しているが力を持ちすぎていて、一人の指導者に皆が従うという構造は過去の過ちを繰り返しかねない、という意見も聞いた。
ジェノサイドについて学生会議で皆で話すことはあったが、口が重いようだった。やはり、ジェノサイドについてはまだオープンな話題ではないのかなと思い、日本人のために話してくれるのは貴重な機会だと思った。また、学生会議で客観的にジェノサイドの原因について論じているときとはまた違った彼らの表情がたまに見えることもあった。一対一で個人的に当時を思い出して話してくれたこともあったが、ガチャチャの学生会議中のことが印象的であった。
加害者が法廷に出向くのは任意であることに最初日本人は批判的だったが（私も積極的に加害者を探し出すべきと考えていた）それを「自分だったら友人・家族を法廷に出すか」という質問にすりかえて議論してみた。法学部のルワンダ人で、それまでは自信満々にガチャチャ実施の利点を主張していた子が、あっさりと「私は家族にガチャチャに行くことを進めない」と言った。それはガチャチャが公平に人を裁く制度として機能しないことを認めたも同然だった。しかし彼女の言葉は、人間として当たり前の発言だった。私も、自分だったら家族・友人を長年牢獄生活に送るなど、できない。私にはこのことが大きなショックだった。正しいことだとわかっていても、それができない。ここにきて、ポストジェノサイド社会の真の状態を垣間見た気がした。「ルワンダでは和解が進んでいる」と言われていても、殺人を犯した人が簡単に出てきて謝

罪、それをあっさり許す、なんてこと全員ができるわけがない。今まではそのような情報を簡単に消化してきたが、ルワンダの現状を安易にとらえすぎていたことに気付かされた。「ジェノサイドは再び起こると思うか」という質問に「どうだろうね」としか言えないメンバーがいた。ルワンダ人はジェノサイドの残した国民間の不和を抱えたまま、将来にもジェノサイド再来の恐怖を秘めているのではと思った。
それでも彼らは'NEVER AGAIN'を唱え、メッセージをこめたダンスを踊る。私は、ルワンダの未来は今回来日した 5 人を始めとする、ジェノサイド経験者のパワフルな若い世代にあるのだと確信した。ジェノサイドというものが、個人個人にいろんな形で残っているからこそ、これからの未来も個人個人が何を考え、どう行動するのかということにかかってくると思った。

そんな彼らを目の前にして気付いたこと、それは自分も同じ学生で、社会の一員で、日本のこれからを考えるべき人間だということである。学生会議では日本の社会問題もいくつかとりあげた、沖縄基地問題、少子高齢化、ODA と平和構築、またルワンダ人に指摘された環境問題や、ジャパンタイムを生きるストレスと家族関係の希薄化など、第三回会議は私にとって、日本を見つめ直す機会でもあった。日本がこのような問題を抱えていることは知っていたが、ルワンダ人の前で発表し共に議論することによって、私も日本という共同体の一員としてなにができるのかと考えた。彼らがルワンダについて自信たっぷりに語るように、私も日本に誇りを持ちたいと思った。経済発展が頂点に達してしまった日本には、もうルワンダのような原動力はないのかもしれない。しかし、もっと一人ひとりが幸せになれるような国になってほしいと思う。それは、今回で指摘された例でいえば、家族のつながり・家庭にしばられない女性像・老いても人生の最後まで楽しく生きられる、そういった幸せである。日本人だって多少アフリカンタイムがあってもいいのではないだろうか。

まとめとして、第三回会議で良かったと思った点を最後に二つ書きたいと思う。
まず、長い時間寝食を共にし、何回も学生会議を開催することができたので、各自様々な話ができて交流が深まった。特にダンスイベントは日本人・ルワンダ人が共に努力し、成功に終わった。これほど一つのことに共に取り組んだのは初めてであったのではないか。
そして、様々な企画を通してルワンダ人 5 人がたくさんの日本人と出会えたことも大きな功績だと思う。ホームステイ先家族、中学生、大学教授、住職、プロミュージシャン、大学生、原爆被爆者。ルワンダ人はこのたくさんの人たちと短い時間で打ち解け、私から見ればうらやましいと思ってしまうほど深い絆を作っていた。団体の理念に「人と人の関係を大切にする相互理解」というものがある。各地でたくさんの人と出会い別れ際では涙を流し、そして私たちと語り合って「また会いたい」と言ってくれる 5 人を思い出すと、理念の意味や一年かけて準備してきた企画の意義が、やっと実感を持って理解できたように思う。

片山夏紀

大阪大学外国語学部　地域文化学科

スワヒリ語専攻３年

私が日本ルワンダ学生会議のメンバーと初めて出会ったのは、去年の夏休み、日本から遠く離れたルワンダを一人旅している時だった。94 年のルワンダの大虐殺で衝撃を受けたことがきっかけで、大学でアフリカの言語や文化を勉強しようと決意した私は、ルワンダが実際にどのような国なのかを知りたいと思い、旅をしていた。そのさなかに、第 2 回本会議を目的にやって来た彼らと出会ったのだ。

日本人メンバーとルワンダの JICA や UNHCR を回らせてもらったが、彼らは本当に何事にも積極的で感心した。難民・開発・平和構築・紛争の歴史など様々な角度からルワンダに興味をもった人々が、「相互理解」をモットーに力を合わせて行動していることが素晴らしかった。私のように個人旅行では到底見学させてもらえないような場所も、団体ならば見学することができる。団体のパワーはやはり凄い。それぞれが智恵を出し合い、意見を交わし、ルワンダの現状を深く知ろうとしていた。数日間彼らと同じ宿に滞在し、食事を共にする中で、彼らがエネルギッシュに活動している様を目の当たりにし、自分も励まされた。

また、ルワンダ人メンバーのカリオペ&モーリスとルワンダの国立大学で食事をしたことがある。彼らはつたない私のスワヒリ語と英語を一生懸命に聴いてくれて、様々な話をした。私が大学院で平和構築学や紛争解決学を学びたいこと。ルワンダ人自身が、94 年の大虐殺の原因についてどう思っているのかを知りたくて、ルワンダに来たこと。現在のルワンダがどのような国なのか、現地の人に話を聴いてみたいことなど・・・。

虐殺の原因は「ツチ人の虐殺を正当化する」イデオロギーの存在だと彼らは言った。しかしそのイデオロギーがつくられる過程で、植民地宗主国ベルギーの間接統治、ルワンダの国内政治の脆弱性、経済状況の悪化、政府の煽動にのったルワンダ人の教育水準の低さなど、様々な要因が絡み合っているのだと丁寧に教えてくれた。最後に彼らは、現在のルワンダは、ツチ人・フツ人・トゥ人関係なく「integrate(統合)」し、一丸となって国の発展に貢献しなければという意気込みを付け加えることも忘れなかった。そんな彼らの瞳は、力強く、キラキラと輝いていた。

ルワンダの旅で、これからもずっと繋がっていたいと思える友達(日本人もルワンダ人も)ができたのは大きな収穫だった。そして今回の第 3 回本会議で、京都観光に合流させてもらうことになった。メンバーとは 3 カ月ぶりの再会だったが、会った瞬間から懐かしさが込み上げ、涙が出そうになった。二条城見学では、お城のスケールに驚き、日本の歴史に興味をもってくれたよ

うだった。妙心寺では英語堪能な住職さんが禅宗(臨済宗)について語って下さり、ルワンダ人はキリスト教と比較して様々な発見をしたようだった。

英語やスワヒリ語の会話は、当然ながら日本語のようにスムーズにはいかない。それでもこの日は表面上のコミュニケーションではなく、心の底にあるジンワリとした「あたたかさ」にお互い触れることができた気がして、とても嬉しかった。

京都観光を終え、私も日本ルワンダ学生会議に仲間入りしたいと考えた。大阪在住なので、東京を中心に活動している彼らとなかなか顔を合わせることはできない。しかし東京から少し離れたここ関西の地で、「千の丘」と形容される程のルワンダの美しさ、忘れてはならない虐殺の歴史、何より優しくて陽気なルワンダ人の素晴らしい魅力を、一人でも多くの方に伝えることができればと思っている。

Kristina Gan

早稲田大学国際教養学部３年

昨年の９月に渡航して何ヵ月後かに会えると分かっていたからあまり寂しくはなかったけど、再会したとき Ephraim, Maurice, Marine, Nadine と Calliope がギュッと抱きしめてくれてすごく嬉しかった。ルワンダ人の暖かいボディータッチが恋しかったのでしょう。東京の学生会議とダンスイベントだけの参加となったためとても短かったが、日本で会えたことが何よりの感動だった。

彼らがルワンダのダンスを日本で披露しているところを見て目頭が熱くなり涙が出そうになった。ルワンダに渡航したとき、あのダンスには何度も圧倒された。その感動を日本のみなさんにも共有できたと思うと嬉しすぎる。５人だけで迫力に欠けてしまうのではと心配したが、十分迫力満載のダンスだった。ダンスを通しての平和構築なんてどれくらいの効果があるのと疑問に思ったことはあったが、あのダンスは人を癒す力があり、勇気付けられる。このような歌詞を思い出した、「武器ではなく楽器を持ちましょう～恨みの言葉ではなく元気な歌を歌いましょう～暴力を振るのではなく踊りましょう～」。もっと多くの人にルワン

ダダンスを見て欲しい。

東京学生会議では沖縄問題や社会福祉など今まさに日本を取り巻く環境を紹介できて、ルワンダ側からも平和構築や経済対策などプレゼンを通して日本とルワンダについて若者の視点からより相互理解を深めたと思う。さらには、学生会議やイベント以外でもコミュニケーションを取る機会が多く、彼らについて知らなかったこと知ることができた。一層繋がりが強くなったと実感した。ルワンダが日本のように先進国を目指しているのは変わらないようだ。ディスカッションをしたとき、自殺が深刻な問題になっている社会、経済の発展により幸せを重点する意識が定着している社会、日本のようなライフ・ワーク・バランスが難しい社会になりたいなどの、日本の悪い面ばかり強調した気がする。その後、これが「平等な立場」による交流なのかと気になっていた。学生会議の目的はお互いの社会について情報交換をすることで相互理解を深めること。しかし、上から主張しているような気がしてなれなかった。それも私たちは今発展した日本社会のなかで、物質的な面で何不自由なく生活がもうすでに生きているからなのだろう。無駄に便利すぎる社会だと思うが、今あるものがなくなったときどうなるのか想像できない。ディスカッションのなかで、モーリスが「それは（あなたたちが）やることが多いからでしょう。でも私たち（ルワンダ）は忙しくなりたくても、仕事したくても何もないんだ」と熱くなって言った。ルワンダでアフリカ以外の国に海外旅行に行ける人は限られているのにもかかわらず、日本は学生でもアルバイトで一所懸命お金を稼げばどこにでも行ける。しかし、平等な立場は自分たちが置かれている状況を正直に伝えることでもあると思う。

これから日本とルワンダの将来を担うのは私たち若者。素直に意見交換を言い合える仲間は刺激的であり、本当に貴重だ。今の私にルワンダはただの観光地や研究対象の国ではない。そこには私の友達がいる。ルワンダに行けばいつでも笑顔で迎えてくれる仲間がいると思うと何回でもルワンダへ行きたくなる。ルワンダには発展してもまぶしい純粋な笑顔だけは失って欲しくない。お互いの将来が楽しみだ。

勝俣　玲

早稲田大学法学部 4 年

ルワンダの友達との再会

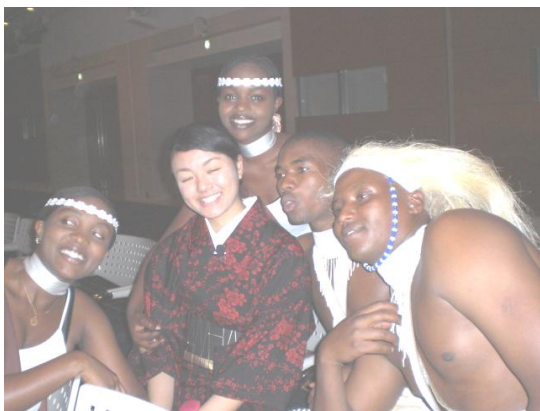
東京ダンスイベントで来日したルワンダ人大学生の伝統ダンスを見ていたとき、夏に渡航していた時間を思い出し、同じダンスをもう一度東京で見られたことに感激した。準備期間に深く関われなかった自分でもそう思ったのだから、他のメンバーの感じたものはもっと大きいものだったろうと思う。

日本という国について考えるきっかけ

夏に渡航したときにも感じたが、この会議は私にとって、日本についてもう一度考えてみるきっかけになっている。もちろん、ルワンダという国の自分と同じ世代の学生が、何をどのように考えているのかを知り、これまでと違った視点やものの考え方を得る機会であることは当然である。ただ最も印象的だったルワンダ人からの質問は、「日本は世界で 1 番になるつもりはあるのか、そのためにどうしようとしているのか」というものだった。そういえば、内向きの問題ばかりに気をとられ、世界の中の日本について特に危機感やイメージを持っているという感覚は私や私の周りにはなかったように思う。世界と日本をもう少し俯瞰して見る視点も大事なのではと考えることになった。

東京ダンスイベントで感じた、この団体の意義

どうなるかと思っていたけれど、たくさんのお客さんが来てくれたことにとりあえず一安心した。ダンスイベント終了後、ささやかなパーティ形式の懇親会があったが、それにもほとんどの人が残ってくれて、親交をはかっていたところを見て、この団体がルワンダやそれをとりまく人々、それまでルワンダについて興味を持つことのなかった人たちのつながりを生むことの一旦となれたことを感じた。

小嶋里奈
青山学院大学　文学部 4 年

私にとってこの第 3 回学生会議を一言で言うと、「驚き」です。
本当にルワンダ人が日本に来た、という点でまず驚きました。アフリカの温暖な気候で暮らす彼らにとって、12 月の日本は生きていけるのだろうかと。しかし、彼らはひとなつこく近づいてきました。そして彼らの、意外にもシャイな性格に驚きました。大勢でいれば大きな声で笑い、ハグをするけれど、1 人になると急に勢いが弱まってしまう。日本人以上に集団行動が好きなのではないかと思いました。遠い異国の地に来て緊張していた面もあるのでしょうが。そして, “Je suis patriotique.”－僕は愛国主義者だ－と言っていたことが印象的でした。果たして今の日本に愛国主義者だ、と自分を形容する若者は何人いるでしょうか?

そして 28 日のジャパン・アフリカイベントを迎えます。音楽・ダンス、文化のもつパワーに驚きました。魂こめて表現されるものは、それがどんなに違った文化背景をもっていても言葉が通じなくても、そういった障害を一切越えて、お互いを知るための大きなかけ橋になるのだと思いました。それは、見ている側に、直球で美しさ、命の温度を投げかけてきます。そんな風に表現する、生きている者を見たら、もはや、地球の遠いどこかで生きている他人とは思わないでしょう。

このイベントに、演奏者として参加し、日本の伝統音楽をギターとジャンベとのセッションで新たな試みで表現できたのは、私にとっても大変貴重な舞台となりました。琴を弾き、和歌を歌いきった後にルワンダ人から寄せられた温かい言葉とまなざしは、私もまた彼らにとってもう他人ではない存在になれたのだと確信させられました。

こうしてまた 5 人、異国の地に友達ができたことは、何よりの財産です。いつか私もルワンダに行こう、彼らの生きている、そして彼らが愛してやまないその国を、この目で見、この耳で聞き、この肌で感じてこようと思いました。

最後に、この第 3 回会議を企画した、日本人メンバーの情熱と根性に驚かされました。自分が動き、行動する、ということはある程度の困難も生じますが、自分さえやる気になれば実現できることです。しかし相手を動かし、行動させるというのは、その何倍も大変であり、労力を要します。そして、それも、言葉も文化も、歴史的背景、また経済水準も全く違った相手を動かしたのですから、それは相当な偉業だと思うのです。

そんな偉業を今後も継続的にやっていけたら、それは世界の未来を動かす活動につながると思います。私も、彼らと友達になってしまいました。もう他人ではいられません。今度は演奏者としても勿論ですが、

運営者としても、彼らと一緒に未来を創る活動をしていきたいです。

佐藤杏子
宇都宮大学　国際学部　国際社会学科 3 年

私は 28 日からの 3 日間しか参加できず、しかもダンスイベント本番には居られずという何とも残念な形での参加でしたが、参加したてで人見知りの私にもメンバーの皆さん優しく接してくれて楽しく過ごせました。

今回実際に学生会議を目の当たりにして、ちょっとしたトラブルとか、適当にやり過ごしていたところもあったとは思いますが、内容自体はとてもしっかりしていて、議論も白熱していたのが良かったと思います。

反省点としては、自分は尻込みしてしまってあまり発言できなかったことと、ヒールのブーツを履いていったことです（結構歩き回ったので・・・）。

全体的には、（特にルワンダ人に配慮して）もう少しゆとりあるスケジュールを立てることと、それによって疲労や遅刻・欠席を軽減することが課題として挙げられるのではないかと思います。

今回初めてルワンダ人学生を日本に招致して学生会議を実現できたことは、本団体にとって大きな経験になったと思うので、この経験を生かし、協力して下さる皆様への感謝を忘れず、今後ますます活発な活動ができるよう、そしてそれに自分が少しでも貢献できるよう頑張りたいと思います。

清水大志
早稲田大学政治経済学部３年

私は日本で行われた第三回学生会議は東京でのダンスイベント、学生会議に参加しました。その中でもやはり、渋谷で行ったダンスイベントが印象に残っています。高校時代に吹奏楽をやっていたため、音楽関連のイベントに参加する機会は以前にもありました。しかし、外国人の学生や、プロのアーティストといった、全く異なる世界で暮らす人たちとひとつのことを達成するということは、初めての経験でした。そして、なによりも刺激だったのは同世代の多くの学生が演者として参加していたことだったと思います。大学のリハーサル室や舞台裏で、ルワンダ人学生とダンスを行っている日本人学生が徐々にうち解け、仲良くなっていくのを見ることは、学生会議のメンバーとして、普段は自分達が行っていることを客観的に見る良い機会でした。また、準備時間があまりない中、当日は各スタッフが効率良く働けていたと思いますし、インダンガムチョをはじめ、演者の方々にも気持ちよく演じてもらえたのではないか、と思います。

そして、学生会議に関しては、私の参加した初日の会議がダンスイベントの翌日であったためか、（私を含め）少々、集中力が欠けていたと感じましたが、継続的な知識や意見の共有、交換という観点からはより多くのトピックについて話し合えたことは良かったと思います。

最後になりますが、初日に用いた会議室を貸して下さった NPO 法人スープの会の方々にここでもう一度お礼を言いたいと思います。

橘　理恵
早稲田大学　第一文学部　文芸専修四年

慣れない手つきで箸を持ち、おそるおそる口へと運ぶ。ルワンダ人の綺麗な団栗眼が、皺くちゃのレーズンのように歪められた。
「……ごめん、これ僕らの口には合わないみたいだ」
その様子に、鼻息荒く意気込んでいた私はすっかり拍子抜けさせられた。

「日本ルワンダ学生会議」のメンバーとなったのは、大学三年の春のこと。その年の夏に初めてルワンダを訪ねたとき、違う人種というだけで想像以上に相手との距離を感じてしまっていた私は、「食事」を通して互いの距離が縮められることを知った。ゆったりとした昼下がりの学食で、とりとめもない話をしながら同じ食事を美味しいと感じた時間は、彼らが自分と変わらない大学生であることを実感させてくれたのだった。

彼らにも、同じように日本の食事を美味しいと感じてもらいたい――現地での体験から、私は強くそう想うようになっていた。そして大学四年の冬、ついにルワンダ人を日本に招く計画が実現することになったのである。彼らが日本に到着するまで、私の脳内は日本食に感嘆する彼らの声で一杯になっていた。

「なんか、ソースって生っぽくて無理」
広島出身の友人に教えてもらった、広島名物「広島風お好み焼き」の名店で昼食をとろうとしたときだった。にわかには信じがたい言葉が、私の耳にこだました。日本の地域の味代表として、彼らの日本食体験に抜擢されたお好み焼き。ルワンダの食事を美味しいと感じた私は、日本を代表する調味料が彼らの口に合わないなんて夢にも思っていなかったのだ。自分の激しい思い込みに、恥ずかしさが込み上げてくる。しかしそれ以上に、彼らの新たな一面を知れた嬉しさと、何とも情けないその表情に、落ち込むよりも笑えてしまったのだった。

初めてのルワンダ渡航は、私にとって「自分たちと彼らとの共通点を見つける旅」だった。そして初めてのルワンダ人日本招致は、「自分たちと彼らとの差異を再確認する旅」だったように思う。私が考えていたルワンダ人に日本に来てもらう目的とは、“自分たちのことを”より深く知ってもらうためだった。しかし実際自国に招いてみて、コミュニケーションの場を変えることは“双方に”新たな発見をもたらすということを実感することができた。

千田大介

早稲田大学教育学部 4 年

今回の日本招致企画では、常にルワンダ人と行動を共にしていたこともあり、ディスカッションや話し合いの時間がかなり多かった。自分の意見を主張してぶつけ合うという熱気の中で、相互理解はさらに深まった。

メディアの話しになった時、私は兼ねてから聞いてみたいと思っていたことをぶつけてみた。ルワンダでは虐殺前にラジオなどメディアによって人々が扇動されたという背景があった。「虐殺の責任は前の政府の悪い統治にある」という「コンセンサス」を持つルワンダ人に対し、それでは、「将来政府が仮に悪い統治に傾いたら、メディアが政府によって管理されている構造は危険ではないのか」と直球で質問した。それに対し、「確かにその構造に危険性はあるが、虐殺前にはメディアが民営化されたことによって過激な表現の規制が効かなくなったという背景がある。ルワンダ人にとっては『良い管理』のないメディアの方が恐ろしい」、という答えにはハッとさせられた。「自由」という理念を適応するには、それが「安全保障」という社会目標と同時に機能する必要があり、「自由」の持つ不完全性とルワンダ社会に残る紛争要因を訴えられたような気がしたからだ。しかし、議論が終わってから、「カリスマは、今のルワンダ社会を引っ張っていくには必要なんだ。我々知識人にはそこまで必要ではないけれど。」と話してくれた。彼らがそこまで冷静にルワンダ社会を見ていることにはとても驚いた。

また、虐殺時の犯罪を裁く市民による Gacaca 裁判について議論した際には、「もし仮に、あなたの家族の中に加害者がいたら、その人を法廷に突き出せるか」という質問をした。彼らは皆「それはできない。もし身内であったら、必ず隠し通す。」と答えた。Gacaca 裁判とは、数が多すぎるため通常裁判では 100 年以上かかる虐殺の犯罪を、効率的に、そして市民の直接参加によって裁くという意味で、その目標である「和解」には大きく貢献している素晴らしい制度だということを、彼らとの間でこれまで何度も確認してきた。この制度を「公平性」という視点で批判することは容易だが、私は、ルワンダの現状の中で紛争解決と和解の過程が、完全ではなくとも、進められる「当事者間の公平感」あれば機能する制度だと考えていた。加害者の「自白」を基本としている制度のため、その公平性は市民一人ひとりの意識によって実現されなければならない。しかし、彼らは「身内だったら隠し通す」と言ったのだ。これでは、当事者間の公平感を担保するのも難しいように感じた。現地渡航した際には、脅迫されながらも自分の父親の罪を法廷で証言したある人物が、「ルワンダにはまだ罪を告白していない人がたくさんいる。正義を実現するためには、身内であっても告白しなけれ

ばならない」と語っていた。

良い機会なので同じ質問を日本人メンバーにも投げかけてみた。ある人の答えは「身内が殺人をしたとすれば、警察に突き出すべきである。しかし、理性ではそう考えていても、その場面になったら隠してしまうかもしれない。」というものだった。確かに、はっきりと答えられないと私も思った。特に、ルワンダでは内戦状況の中での「殺人」であったことを考えれば、多くの人は「殺さなければならなかった」のであり、彼らへの問いは「戦時中の殺人は犯罪か」という質問にも近かった。このグレーゾーンの議論は、法という制度が正義という理念を実現する上では、個人の倫理観こそが一義的にあるのだ、ということを確認させてくれたと同時に、人は正義という理念を貫徹する為に個人の倫理を実践できるのか、という普遍的な問いを我々日本人にも投げかけた。一連の議論からは、長年続いた内戦により蔓延していた無法状態を法整備によって改善していこうとするルワンダ社会の中で、人々が直面している葛藤を垣間見た。しかし、今後ルワンダで法が機能していくには、当事者である彼らが「身内であっても、殺人の罪は告白する。」と言えるようにならなければならない。

純粋に学生同士の議論は非常に興味深く、ルワンダを理解するとても重要な手段だということを改めて感じた。また、議論以外の場面でも今回の旅は非常に充実していた。日本の技術や伝統文化を体験する様々な企画により現在の日本社会を多様な視点から理解してもらえたはずだ。そして、何より日本人との交流を通じて、お互いの国の理解が少しでも促せたと信じている。

残念ながら、ここでは紙幅に限りがあるので、最後の「おわりに」で、第 3 回学生会議そしてこれまでの活動全体の個人的感想を綴りたいと思う。

中山康平

早稲田大学　国際教養学部　１年

「未知」。これが、ルワンダ人学生等との交流をする前の素直な自分の気持ちだったと思う。高校時代のフランスへの留学や、現在所属している学部の影響で、外国人というものを相手にするときの感情は、日本人を相手にするときのそれとなんら変わりはない。しかしながら、ルワンダ人は自分には違うように映っていた。それは、彼らが「大虐殺」を経験した国から来た、というものが一番大きい理由だと思う。しかしながら、実際に交流を通して、自分が考えていたイメージは全部崩れ去った。彼らの笑顔はとても素敵だった。Laugh ではなくいつも Smile なのだ。自分は絶対にあんな風に笑えてはいないと思う。目が合うだけで、微笑んでくれる彼らにはいつも胸を打たれていた。明らかに彼らの方が物質的には日本の何十倍も貧しい国から来ているのに、彼らの笑顔をみていると、彼らの方が豊かに見えてきてならなかった。そんななか、彼らが発した言葉に耳から離れないものがいくつかある。

一つ目は、福島県在住のルワンダ人、マリー・ルイーズさんが講演でおっしゃった、「３０年間のローンを組むことができる国が珍しい。３０年間の計画を建てられる国がうらやましい。ルワンダでは明日の計画さえわからない」である。また、「夜が来るのが怖い」という言葉も忘れられずに心に残っている。こういうことを考えたことさえ無かった。ローンというものは当たり前に存在するものと信じてきた。やはり、自分自身の固定概念だったのだろう。当たり前が当たり前じゃないと感じることが出来る時は自分自身になんらかの成長を感じることが出来るので、この一つの言葉はとても自分の為になった。

２つ目は、私がプレゼンした時に言われた、「コウヘイがフランスに行って、俺たちが見られないような紛争に関する資料を見つけて、俺たちの考えと比べてほしい」 私がプレゼンしたときに言われたことである。初めに言われた時、おかしくて少し笑ってしまった。でも彼らの顔は怖かった。彼らは本気で言っていた。あの目が忘れられない。こういう風な、自分自身の国の事を本気で考えている生徒を持つ事が出来ている国はとても幸せだと思った。

最後は、「日本人は働きすぎだというけど、俺たちは働きたくても働けないんだ」という言葉である。日本では過労死が問題になっていることを彼らに告げた。しかしながら、彼はそれを幸せなことだと捉えている節があった。ルワンダでは過労死をしようとしても、することができない、それだけの機会がないんだ、と彼は言った。これをどういう風にとらえていいか自分にはわからなかったし、今もわかっていない。

ありきたりの言葉であるが、こういった彼らとの交流を通して学んだことを、これからのいろいろな生活につなげていきたい。

袴田由美
横浜国立大学国際共生社会課程４年

「ルワンダ」や「学生会議」という言葉を聞いただけで「凄いことをやっているんだね」と感心して褒めてくれる人がいる。普通という判断基準をどこに置くのかは難しいけれど、私がやってきた活動は少数派で珍しいことは間違いないのだろう。そんな普通と比べて非日常的な事柄が多かったはずなのに、自分の中では結構普通の事として処理されている気がする。久しぶりに会った子とご飯を食べ、お泊まり会をして、東京や広島を旅行する。確かに会話には英語やフランス語が入り混じっていたり、彼らは私たちより寒さに弱かったりしたけれど、それは日本とルワンダの差ではないと思う。日本人同士でもお互いを上手く理解出来ないことはあるし、寒さが得意な人も暑い所が好きな人もいる。そんな、人と人の間に当たり前にある当たり前の違いを知っていくことが、如何に素敵で有意義なことで、しかしながら決して簡単ではないということを感じる冬休みだった。

私はこの第３回学生会議の中で、「自己を知れ」という言葉がとても印象的で、この言葉を思い出すととても嬉しい。これは広島の平和記念公園にある平和の鐘に刻まれていた。

私が２年半以上この団体に関わり得たものの中で、一番よかったと思っているのは「知ることの楽しさ」を身をもって感じたことだ。単純に fun だけじゃなく interesting なこともあり、知っている／知らないという差異は思った以上に大きいことも分かった。知識として書籍やネットなどからの情報も知っていた方がいいし、実際に体験しないと分からない雰囲気や空気もあるし、その両方を知ることで格段にお互いの距離が縮まるのだということも知った。私たちが生きている毎日は実は発見の連続で、でも意識をしないと通り過ぎていってしまうことも多い。「知ろう」とする能動性の重要性も学んだ。

ルワンダの虐殺メモリアルにも広島と同じような意味の言葉が書かれた垂れ幕があった。やはり【自分】や【他者】やその他様々なことに興味を持って知ろうとする姿勢というのは、時代や場所を越えてその重要性が認識されているのだということを改めて感じ、嬉しくなった。過去に悲劇が起こったからこそ広島とルワンダという場所がその重要性を発信しているのだろうが、自分がルワンダ学生との関わりは勿論のこと、メンバーや関係して下さった全ての人との経験の中で感じたことが、人間が平和に生きていくためには不可欠なものだということをこの言葉が証明してくれている様で、とにかく嬉しかった。

彼らと話したり、笑ったり、写真を撮っ

たり、いろいろなことを知り、伝えることができたと思う。でも何故か、彼らが日本に来ていたこと、泣きながら別れてもうルワンダへ帰ってしまったことに実感がわかない。自分がルワンダから帰るときに“See you again”と言って、実際に会えたからなのかな。それもきっとあるけど、違う気がする。他の人たちから見れば「ルワンダ」というちょっと変わった場所に興味を持った変わった大学生なのかもしれない私にとって、「ルワンダ」と彼らは日常の一部になっていて、いつも頭のどこかに存在している。きっと社会人になって仕事が忙しくなっても、将来子どもが生まれてもそうなんじゃないかなぁと思う。そのぐらい当たり前で普通で、大切なものになったことが嬉しいし、そんなものが大学生活を通して出来たことが凄く幸せだと思う。

嬉しいことがたくさん過ぎるほどあった特別な冬休み。自分のためにも彼らのためにも、まだ「ルワンダ」や「知る楽しさ」に出会ってない人のためにも、活動は継続していきたいと思った。

朴淳夏

社会人

広島で参加できた部分での感想は、
率直に、準備にもっと参加すれば良かったなあとの後悔でした。夜間長距離バスでの移動明けの、みんなの「疲れきった」顔を見てなぜか思いました。夜行バス明けでみんなが憔悴しているにも関わらず、何かに満足している表情だったからです。この表情が何ともうらやましく思えました。

準備段階や、第３回学生会議を終えて誰かが言っていた、「自分たちは学生なので限界がある」とのフレーズ、今回のルワンダ学生の日本招致の実現、そしてその実行力を見て、それ違う！と思いました。今回の実行力は「社会人」顔負けだと思いました。企画、交渉、アフリカからの招致、会計、寄付集め、広報、実行、反省。これは社会人が会社でやっている事で、こんな熱意を持って実行している人はなかなかいないと思います。今更ながら熱意に勝つものはないのだなと感動・関心しています。

私は今年ルワンダへ初めての渡航をしましたが、今回の第３回の会議は別の意味、形で、こちらがルワンダのみんなに色々と教えてもらえたなと思いました。第三者的な感想で申し訳ないですが今回のみんなの

姿を見て正直、次の渡航／招致の準備、がんばりたいと思いました。

古屋亮輔

早稲田大学法学部３年

2008 年９月のルワンダ渡航から１年４ヶ月。まさかこんなにも早くルワンダ人が日本に来られるなんて、ルワンダにいた頃は全く思っていなかった。そんなルワンダ人学生たちが日本でダンスを踊っている、そう思うと涙がこぼれてしまうので上を向いた。

鳥取の中学校は本当に楽しかった。日本人メンバーもルワンダ人メンバーも、みんな楽しんだ。でも本当に寒かった。「日本で伝統ダンスを踊り、ルワンダのことを知ってもらいたい」というルワンダ人メンバーの希望と、「日本の一般市民にルワンダ文化を知ってもらおう」という日本人メンバーの希望が同時に叶ったわけだが、体育館は本当に寒かった。ただそれでも長い時間をかけて準備してきた企画が実現して涙がこぼれるのだから、机上の空論だと思っていた自分たちの企画を実現させたことに対しては自信を持っていいのかなと思う。

今回、予定していたスケジュールはすべて無事に消化できたわけだが、団体の在り方として、いくらか違和感があった。日本ルワンダ学生会議の理念として最も重視しているのが「相互理解」だが、そ

の次くらいに私が個人的に重視する「大学生としての対等な関係を構築する」という目標がある。これに関しては、学生会議の場以外では、全く達成できていなかったのでは、と思う。航空券にはじまり、日本人がすべての生活・スケジュールを管理し、食事を作って食べさせ、金を全部出すという現状を客観的にみれば対等であるとは到底言えないし、ルワンダメンバーたちも言われるがまま活動することに何の違和感もなかったように見受けられた。やればやるほど日本人とルワンダ人が対等でないことを痛感した。しかし相互理解を深めるという理念のもとで相互の国を行き来するのは絶対に欠かせないし、ルワンダで交流した学生のひとりでも多くに日本の文化、社会を見てもらいたいという気持ちはある。金銭面での変化を望むのは難しいが、活動内容に関してルワンダ側にもっと真剣に考えてもらいたい。これからは「日本に行ける」から「日本で何をするか」というレベルにステップアップする時期に入らなければならないと思う。ルワンダでも日本ルワンダ学生会議として固有の組織が設立したようだから、新リーダーとメンバーたちの今後に期待しよう。

大変な時間と労力をかけた第 3 回学生会議が終わった今、何より大事なことは、この成功に慢心せず、燃え尽きず、この活動を継続することである。満足してしまっているメンバーなどおそらくいないだろうが、もし私たちがこの活動をやめてしまえば、どれだけの人がルワンダという国に目を向けるだろうか？虐殺・内戦という情報から踏み出す日本人はどれだけいるのだろうか？また私たち自身もまだまだ実績のない団体であるし、社会的な知名度はない。日本社会にもっと強いインパクトを与えたい。文化交流、民間外交というソフト面での繋がりこそ人間同士の信頼関係を生むのではないだろうか。ルワンダでは 10 年後 20 年後に、日本を知り日本が大好きな彼らが国を動かしているかもしれない。その時までに学生をもっと日本に呼んで、「日本通」のルワンダ人を増やせれば外交戦略の選択肢も増えるだろう。ゆくゆくは国家として日本とルワンダが対等で緊密な外交関係を築くことができればいい。

宮本寛紀

横浜市立大学国際総合科学部
国際文化創造コース１年

私は『日本ルワンダ学生会議』に加入したのが、2009 年の 12 月に入ってからであったため、他のメンバーよりも様々な面で知識は浅く、正直に言えば、「第 3 回日本ルワンダ学生会議」そのものが、どのようなものになるのか、全く想像できなかった。また、ルワンダ人に会うことも初めてであったため、右も左もわからない状態で、今回の企画に参加したといっても過言ではない。

私は、彼らが東京にいる間の参加という短い期間であったものの、たくさんのことを吸収できたと思う。今回の来日で、特に印象的だったのはルワンダ人のダンスである。

話では聞いていたものの、生で見ると迫力が違った。

Calliope の歌や太鼓に、伝統的な衣装をまとった男性陣の力強いダンス、

女性陣のしなやかな動きは、言葉では表しきれないほど感動した。

実際には、5 人ではなくもっと大勢でやるものだと知り、ルワンダで本場の INDANGANUCHO のダンスを見てみたいと強く感じさせてくれた。

また、学生会議では日本・ルワンダ両方の歴史や社会問題と現状などをディスカッションし、感じたことは、日本で起きている問題などもルワンダに置き換えて考えることができ、逆に日本にもルワンダでのことが還元できるのではないかということだった。「相互理解」とは、こういうことなのかと初めて実感することができた。

私にとってルワンダは、「ホテル・ルワンダ」や「ルワンダの涙」といった 1994 年の大量虐殺を描いた映画で初めて知ったということもあり、"大量虐殺"というイメージが様々な固定観念を生んでいたように感じる。何を話せばいいのか、こんなこと聞いてもいいのだろうかなどと、勝手に心配をしていたあまり、自分から話しかけられずにいた。しかし、そんな心配は一切いらなかった。Calliope が「なんでそんなにシャイなの？もっと話そうよ。」と言ってくれたのである。

今までは、本や論文で固い面ばかりにとらわれていて、本来の人間らしさのような柔らかい面を忘れてしまっていたのである。だが、実際に会って話をしてみると、そういった固定観念を拭い去ることができ、同じ学生として、そして一個人として接することができた。

たしかに、過去に悲惨なことを体験しているという事実を変えることはできないが、彼らはそれを乗り越え、次に進もうとしている。そんな彼らが、カッコよく見えた。

今回は、私たち日本人がルワンダに行くのではなく、ルワンダ人が日本に来るということで、ルワンダの学生に日本がどう映ったのがとても気になる。日本はルワンダ

よりも、遥かに交通や情報のインフラ、技術などの面で進んではいるが、それらの発展によって何か失われているものがあるのではないかということも感じた。人と人とのつながりの希薄化もその中の一つであると思う。

私のこれからの課題としては、自国の日本についてもっと知ることやルワンダについての知識を増やすこと。また、コミュニケーションの手段として必須である英語の能力を上げること。
そして、ルワンダに行けることになれば、彼らと様々なテーマでディスカッション出来るようになりたいと思う。

コラム　三朝温泉＆ルワンダの人との出会

正直最初は戸惑った。

言葉も通じないような異国の人たちと、果たして仲良くなどなれるのだろうか・・・。

そんな不安とともに、私たちの５日間が幕を開けた。

「日本の冬」というフレーズで、彼らとの思い出をたぐり寄せてみるなら、やはり忘れられないのが初めて雪を見たときの彼らの反応だ。

我が家に到着した日の夜、女子組メンバーで話をしていたときのこと、ナディーンから「まだ一度も雪を見たことがないので、雪を見てみたい。」という話を聞いていた。

小さい頃から毎年降り積もる雪を見ている私には、ナディーンのささやかな願いを微笑ましく感じた。その夜、ナディーンの小さな願いが叶うようにと考えながら目を閉じた。

翌朝起きてみると、窓の外にはちらちらと雪が降り積もっていた。

どうしようもなく嬉しくなってしまった私は、昨夜の大宴会のせいで、まだつぶれている彼らの部屋に雪が降った旨を伝える置き手紙を置いておいた。やがて起きてきた彼らは、それを見てくれたのだろう、窓の外を見て感嘆の声をあげていた。

皆、初めて出会う雪にとても嬉しそうな反応を見せてくれた。

そんな彼らのへんに飾らない、素直に感情をさらけだす心は、目の前に広がる雪なんかよりも遙かにキレイに感じた。

異文化を感じた点もあれば、逆に予想外のリアクションに驚いたこともあった。

その一つが、みんなで温泉に入ったときのことだ。

ルワンダには湯船に浸かる習慣がないと聞いていたので、「三朝温泉」に招待されたときは、「きっとみんなで入るのは、いやがるんだろうなぁ。」と一人思っていた。優しげな女将さんの笑顔に出迎えられて、温泉のある方へと案内される。すると意外にも、先手を切ったのは私や早紀さんの日本チームではなく、マリーン・ナディーンのルワンダ女性チームだった。

こちらがびっくりするくらいの威勢のいい脱ぎっぷりで、躊躇う様子もなく風呂場の方へ向かっていった。

初めての人たちの前だったので最初恥ずかしがっていた私も、恥ずかしさごと脱ぎ捨てて、みんなで温泉を楽しんだ。

湯船の温度は２人には熱すぎたようで、力いっぱい水を足し、半ば温水プールのような温泉だったが、その中でめいっぱいガールズトークを楽しんだ。温泉は、今でも私の忘れられない思い出の一つだ。

今こうして彼らと過ごした時間を振り返ってみると、本当に夢のような５日間だったような気さえする。

つたない私の英語を一生懸命に聞いてくれたカリオペ。人生ゲームで借金だらけになってしまっても絶えず笑顔で、みんなを笑わせてくれたエフレム。若干女の子好きな面も見えたけれど、優しくてたくさん話しかけてきてくれたモーリス。珍しいものに興味を持って、たくさん笑いかけてきてくれたマリーン。恥ずかしがり屋だけれども、誰よりも真剣に自分の思いを伝えてきてくれたナディーン。

あのときみんなで撮った写真を見るたびにみんなのことを思い返す。 地図の上では、距離だけ聞いたら、ルワンダという国は確かに遠い国なのかもしれない。けれども私は、彼らと、ルワンダと、心のすぐ側で今もしっかりと繋がっているような気がしてならない。

今私は、大学受験に向けて、勇気を持って毎日を頑張っている。東京方面の大学に合格して、絶対に「日本ルワンダ学生会議」の一員になりたい。そしてもう一度、今度は私から彼らに会いに行こうと思う。

自由に思いを伝えられる「言葉」を持って。日本ルワンダ学生会議のみなさん、その時はどうぞ宜しくお願いします！

I'll definitely go to see you. So don't forget me!

（特別参加　高校生　岩垣　梨花）

【付録】

＜協力いただいた方々＞

団体名称／氏名・所属	協力形態
アントワンヌ・ムニャカジ・ジュル駐日ルワンダ共和国大使とご家族の皆様	当企画へのご支援
ミシェル・マクーザ駐日ルワンダ共和国大使館一等書記官とご家族の皆様	
財団法人　三菱 UFJ 国際財団	当企画への助成
独立行政法人　国際交流基金	当企画への助成
広島大学平和科学研究センター 篠田英朗准教授	ピースビルダーズの紹介
特定非営利活動法人ピースビルダーズの皆様	基調講演、活動紹介
Hiroshima Interpretor for Peace 代表　小倉桂子様	基調講演
鳥取大学農学部 生物資源環境学科　北村義信教授	基調講演
鳥取大学農学部　吉田勲名誉教授	北村教授の紹介
鳥取大学　乾燥地研究センター　辻渉助教授	乾燥地研究センターの説明
鳥取大学農学部の皆様	学生会議への参加
鳥取県倉吉市西中学校　岩垣和久校長　教職員・生徒の皆	中学校訪問への協力
JA 鳥取中央の皆様	農協施設訪問への協力
ホームステイ先　黒川家・長谷川家・太田家・ケーオファー家・中本家の皆様	ホームステイへの協力
中居旅館様	温泉の提供
日本アムウェイ合同会社の皆様	ダンス会場の提供
ダンスイベント参加者　神田 亜紀様	ダンスイベントへの協力
SUGEE（杉崎 仁克）様	ダンスイベントへの協力
多摩美術大学　ジャンベ部の皆様	
早稲田大学　東京花火の皆様	
ルワンダファミリーの皆様	イベントでのブースの出展
アフリカ平和再建委員会（ARC）の皆様	
NPO 法人　ルワンダの教育を考える会の皆様	
カンベンガ・マリールイズ様	基調講演
NPO 法人　スープの会の皆様	会議室の提供
京都　妙心寺春光院 川上全龍副住職	日本の宗教を紹介
京都　妙心寺退蔵院　松山大耕副住職	春光院との交渉を仲介
	退蔵院の紹介
ルワンダ国立大学	後援
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター	公認

<写真館＞

<メディア掲載>

海 新 聞

（第3種郵便物認可）

地元文化継承へ懸命活動

【法勝寺歌舞伎保存会】（南部町）

▷▷ 17

南部町の「法勝寺歌舞伎保存会」（青砥正幸会長）は1955（昭和30）年に発足。幾度かの存続の危機を乗り越え、地元ならではの文化を後世に引き継ごうと懸命に活動している。

幕末期に宿場町として栄えた法勝寺地区では、多くの旅役者との交流から法勝寺歌舞伎が誕生。大正末期までは芝居小屋が設けられ、にぎわいを見せていた。

保存会は昭和の大合併後、「一式飾り」などと共に郷土文化の伝承機運の高まりを受け結成された。これまでに活動を休止した時期が3度あったが、現在は子どもを含む約40人が所属。後継者を育成するため、子ども歌舞伎にも取り組んでいる。

今年春の一式飾りの会場で凛（りん）とした姿を披露するメンバー＝法勝寺歌舞伎保存会提供

育成へ子ども歌舞伎にも力

引っ込み思案だった女の子が、高校入試の面接で歌舞伎を演じて合格したという逸話もある。青砥会長は「文化だけでなく、人を成長させる力にもなっているんだな」としみじみ語る。

認知度が高いとはいえない法勝寺歌舞伎。だが、保護者が化粧や大道具などの裏方を務めるなど、家族から親せき、知人へと子供たちの懸命な姿に関心を持つ人が増えている。青砥会長は「家族を通じて保存会や地域が一つになっていくようだ」と目を細める。

（西部本社・高塔正範）

もっと 読みたい　はっと 気付く　ほっと 安らぐ

夢持つこと伝えたい

ミス・ワールド決勝を体験

佐々木えるざさん来社

南アフリカのヨハネスブルクで開かれたミス・ワールド世界大会

21日、東京都港区の新日本海新聞社東京支社を訪問し、大会を終え

た。決勝では、ステージから両親ら鳥取から駆け付けた応援団を見

約5週間にわたる大会期間の中で、各国代表者と交流を深めたというえるざさんは「一生の友達ができた」と話し、「今後は、世界に出ていけるような仕事に携われたら」と笑顔。「この経験を地元の小学校や中学校で語って夢を持つことの素晴らしさをたくさんの人に伝えたい」と意気込んでいた。

ダンス通じ平和の輪

ルワンダの大学生と交流

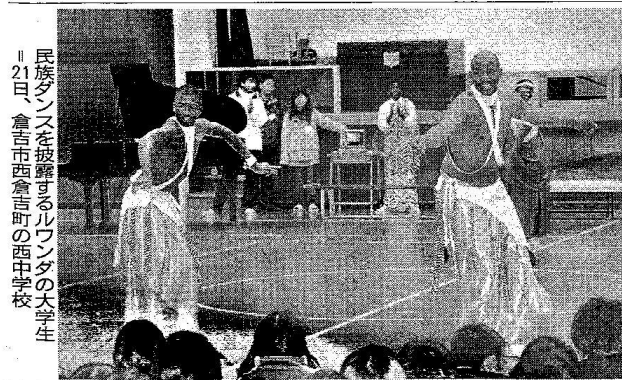
倉吉西中生

倉吉市西倉吉町の西中学校（岩垣和久校長）に21日、アフリカ中央部に位置するルワンダの大学生が訪れ、同校の2年生123人と交流を深めた。

同校を訪れたのは、ルワンダの国立大学に通うマリーンさん(22)ら5人。大学のダンスサークルに所属し、ダンスを通じて平和の輪を広める活動を行っている。

今回は、日本ルワンダ学生会議が27日に東京で開く「学生による世界平和会議」に参加するため来日した。

一行は授業を体験し、生徒たちと一緒に給食を食べたほか、体育館で行われた交流会では、民族衣装に着替えてルワンダの踊りを紹介。同校の生徒らがお返しに、ソーラン節や合唱を披露した。

最後に、マリーンさんが「私たちを迎えてくれて、ありがとうございました」と日本語であいさつ。生徒を代表して林遼太君(14)が「ダンスや歌を聞いてルワンダの文化を知ることができた」と感謝の言葉を述べた。

民族ダンスを披露するルワンダの大学生＝21日、倉吉市西倉吉町の西中学校

2009年12月22日（火）　日本海新聞より

はない。むしろ、経発が貧富の差をよりくしているという主ある。つまり、一部裕層だけが利益を得貧困層はいつまでもいままという不平等際に行われているのる。

争は、貧しいからとて必ずしも起こるわはなく、いくつかのが複雑に絡み合っているものなのである。

紛争解決のための活動は？

力による争いが長引合には、国連軍が介て紛争を収拾するこある。また、紛争後安維持のために国連維持活動（PKO）がしばらく駐留し、の構築を手助けするもある。民間の非営体（NPO）は、イラ整備や教育、医療様々な分野で支援をている。

かし、援助というもときに紛争を悪化さしまったり、苦しんる人々に行き届かなともあるのが現実で

こで、国連による力ジアでの活動を紹介い。カンボジアで

て多くの人が犠牲になったこの国に対して、国連は1992年にカンボジア暫定統治機構（UNTAC）を設立し、翌93年には民主的な総選挙を実現させたのである。

そのとき、国連ボランティアの多くのスタッフが現地で支援活動を行い、選挙の方法などについての市民教育に力を注いだ。読み書きができない人に投票用紙の書き方を教え、誰に投票したかがばれたらその反対勢力から命を狙われるという不安を抱える人には、投票は匿名で誰にもわからないということを何度も粘り強く伝え続けなければならなかったという。

次第にスタッフは現地の人との信頼関係を築いていったが、選挙直前になってUNTACに不満を抱く政党などが選挙の妨害を始めた。やがて大規模な暴動や虐殺にまで発展し、支援活動を続けていた日本人のスタッフも命を落としている。

紛争後に国を建て直し、自立した国家にしていくうえで、政治体制の確立は不可欠だが、人々の心に残っている争いの種は簡単に消えることはなく、復興のための作業は困難を極めるのであ

◎私たちにできることは？

では、このような紛争問題を解決するために、私たち日本人の立場から何ができるかを考えてみたい。

今回話を聞いた瀬谷ルミ子さんを含め、現地で直接支援活動に携わっている日本人は世界中にたくさんいる。高い給料が貰えるわけでもなく、日本と比べたらはるかに厳しい生活環境の中で、ときには命の危険にさらされながらも必死に活動している人は、当然だが紛争で苦しむ人たちの役に立ちたいという思いが人一倍強い。

しかし、それだけでは現地でやっていけない。紛争の現場はあまりにも悲惨で、理不尽なことも多く、どうすることもできないという絶望感に襲われても無理はないのである。それでも懸命な支援活動を続ける人には、何事にも挫けずに立ち向かっていく信念がある。

また、瀬谷さんが言うように、日本にいても紛争解決のためにできることはたくさんある。紛争は、政治的な思惑や人間同士の憎しみなどが入り

争解決のためにもっと貢献できるに違いない。また、学生にしかできないこともきっとあるはずだ。

これまでいろいろと考えてきたが、私たちにとって一番問題なのは、紛争に対して無関心でいることではないだろうか。自分とは関係がない遠い地域での出来事なので、ニュースで悲惨な状況を知っても、何か行動しようとまではなかなか思えない。

しかし、紛争地域から来た留学生の友達がいたらどうだろうか。身近な知り合いにアフリカや中東の人がいたら、もはや他人事ではなくなるはずである。

紛争を含め、世界の様々な問題に関心を持つ第一歩として、その国の人と交流する機会を積極的に作っていきたい。

日本ルワンダ学生会議の古屋さんが、お互いを知ることで遠く離れた国の人に対しても思いやりの心を持つことができると言っていたが、まさにその通りだ。

1人だけで何か大きなことはできないが、多くの人が立ち上がって力を合わせれば、苦しんでいる現地の人たちに平和を

本一巳・山形辰史編、岩波ジュニア新書）、『14歳になったら考える地球を救う仕事①平和な世界を作りたい』（くさばよしみ編著、汐文社）、『諸刃の援助―紛争地での援助の二面性』（メアリー・B・アンダーソン著、大平剛訳、明石書店）、『平和のつくり方―紛争地帯の国連ボランティア』（国連ボランティア計画編、清流出版）、『紛争から平和構築へ』（稲田十一・吉田鈴香・伊勢崎賢治著、論創社）、『紛争後の教育再建―開発援助としての教育支援』（世界銀行編、村上美智子訳、シュプリンガー・フェアラーク東京）、『国境なき医師団は見た』（国境なき医師団編、鈴木主税訳、日本経済新聞社）

国際交流に参加してみよう!!

いきなり紛争問題について考えようと思っても難しい。まずはその国の人や文化に触れることが、関心を持つきっかけになるのではないだろうか。

今回、日本ルワンダ学生会議（JRYC）が主催する「JAPAN☆AFRICA MUSIC &DANCE SHOW ～文化でつながる日本とアフリカ～」と題したイベントに参加することにした。

JRYCは、日本とルワンダの学生の交流を通して、双方の歴史や社会問題について学び合い、相互理解を深めることを目的に活動している。今回の企画は、約1年半かけて準備し、ルワンダの学生を初めて日本に招いて開催された。

イベントでは、両国の学生による音楽とダンスのパフォーマンスなどが披露され、会場は大きな盛り上がりを見せた。参加者にとっては、文化を通してお互いの国のことを知り、世界の平和について考える機会となった。

学生によるコラボレーションが実現した

日本ルワンダ学生会議代表
早稲田大学法学部3年　古屋亮輔さんに聞く

――この活動に参加したきっかけは何ですか。

将来は国際社会で働きたいと思っているので、アフリカに行って自分の知らない世界を見たいというのがきっかけでした。

ルワンダで現地の学生と交流し、生活をともに

イベント後には参加者同士が交流を深めた（右端が古屋さん）

ています。

――活動を通してルワンダに対するイメージは変わりましたか。

最初は、アフリカの人というだけで距離感を感じていました。しかし、一緒にディスカッションをしたり踊ったりしているうちに、ルワンダの学生と日本の学生は考え方や価値観があまり変わらないことに気づきました。同年代の友達として普通に仲良くなれるということがわかったのです。

――ルワンダの学生から学んだことはあります

も強く、そのためにもすごく勉強しています私たちも同じように若としての責任があるので、彼らの意識の高さ勉強になります。

――「相互理解」の要性について。

自分のことを知って相手のことを知るというのが人間関係の基本す。そうすることで離ている国の人でも関心持てるし、そこで何か件があれば他人事ではく自分のこととして考られます。

相手を思いやること平和への第一歩だと思ので、そういう点で相

2010年1月10日(日)　中央キャンパスより

おわりに

「虐殺後の社会を知りたい」、そんな単純な動機で始めたルワンダ・プロジェクト（現日本ルワンダ学生会議）。アフリカにある遠い国ルワンダ、私はそこに「他人事ではない何か」があるように感じたのだ。

隣人同士が殺し合うという惨劇を経験した土地で、「人間の弱さと強さ」に向かい合いたいという考えがあった。現地を訪問した際には、緑に霞む美しい朝焼けに、学校へと急ぐ子どもたちの会話を聞きながら、同じ現在にいる人々の生活を肌で感じた。そこには活字で学んできた「歴史」としてのルワンダとは別の世界が広がっていた。ルワンダ人はどちらかといえばシャイで大人しい。そんな彼らにはすぐに親しみを感じた。

虐殺の被害者が祭られている共同墓地は、釘で打ち付けられたような静けさで覆われていた。死者は、声のない痛みと音のない涙で、冷たい静寂から私たちの胸に何かを訴えていた。ルワンダの虐殺は人の手で引き起こされたものだ。王国時代から共有言語・文化を持っていたこの国では、植民地支配以降、「民族」間の政治闘争が創られていった。計画された「民族」憎悪は内戦の混乱の中で 100 万人の犠牲者を生んだ。背後には隣国コンゴ民主共和国の資源を狙う諸外国の思惑も存在していたとも言われるが、未だに虐殺の真の原因は突き止められない。しかし、アイデンティティを理由に憎悪を抱き、権力に服従し、生き残るために人を殺め、あるいはもっと恐ろしい快楽に自忘し、大きな悲しみを背負った人間の内面には我々との共通点があっただろう。それは、憎しみと死の恐怖と服従という「人間の弱さ」である。一方で、現在のルワンダ社会は、政府主導の復興に国全体で動き出している。奇跡的に見える現在の安定状態は違和感すら感じさせたが、それ以上に、家族を奪った者を許すと決めた被害者、虐殺孤児やストリートチルドレンを助ける大人たち、今日を生きるためにとにかく前に進むしかない多くの人々は、人間が持つ「強さと希望」を私に教えてくれた。

そんなルワンダという国から、5 人の若者が日本にやって来た。関西空港で彼らを出迎えたときの興奮は、この日本招致に懸けてきた私達の思いが遂に実現する、という歓喜に満ち溢れるものだった。ルワンダを出発してから 5 日間。長旅の疲れはあったはずだが、彼らは意外なほど元気な顔で現われた。

「日本に連れて行ってください。」

2008 年 9 月ルワンダに渡航した私は、ルワンダ国立大学での交流の際、繰り返し投げ掛けられたこの言葉を胸の深くに留めた。非情な運命と未来への使命を背負った同年代の学

生の情熱に、私の内面で何かが動かされた。日本ルワンダ学生会議（旧ルワンダ・プロジェクト）は「相互理解」と「対等な関係」を理念にしている。学生会議・交流を両国で開催することによって、理念もより高いレベルで実現されるはずだと考えた。何より「彼らに日本を見せたい」、そんな純粋な応答から日本招致企画は始まった。

帰国後、すぐに具体的な日程と企画を組み財団に助成申請をした。とにかく団体として全てが初めての試みなので、団体設立 1 年目にして本当に日本招致が達成できるのか当初はかなり不安があった。それだからこそ、様々な人からアドバイスを頂き、まず絶対条件である資金確保に奔走した。　開催が保証されないままに、訪問地の下見や協力者との打ち合わせなど準備を続けていた。代表ではあったものの、この間、自分自身が就職活動をしなければならなかったので、他のメンバーに主な実務をお願いした。4 月に企画への助成が決定した時はいよいよ我々の「思い」が現実となるのだと意気込んだ。

9 月には、新たなメンバーと共に自分自身 2 度目のルワンダ渡航と、代表としての第 2 回学生会議に臨んだ。前回の会議の際には実質的なルワンダ側リーダーのカリオペのみが発表するという不均衡があったが、第 2 回ではなんと 14 名もの学生が発表を名乗り出ていたのだ。日本招致が決定していたことも相まって、ルワンダ側での学生会議に対する参加意識と動機付けの高まりを感じさせられることとなった。

帰国してからは、第 2 回学生会議の報告会と日本招致の資金集めに追われていた。そこに、何と予期せぬ開催日程の前倒し。理由は大学側が授業期間に学生を公式に派遣することが出来ないからだという。企画段階では、運動部の遠征など特別な行事への参加であれば大学側はこれまで派遣を許可してきたが、「教育改革」という大統領の一声で状況が変わってしまったのだ。彼らの提案は、授業が休みの 12 月から 1 月にかけての開催だった。助成金は今年度にしか適応されず、このチャンスを逃せば一年見送らなければならない。焦りと意見のぶつかり合い、多忙な打ち合わせの日々に団体が分裂しかけていた。送金、VISA 申請、航空券購入など想定外の障害にぶつかる度に、「今回は無理かもしれない」、と心が折れそうになった。各協力者との企画調整もぎりぎりまで続いた。最終的に彼らを日本に運んだのは、現代表である古屋の情熱、メンバー一人ひとりの責任感、各協力者の温かい理解、ルワンダ側の迅速で粘り強い対応だった。最終的に、目標達成という結果が全てを帳消しにしてくれた。

短くも濃密な日本での 3 週間で、彼らは何を得たのだろうか。人口の最も過疎な鳥取の生活に溢れる先進技術に驚き、京都の寺が刻む千年の歴史に思いを馳せ、広島が歩んできた死と復興の土を踏みしめ、東京の高層ビルの先の先に目線を定めていた。彼らは、日本人が共有している歴史、勤勉さや緻密さ、そして戦後復興の軌跡に大いに刺激されたと語った一方で、自殺が日常と化し人間関係の薄弱となる日本社会へ警鐘を鳴らしていた。熱気溢れる議論に、時にセンシティヴな虐殺の話題で意見の衝突を経験しながら、お互いの

国が抱える問題や価値観を認識し合っていった。しかし、やはり私には虐殺の真の犯因と予防策はわからない。それでも一人の人間として出会った彼らの過去と今置かれた現状、そして未来への熱意を少しでも理解できたと信じている。

日本招致企画、そして私のこの 2 年間を総括することは難しい。ここで、出会ったもの、感じたこと、考えたこと、を表現するのは、断定的な直線で複雑な曲線の立体を描くように、どこにフレームを置くかでその形を変えてしまうものだからだ。そして、その解釈も文脈によって一定とは限らない。おそらく、折に触れこの経験を振り返ったとき一つ一つ何かを学び取っていくのかもしれない。今言えるのは、彼らから得た大きな情熱を持って今後を生きていきたいということだ。そしてこの経験を活かし何かの形で貢献出来ればと思う。

卒業を控え、日本ルワンダ学生会議メンバーとして最後の文章を綴る今、私は代表として非常に恵まれていたと感じている。多彩で個性溢れるメンバーと情熱を共有し大きな企画を実現することができたからだ。

また、各協力者のサポートは、言うまでもなく、不可欠の要素だった。助成金を提供して頂いた各財団、推薦状や VISA 申請で協力を頂いた駐日ルワンダ大使館、忙しい中日程変更に対応してくださった訪問・見学先の方々、惜しみない厚意で受け入れてくださったたくさんの家族には、この場を借りて心より感謝の意を表したいと思う。

そして、日本・ルワンダ両メンバーの皆と情熱と喜びを共有できたことを一生の宝として今後の人生を生きていこうと思う。永遠に未完成の日本ルワンダ学生会議の今後の発展に大いなる期待を残して、私の任務をここに終える。

日本ルワンダ学生会議 第 1 期代表（2009－2010 年）
千田　大介（ちだ だいすけ）
早稲田大学教育学部 4 年

この事業は三菱 UFJ 国際財団・国際交流基金の資金協力の下で行われました。
今回の日本招致を、経済的な面で支えてくださった両財団の皆様に改めて深く御礼申し上げます。

2010 年　3 月 1 日　初版発行
発行元　早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）公認
　　　　日本ルワンダ学生会議
編集　　岩垣　穂大